



特233
923

中村春堂指導

春書道講座

第四卷

日本書道學院

Handwritten notes in cursive script, including the characters '春' and '書'.

始



特 233
923

中村春堂指導

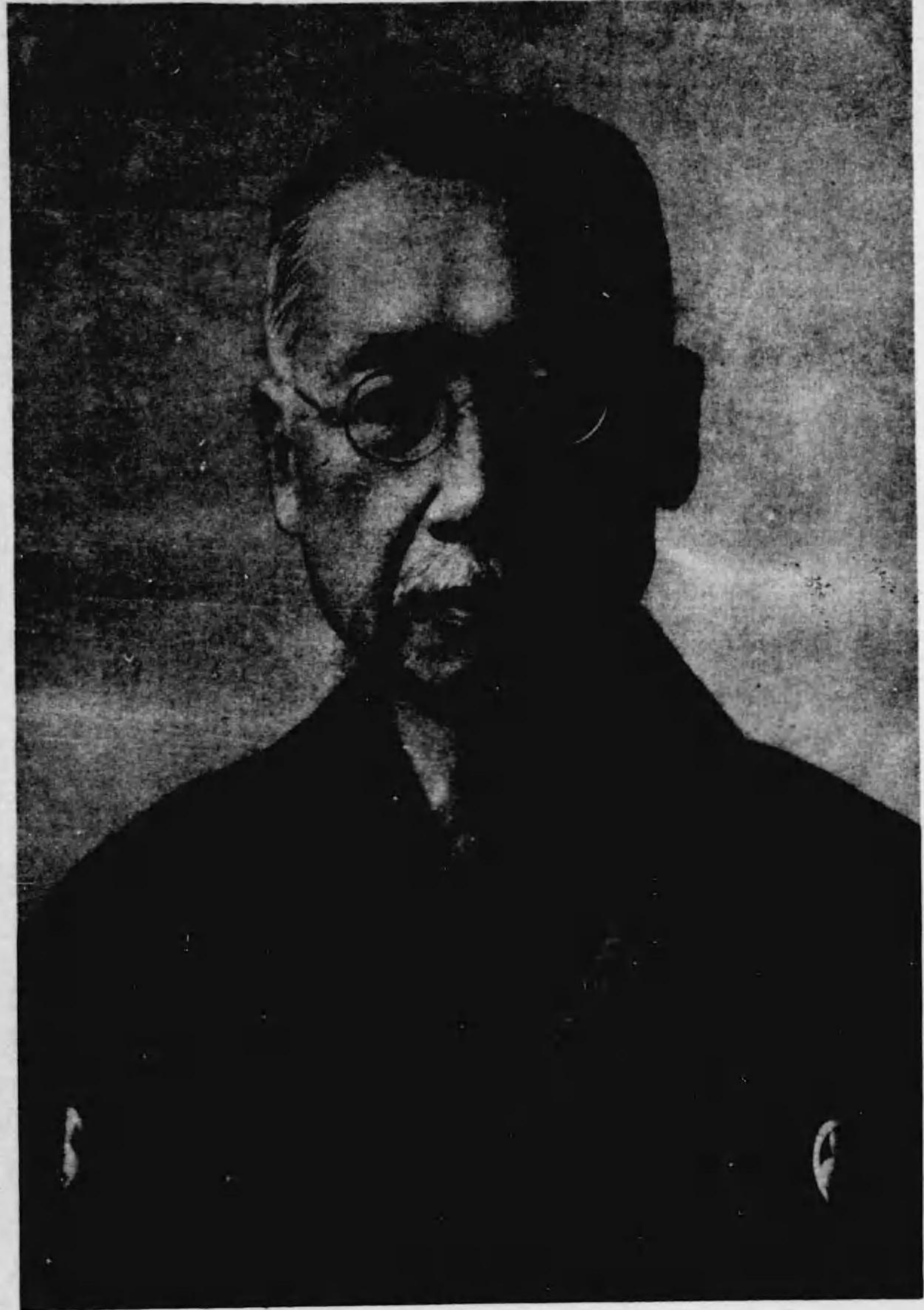


道講座

第四



東京 日本書道學院



中村春堂先生御近影 日本書道學院院長

臨書作手本

中村春堂先生成宮の一節

(本原の品せ書臨りよに本手の左)

皇帝避暑
之宮此則隨之仁

臨書作品

中村春堂先生御臨書

(のもしせ書臨りよに本手の左)

皇帝避暑
九成之宮

(本卷學習法講義参照)

臨書本手

歐陽詢九成宮第一

(本原の品作の右)

皇帝避暑乎九成
之宮此則隨之仁

臨書手本

子昂大書帖之一部

(左の品作の本原)

大學之道在明明德
在新民在止於至善
知止而后有定定而

(本卷學習法講義参照)

臨書作品

中村春堂先生御臨書

(右の品作の本原にせしめ)

大學之道在明
明德在新民在
止於至善知止

春書道講座

第四卷目次

卷頭講話學習法講義

一五六

連綿體手本講義

一一五〇

調和體手本講義

一一一八

日本書道史

一一二四

科外講話文字の發生

一一一〇

臨書作品

中村春堂先生御臨書

(のもしせ書臨りよに本呼の右)

大學之道在明
明德在新民在
止於至善知止

春書道講座

第四卷目次

卷頭講話學習法講義

一一六

連綿體手本講義

一一五〇

調和體手本講義

一一一八

日本書道史

一一二四

科外講話文字の發生

一一一〇

練習用紙

形臨について

形臨と云ふのは、前にも云つた通り、手本に書かれた文字の形を真似る事でもあります。

云ふまでもない事ですが、この場合に於ても、文字の形を真似る事だけが目的ではありません。文字の形だけを真似るのであれば、ペンキ屋さんの字のやうに、何處上から塗つて書いても、また筆順に頓着なしに書いても、一向差支へないわけでありませう。が、かゝるものが書でない事は、云ふまでもなく明らかなる事でありませう。元來、手本を真似ると云ふ事は、手本の字に似ながら、結局は手本のやうな字を書き得る能力を養ふのが目的でもあります。随つて、形を真似ると云ふ事は、形を真似ながら、運筆を真似なければ、眞に手本の文字を真似たとは、云ひ得ないのであります。

意臨について

意臨は、前の形臨に較らべると、更に高級な練習法であります。意臨は前にもお話ししたやうに、運筆を真似るのでありますが、この運筆を真似ることは、即ち點畫に表現せられた筆者の個性にふれることであり、形よりは、手本の持つ味を、自分の個性を通じて、更に表現してみる方法であります。

自分の個性を通じて表現しやうと云ふ以上、その個性は、個性を十分發揮出来る程、十分に發達してゐなければなりません。初學の人々に困難な所以であります。

この場合の個性と云ふのは、取りも直さず、書道の上の、一見識——と云つても差支へありません。意臨については、こゝではこの程度のお話にておきませう。先で、今少し委しく、このお話をしてみたいと思ひます。

背臨について

背臨と云ふのは、手本で習つた字を、手本を離れて書いてみる方法であります。

よく見る事ですが、手本をみて書くと、大變よく書ける人が、いざ手本を離れて書くと、ちつとも書けない——かう云つた人がありますが、これは手本に捉はれて、十分之を咀嚼して、自分のもの——自分の實力としてゐない事から生れるのであります。

この缺點を矯正して、眞に手本のやうに書き得る實力を養成する方法が、この背臨であります。

この方法は、先づ手本について、十分に習つておきます。自分で十分だと思ふ位に習つたら、この次は、手本を伏せ、手本を見ないで、同じ文字を書いてみます。これを手本と比較してみるのですが

練習法について

以上お話しして来たやうに、臨書にも、いろいろの種類がありますが、之を現在の皆さま方の練習法にあてはめて云ひますと、先づ模書に就いて、十分に結體、點畫の長短大小や配置、文字の形、用筆法を練習し、それから形臨の練習を行ひ、背臨で自分のものにする——と云つた順序が、最も適當でありませう。意臨は、更に、之を宿題と致しておきませう。

次に意臨たるを問はず、臨書の上に注意すべき點をお話してみませう。

一、手本の見方について

手本の字を真似る以上、手本の見方がお粗末であつては、完全に真似る事は出来ないわけがあります。このお手本の見方を要約しますと、次の七項になりませう。

- 1、文字の外形
- 2、點畫配置
- 3、文字全體の筆の調子
- 4、點畫の形
- 5、點畫の肥瘠大小

最初の間は、誰れでも大變に違つた書き方をしてゐるものであります。之を手本について、一々、自分で朱を入れるなり、添削するなりします。それから更に又、背臨して、添削する——かう云つた方法で習つて行くと、遂には、手本を見ないでも、手本と同じやうな字が書けるやうになるものであります。

このやうに、手本を見ないでも、手本と同じやうな字が書けるやうになつた時は、即ち手本の字が、完全に自分のものになり切つた時であり、始めて、自分の腕が出来た時でもあるのです。

模書について

模書と云ふのは、手本を數寫しする方法を云ふのであります。

この方法は、初學の人達が、文字の形、點畫の大小、長短及びその配置、並に用筆法等を學ぶには、便利な方法であります。併し何と云つても、手本の文字を撫でるのでありますから、筆勢や筆力等を學ぶ事は、到底出来ない事を覺悟しなければなりません。

この方法を應用した練習用紙を、本講座の附録として付けておきました。この方法は用筆、結體のみ込める迄の練習と云ふ事にして、何時もこの方法を繼續す可きではありません。

6、筆意

7、筆をつける順序次第

二、手本の置き場所について

手本を縮密に見るためには、手本は最も見易い位置に置かねばなりません。この最も理想的な位置は、書く半紙の直ぐ左側に置く事でありませう。

之をあまり手本から離しておいたり、或は他の場所——即ち半紙の上、半紙の右等では、眼を疲勞させる事が多いばかりでなく、手本を見てから書くまでの間の時間も長くなり、十分にしつくりと行かない感じがありませう。

手本は出来るだけ、書く場所の近くに置く可きであります。

三、習ふ文字の大きさにについて

最初手本を見て習ふ場合には、少くとも手本と同じ大きさで習ふ可きであります。と云ふのは、手本より大きく習つた場合、たとへば、最初の畫を手本の一倍半の大きさに書いた場合、他の點畫も果して全部手本の一様半の大きさに書けるかどうかは、最初の間は甚だ難しい事であるからであります。

で、先づ最初の間は、手本と同じ大きさに書き、十分書き得るや

うになつてから、その大小を加減するのが順序でありませう。

四、同じ文字を何度も繰り返して習ふこと

この同じ文字を何度も繰り返して習ふ——何度も習ふことによつて、字體や結構や、運筆等を十分に覚え込むと同時に、指先に運動を記憶させる——と云ふ事は、習字上達の唯一無二の大道であります。手本を見ればよく書けるが、手本を放れると全然書けないと云ふやうな人は、この練習が十分でないからであります。

たゞ注意しなければならぬのは、あまり同じ文字を何度も練習してゐますと、つい飽きが来て、無責任に筆を運ぶやうになり、何度書いても同じ一つの缺點が矯正されないやうな場合がある事でありませう。こんな場合には、新しい文字に移つて、気分を一新し、更に又、元へ戻つて練習する——と云つた練習法がよいでせう。

又、細字の臨書は、三四回繰り返して先へ行き、後になつて又練習する——と云つた方法の方が、結果がよいと思はれます。

五、手本の比較

之は、第一號でもお話しした事でありませうが、一度手本について習つた文字は、更に手本について、十分に比較研究しなければなりません。かうして、厳正なる批判を下して、自分の間違つた處、悪い

癖はこの次には矯正するやうにし、善い處は之を守るやうにする——と云ふ風にせねばなりません。

かうして何度か繰り返してゐる中に、自然と自分の惡癖は矯正され、洗練された文字が書けるやうになるのであります。

たゞ徒らに數多く習ふ事に力を入れても、この後で批判すると云ふ事がなければ、上述の上に効果がない事を覺悟しなければなりません。

六、以後の心得

臨書の練習が終つたならば、次は背臨の練習に移ります。前にもお話しした通り、手本を見ないで書いてみる練習であります。之は臨書よりも、遙に興味と効果のある練習法である事は、少し練習して御覽になればよくお分りになりませう。

以上で、手本の字が自分のものとなつたならば、その次は、折角自分のものとなつた字を崩さないやう氣をつけねばなりません。例へば手紙一つ書くにしても、その度に自分の習つた手本の字を思ひ浮べるやうにするのであります。さうする事によつて、今まで習ひ得た字は、何時までも貴方のものでありませう。

以上、學習法、練習法について、いろいろお話しして参りましたか

何度も何度も習つて、これなら十分として、我ながらよく出来た—さう思へるのこそ、本當の清書として入朱を受ける資格のあるものと云へませう。勿論それぞれ上手下手がありませうが、字の上手下手は、この場合問題でない事は云ふまでもありません。自分の心をこめたもの、それが本當の清書と云ひ得るものであります。學習法講義の最後に、是非皆さんに守つて戴きたい事を簡條書きにしてみませう。

書道練習上の注意

- 一、どんな事があつても、毎日一時間以上は練習して下さい。一時間と云ふ時間が、どうしても取れない場合には、三十分づゝ二回でもよろしい。
- 二、練習は字数の多いのを以て宜しとするものではありません。要は眞剣、熱心、且つ慎重で、習熟すると云ふ事、正確であると云ふ事を、主として練習して下さい。字数の少いのは決して差支へありません。いやいやながらの練習は要に時間潰しに過ぎません。
- 三、本講座の手に就いて習つて居られる間は、手本以外—即ち私以外の人の書いた手本をしばらく習はないで下さい。

先へ行つてからならばともかく、現在では害あつて益がありません。

四、お清書が出来た上は早速入朱添削を受けて下さい。

五、お返しした入朱添削は、丁寧に玩味して、直された處は再び誤らない程度の決心を以つて、十分に習つておいて下さい。

以上、學習法については、長々とお話ししましたから十分お分り下さつた事と思ひます。本巻で、「學習法講義」を一先づ閉ぢる事に致します。かう云つたお話は、讀んだ當座はともかく、直ぐ忘れるものですから、時折は、讀み返して下さいますと、大變皆さんの御利益になりませう。

では、毎日一時間宛でも、皆さんの熱心な御練習を期待して居りませう。

御 注 意

本講義を十分讀まれた諸子は、巻頭口繪に掲げた臨書の手本及び作品を充分比較研究して、臨書の方法を會得されることを切に望みます。

連綿體講義

中 村 春 堂

私達は、楷書、行書、草書、片假名、平假名、變體假名と習つて参りました。そしていよいよ、連綿體の練習に取りかゝる處まで参りました。

云ふまでもなく、連綿體は、我が日本書道に於て、絢爛と咲き誇る華とも云ふ可きで、之あつて始めて、日本書道は、全世界に誇るに足る一つの藝術を創造し得たと云つて然る可きであります。

又、かう云つた高い立場を求めなくとも、前號で習ひました、假名や草書は、連綿體があつて、始めてその眞の價値を發揮し得るとも云へるのであります。

今一息とも云ふ可き皆さんのお習字のために、一層の御勉強を望んでおきます。

連綿體とは何であるか

連綿體——と云ひましても、お分りにならない方が多い事と思ひます。で、連綿體について、一通りお話し致しておきませう。

これは、前に平假名の處でもお話ししておきましたが、一體、平假名は、一字一字切り離して用ひられる事は稀で、多くは、二字或は三字、或はそれ以上續けて用ひられるのであります。之は、單に、平假名許りでなく、漢字の草書或は漢字と假名との交つた文の場合に於いても然りと申す事が出来るのであります。

この二字或はそれ以上の文字を續けて書く——と云ふことが、連綿體であり、さうして書かれた文字が連綿體であります。故で二字以上——と云ふのは、勿論、平假名、漢字、漢字交りの如何を問は

中云ふのであります。

これは、次の例を御覧になりますと、よくお分りでありませう。

(一) 恋々夜をよみ おろ夜をよみ

(三) ほろゝの免 ほろゝの免

(五) 君の歌を 君の歌を

(七) ひろくに ひろくに

(七)

(五)

(三)

(一)

(八)

(六)

(四)

(二)

右の挿圖の(一)は、各文字がそれぞれ獨立して書かれた草書であります。こう云つた草書を「獨草體」と云つてゐます。之に反して(二)は、各文字が、それぞれ續けて書かれてあります。「愛」の終筆は、次の「度」の始めに續き、「度」の終筆は「存」の始めに續き、「存」の終筆は、最後の「候」の始めにつゞく——と云つた工合であります。この(二)は、即ち連綿體であります。

(三)は、一字一字獨立して書かれた假名でありますが、(四)は連綿體であります。既にお分りのやうに(四)では、「徒」の終りがそのまゝ「る」につゞき「る」の終りは又次の「可」につゞき、「可」の終筆は最後の「免」に續いて居ります。

(五)の「君が歸は」はそれぞれが獨立した假名交り文であり、(六)は同じ文字の連綿體であります。

(七)の「ひとごと」と(八)の「嶺首」とは、更に極端に連綿された例——二文字或は三文字を、思ひ切つて一筆で、大膽に書いた例であります。

以上の例で、大體連綿體とはどんなものであるかがお分りになつた事と思ひます。

なぜ連綿體を學ぶか

連綿體とは何であるか、が、大體お分りになれば、更に進んで、

なぜ連綿體を學ぶのか、その目的を申してみませう。

連綿體は、既にお分りのやうに、何字かを續けて書く——従つて一字一字を切り離して書くよりは、それだけ早く書けるわけであり、この早く書く、と云ふ事が、連綿體の出來た第一の目的であり、生命であるわけでありませう。

そして、何字かを續けて書く——と云ふ處に、連綿體を、連綿體として、特に練習しなければならぬ理由があるのであります。何故かと申しますと、連綿體と云ひましても、二字或はそれ以上の字を、たゞ單につゞけて書くだけであれば、更に練習の必要はないわけので、至つて簡單なものであります。これでは、文字としての美しさは壞されてしまはねばなりません。

例へば「いとろ」を連綿して書く場合、たゞ單に續けて書いた、と云ふだけでは、例へ一字一字がどんなに立派に書かれてあつたにしろ、それは立派な連綿體とは云へないのであります。「いとろ」を連綿させる以上、そこに書かれた二つの文字は、連綿體にあつては、一つの文字として見なければなりません。二つの文字をつゞけて書き乍ら、一つの文字としての美しさを出す——これが連綿體の練習を要する處であります。そしてそのためには、つまり何字かを續けて書く場合には、一字一字引き離して書く時とは、多少とも文字の形を連綿させるために、變へなければならぬのであります。

す。そしてこの文字の形を變へると云つても、たゞ出鱈目に變へてしまつていゝと云ふものではありません。連綿された一群の字が、一つの纏つたものとしての美しさ——照應や釣合や結構體など——が、一字の如くうまく行つてゐなければならぬのであります。更に、分り易い例を引きますと、草書の崩し方があります。由來楷書を速く書くために行書が生れ、行書を更に速く書くために、行書を崩した草書が生れたのであります。だからと云つて、出鱈目に行書を自分勝手に崩した處で、草書とは云へない、と同じわけでありませう。

この文字を連綿する場合の字形の變化は、前に擧げた挿圖(第二頁参照)を御覽になるとよくお分りになりませう。

(一)と(二)、(三)と(四)、(五)と(六)を、それぞれ比較して御覽になると、(二)、(四)、(六)が、(一)、(三)、(五)に比べて、如何に變化されてゐるかが、お分りになりませう。何れも連綿體獨特の省略と變化が行はれてゐる事にお氣付の事と思ひます更に(七)、(八)に至つては、一層明確にお分りになりませう。以上お話しした事でお分りのやうに、連綿體は大變速く書ける事から、日常の文書や書簡等には、非常に重寶なものであり、缺く事の出来ないものであります。之が、連綿體の、實用的な價值と申せませう。

更に又、この連綿體は、速く書く事の實用的な立場から進んで、前にもお話ししたやうに、散らし書、その他に於いては、海外に誇り得るまでの美的價值の高いもの——にまでなるのであります。

連綿の基礎

連綿體の基礎——とも云ふ可きものは、二字の連綿——即ち二字連綿であります。この二字連綿に、十分習熟する事によつて、連綿の呼吸とも云ふ可きものも呑み込ませうし、大體の用筆に通ずることも出来ませう。

即ち二字連綿が十分に出来れば、若干の練習で三字連綿も書けませうし、同じやうにして、四字、五字の連綿も、さして難しくはなかりませう。

本講義に於ける連綿の練習は、この方法で進んで参りませう。

で、皆さんは、既に一文字一文字の練習は、十分お出来になつてゐられる事と思ひます。そこで、連綿で、新しく練習す可きところは、二つの文字の續け工合——即ち前の文字の終筆が、次の文字の起筆へ續く續き工合であります。この邊の研究を少ししてみませう基礎の練習の間は、先づ平假名から始めませう。これは、漢字も要するに同じ事で、平假名に習熟すれば、自然、漢字の場合にも應用が利くからであります。

そこで、平假名であります。いろは四十八文字を、その終筆の同じやうなものだけを集めますと、次の七種類になります。

終筆による平假名の分類表

第一種	あめろちわつらへの
第二種	むいおかふる
第三種	ひれん
第四種	せさきそたてにをとえこくも
第五種	まはほぬるねみなよ
第六種	うけりゆめみすし
第七種	や

右の表は、活字ですから、多少の相違はありませうが、

第一種は、終筆が右から左へ丸形の曲線を描いてゐるもの。

第二種は、その終筆が点であるもの。

第三種は、その終筆を右上にはね上げるもの。

第四種の終筆は、左上方から右下に向つて下がつて来て、大體引き拂はずに軽く抑へたもの。

第五種の終筆は結びになつたもの。

第六種の終筆は右上から下或は左下へ引拂ふもの。

第七種は前と反對、左上から下、又は右下へ引き拂つたもの

基本的な平假名では「や」の字一つであります。

以上は、平假名をその收筆によつて、分類したものであります。今度は起筆を分類して見ますと、次の三種に分れます。

イ 上の字の終筆が右方から左方へ来て、そのまゝ次の字の起筆となる場合。

ロ 上の字の終筆が中央からそのまゝ下へつゞく場合。

ハ 上の字の終筆が、右から下へ来て次の字の起筆となる場合。

一體漢字は、左上から始まつて、右下で終ると云ふのが原則であります。假名等にあつては、それが判然としない場合が多く、特に連綿させる場合等は、次の字を、左や右へ動かして、釣合をとる事がありますが、大體に於いて、つまり基本の形としては、右の三種類になりませう。

以上の各組合せを、それぞれ練習すれば、先づ基本的な、基礎の連綿に大體通ずる事が出来るわけでありませう。

練習について

今まで練習して来た文字は、大分大きいものでしたが、連綿の練習からは、少し小さく、即ち手本位の大きさで、練習して見て下さ

い。今まで大きい字を習つてゐたのですから最初は少し變でせうが、大字に十分習熟された方には、凡そ易々たるものがありませう。連綿を練習するにつれて、實際的な御注意をお話しますと、用筆筆は、鋒のあまり長くないもの、そして毛の相當に剛いもの

のよいでせう。勿論、搦きのものではありません。三號又は四號位の筆が丁度よいと思ひます。之を鋒の半ばより下だけ下ろし、下ろした鋒には十分に墨汁を含ませ、一連の連綿を一筆で書くやうに心がけます。

連綿體の姿勢

第一圖 第二圖 第三圖



執筆 之は今までは變りません。たゞ筆を持つ指の位置は、筆の軸の中央より稍下にします。持ち方は、今までと同じやうに、二本の指をかけるのでありますが、云ふまでもなく、あまり深く持たぬやうにし又強く持たぬやうにし、氣をつけねばなりません。

姿勢 提腕法又は枕腕法によるのが普通であります。(第一巻學習法講義第十三頁及び第十四頁参照)

ところで、其處で説明しましたやうに、中字、即ち半紙一行に十字位の大きさに書くときは、提腕法を用ひるのが宜しく、また木巻手本第二十七頁より三十四頁までにある位の細字を書くときは、枕腕法によるのが宜しいのであります。

手本第一からの連綿體の練習は、この提腕法に依つて載きます。先づ前頁寫眞の如く、左手を、指を揃へて自然に机上に置き、右手の腕は、机に軽く觸れる程度に動かします。この場合、筆の軸は當然心持ち右後ろに倒れますが、即ち穂先が向ふへやり氣味になります。この調子で書くと筆の毛が順になつて、滑らかに筆が走ります。

第一圖は「ふ」の書き始め、第二圖「ふろ」と續けて来て「ろ」を書き上げた筆が次の「は」へ移つた瞬間、そして第三圖で「は」を書き上げた筆は、こゝで一休みして、紙面を離れます。さて、まづこれ位で、十分姿勢と書き方がお分りになつたでせう

から、いよいよ練習にとりかゝりませう。

連綿手本第一

連綿手本第一は、前にお話した第一類に屬する字——即ち、終筆が、右上から左下へと丸形になつてゐる字であります。



「あて」の下へ来る「て」は、前にお話したイの場合、即ち、起筆が、左から起つてゐる場合であります。連綿につ

いて云ひますと、上の字の收筆が丸形でありますから、下への連綿をあまり急ぎすぎますと、急迫した、せゝつこましいものになり勝ちでありますから、十分注意を要します。これは、挿圖△印あたりまでは、十分に書き切つてから、始めて下の「て」の起筆に向つてさつと筆をやると、丁度よいでせう。下への連綿を急ぐと、挿圖△線の處が、どうしても手本のやうに丸味を持たずに、げつそりとして、尙「あ」と「て」の字間も、手本について注意して習つて下さい。

一字一字の書き方については、今更にお話する迄もあくお分りてありませう。挿圖○印——「て」の終筆は、はねるのではなく、輕

く筆を抜くやうにするのであります。
挿圖中央の線は、字の中心を示しました。



「あふ」
上の字は前と同じでありま
すが、下の字は、前の口の
場合、即ち起筆が中央から
始まる字の例であります。

連綿としましては、前と同じ要領でよいでせう。たゞ前の場合は
△印からさつと下へ行くのですが、この場合は、軽く中央へはねれ
ばよいので、まづ前者との相違は、それ位のものでありませう。た
ゞ注意しなければならぬのは、終筆を左へ持つて来ないので、挿
圖○印の處が得てして、開き氣味になりますから、開らき過ぎない
やう——と云つて又、狭くて窮屈になり過ぎないやう、手本をよく
見て練習して下さい。



「あし」
これは下へ来る字が、右下
から始まる例であります。
この場合「あ」の一部が
そのまま「し」になつてゐ
るやうなものですから、連綿を急ぐと、△印(上)が、下へ下がり

勝ちですから氣をつけて下さい。上の△印から、下へ眞直に引き下
げますと、「あ」の字の形が悪くなるばかりでなく、二字を一つと
して見た場合に、上の左が勝ちすぎます。それで挿圖點線の曲線の
工合に注意します。二つの△印の處で釣合をとるやうにし、最後は
心持ち右下へ筆を抜いて、上左の重さと釣合ひをとりまします。點線の
部分の曲線で、○印の開きを加減する心持ちが必要であります。
又、この連綿は、今までのやうに、今少しく中央よりまで「あ」
の終筆を持つて来てから、「し」へ連綿してもよいのですが、さう
すると「し」の形は、又多少變へなければなりません。これらの事
は、又先へ行つて練習することに致しませう。



「わひ」
「わ」は前の「あ」と同種
の第一種に属する字であり
ます。「ひ」は左から起筆
する字。前の「あて」の應
用であります。

この場合の「わ」の字は、前に一字として習つたものと、多少形
が變つて来ます。即ち挿圖左上の點線の部分が、上へ上がつてゐる
ことです。これは下へ字が来る場合、この部分が下にあると、多少
うるさくなるのを避けたのであります。



「わよ」
これは、下の起筆が右から
始まる例であります。
前の「あし」の場合は、
そのまま右下の起筆へ持つ

て来てもよかつたのですが、「わ」の字を、そのやうにしますと、
「あ」と違つて「わ」の形がつきませんから、終筆を略中央あたり
まで持つて来てから、下へつゞけるやうにするのです。下の「よ」
の字は、單體の時よりも、やゝ左に倒したのは、「わ」の第一畫と
重複を嫌つたからであります。

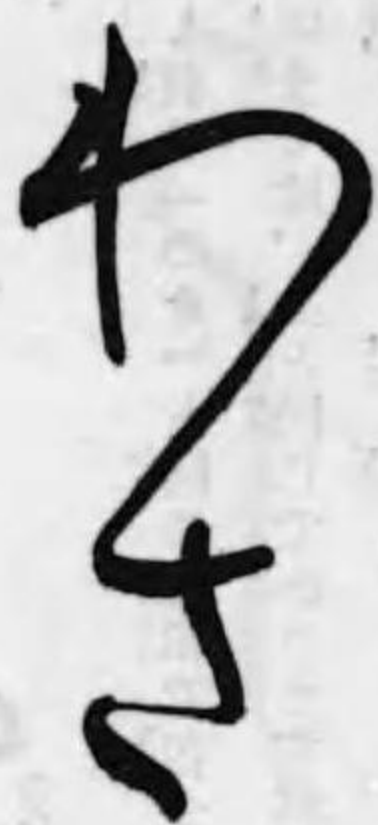


「わき」
これも今まで習つた「あて」
「わひ」等と同じ型の連綿
であります。「の」のやう
に、終筆が十分に丸味を持

つてゐるものは、特にその丸味をこわさぬやう、氣をつけねばなり
ません。「の」を十分に書き切つてから、始めて、次の起筆へ筆を
持つて行くやうにすれば、丁度よいでせう。
挿圖點線の部分は、連綿を急ぎますと、つい力の抜けたものにな
り勝ちです。しつくりと力を入れてから、すつと次へうつるやうに

連綿の要領は、前の「あて」と同じであります。この場合で云
へば、挿圖△印で押へる——こゝまでは、一文字と同じですが、單
字ならば、挿圖點線矢の方向へはねる處を、△印の處から、さつと
次の字の起筆へはねます。この場合、一氣にはねてしまひますと、
「わ」の字が、字としてのまとまりがつかなくなり、弱くもなりま
すので、同じはねるにしても、挿圖○印のあたりまで、力を抜かず
に、ぐうつと持つて来てから、さあつと次の字の起筆へ移るやうに
します。

字としての注意を云へば、「わ」の字の點線の部分は、上へ上げ
たが故に、字が上向いてしまはないやう氣をつけねばなりません。



「わあ」
これは前の「あふ」と同じ
種類の連綿であります。
下の字の起筆は、左から
始まつて居りますが、之は

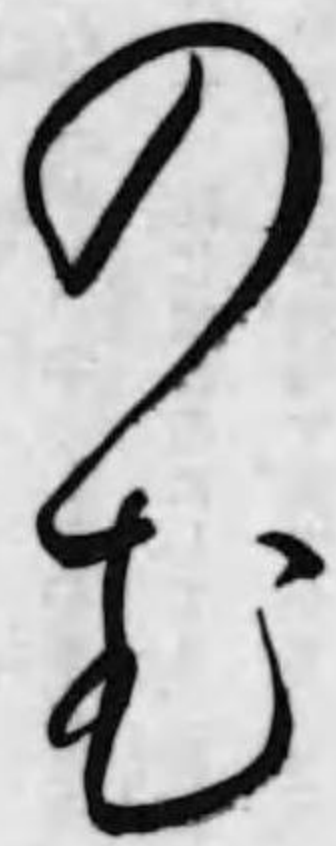
場合により、同じ「さ」であつても中央から始める事もあります。
又、同じ左から起筆すると云つても、前の「わひ」のやうに「わ」
の終筆をぐつと左へ運ばない場合もあります。これは下へ来る字
によつて違はせなければならぬ事はお分りでありませう。

する——氣持で習つて下さい。字と字の間——終筆から起筆への間及びその方向——によく氣をつけて練習して下さい。



「のみ」
これは今までもあつたやうに、下の字の起筆が中央から始まる場合の練習であります。

之も前の「のき」と同じ要領で習つて下さればよろしい。挿圖△印の處までは、上と同じであります。それから先、筆を持つて行く方向が、前とは少し違ふだけあります。下へ「み」の字のやうな字がつづく場合、挿圖①②は、十分にのびのびと引かないと△——①よりも短かくなつて、見苦しくなります。



「のむ」
これは、まへの「のき」と殆ど同じです。下の起筆が「のき」の場合よりも、更に左から始まつてゐる位の相違です。之を、十分左へ持つて行つてから筆を起さないと、下の「む」が、右へ寄り過ぎて了ひます。氣をつけて習つて下さい。



「こと」
これは下へ来る字の起筆が中央にある場合の連綿であります。

この連綿の要領も、大體前の「これ」と同じであります。「こ」の終筆を、そのまま自然に滑らかに下の中央へ持つて来ればよろしい。「こと」の場合は、餘程氣をつけないと、「こ」が左へ出でますから、左が勝ち過ぎます。手本をよく見て習つて下さい。



「こと」
これは右下から、次の字の起筆が始まる場合の連綿であります。

これは、前の「こと」と同じ要領で書けばよろしい。たゞ、連綿を急がずに、上の字は上の字として、完結させてから、次へ連綿する氣持が必要であります。



「きみ」
これは、前の「これ」がお出来になれば、連綿だけはお出来になる筈であります。

連綿手本第二

練筆手本第二の練習は、上へ来る字が前の「第四種」に屬する字——即ち上の字の終筆が、左上から右下へ来て、概ね引き拂はずに軽く止める字である場合の連綿の練習であります。



「これ」
この場合について云ひますと、「こ」の第二畫は、十分に書いてから、そのまゝの力で自然に丸味を持たせて後、左へ筆を持つて行かないと、懐が窮屈になつて見苦しいものになります。挿圖點線の部分が、即ちそれですが、一度下へ持つて来るやうにしてから、左へ向けると丁度よろしい。

又、「こ」の第二畫であります。十分左から、たつぷりと書くやうにしないと、そのまま下へ持つて来るやうな事になつて「こ」の字の形としてまともならず、何の字だか分らぬやうな事になりますから、御注意下さい。下へ来る字に「れ」を撰びましたが、之は左から始まる字であれば、どの假名が来て、要するに同じわけである事はお分りでありませう。

中心に氣をつけて各自習つて戴きませう。

「きて」

「きた」

之も「きみ」の場合と、同じ型の連綿であります。練習用として出しておきましたから、各自お習ひ下さい。

最後の點から、次へ移る處は、前にも御注意した通り、十分丸味を持たせてから、左に向はないと、懐が窮屈になつて、よいものが出来ませんから、よく氣をつけて、手本通りお習ひ下さい。



「きて」
「きた」は、前にお話した第二種に屬するものであります。これと同種のものには「む、か、ふ、を」があります。

あります。

この第一種のもの、文字の終筆が、總て點であります。この點を、十分に打つてから、丸く左に向ふやうにしないと、第一種の場合と同じやうに、懐がせまく、窮屈な感じがしますから御注意下さい。

手本の「いと」の場合、——これは、下の字の起筆が中央から始まる字で、割合に書きよい筈であります。「い」の最後の點を、十

分に打つてから、丸味を持たせて、自然に下の中央へ持つて来るやうにします。



【は】
これは、前の「し」と全く同じ要領でよろしい。取
えて説明するまでもありま
す。



【は】
これは、下へ来る字が、左
から始まつてゐる場合の連
綿であります。【し】の終
筆は十分に打つてから、丸
味を持たせないと、懐が狭くなり勝ちであります。挿入点線の部
分は、勿論、前の二つよりは急角度になつて下へ連綿してゐますが
この邊の呼吸を右手について十分に練習して下さい。云ふまでもな
く、ゆつくりと點を打つてから、さつと速く次の字の始筆に行くの
であります。

連綿手本第三



【はと】
「は」は、前にお話した中
の第五種に屬するものであ
ります。この類は、云ふま
でもなく、その終筆が結び
になつてゐるものでありま
す。例を挙げますと「ま、は、ぬ、る、ね、る、な、よ」等であり
ます。

この類に屬するものは、結局、第一種を小形にしたような、丸形
の曲線をなしてゐますから、その特徴を生かすやうに注意して、下
へ連綿す可きであります。たゞこの結びは、連綿の場合、筆意の都
合で、結び目が一つの點のやうになる場合がありますが、これは差
支へありません。手本に就いて、十分御練習下さい。

「はと」の場合で云へば、「は」の終筆を十分に結んでから、丸
く、柔かに筆を運ばせて、下へ連綿します。「と」は、中央から始
まるもの。自然に運んで來
ればよいでせう。



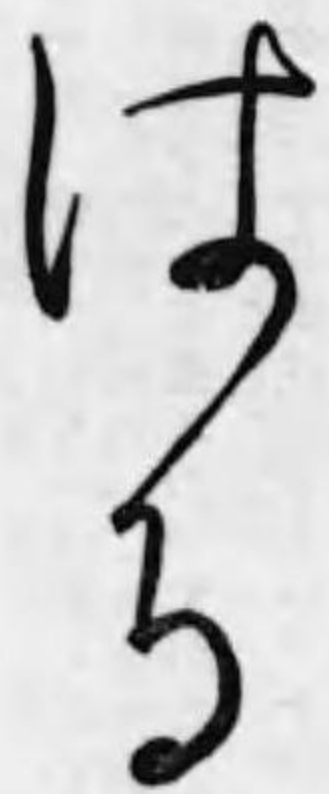
【ほみ】
これは、下の字の始筆が、
左から始まつてゐる場合の

連綿であります。特に連綿を急がないで、「ほ」の終筆を十分結ん
で押へてから、丸味を持たせながら、さつと次の字の始筆——即ち
左へ向ふやうにします。

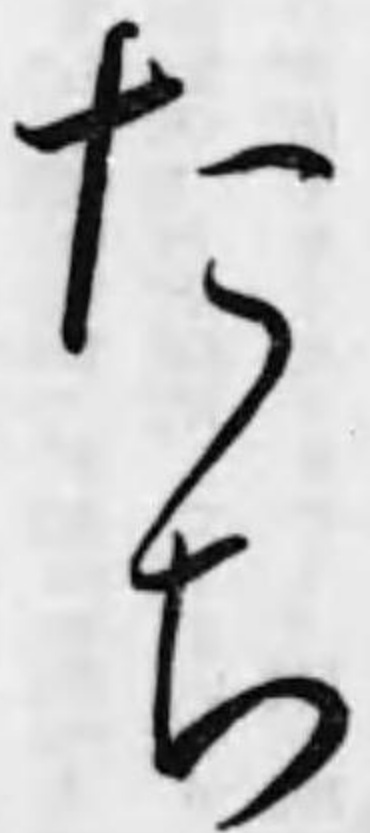


【ほし】
これは下へ来る字が、右下
から始まつてゐる場合の連
綿であります。前の「あし」
と同じ要領で書けばよいの
であります。

【ほ】の終筆は、下へ押へてから、「し」へ續けると、この間が
多少不自然さを免がれませんので、結んで軽く止めた處から、「し」
の字を起すやうにします。「し」の字は、挿入点線の邊り、滑ら
かに左に彎曲させないと、「ほし」を一つに見た場合、上の左が勝
ち過ぎますから、御注意下さい。



【はる】「はま」「はき」
この「は」は、前の「ほ」
と殆ど同じであります。こ
の行の三つは、下へ来る字
が、皆左から始まつて居り
ます。左から始まるものは、得てして連綿が窮屈になり易いもので



あります。何度も云ふ通り、十分、上の字の終筆に丸味を持たせる
やうに氣をつけて、お習ひ下さい。別に一つ一つの説明はお話する
までもなく、お分りの事と思ひます。

【たち】
「た」は手本第二で習つた
【こ】「き」と同じく第四
種に屬するものであります
即ち、その終筆が、左の上

から、右下に向つて下りて來て、軽く抑へる筆であります。前にも
お話したやうに、此の種のもは、軽く抑へる力を利用して、その
まゝ滑かに、次の字へ連綿させればよいのであります。その滑ら
かに、と云ふ點を十分氣をつけて習つて下さい。
【たつ】「たね」それぞれ同じ要領ですから、一つ一つの解説に
は及びません。

連綿手本第四



【せみ】
「せ」は何度か習つた第四
種に屬するものであります
から、もう説明に及びませ

まいが、この「せ」は、一寸御注意しておきませう。と云ふのは外でもありませんが、最初の間は、「せ」の終筆を、十分右に引き切らずに、途中から下へ連綿し易いからであります。右上から、左下へ引き下ろして来るのですから、自然、下へ筆を引き易い故もありません。十分御注意下さい。十分「せ」を書き切つてから、その勢ひで、丸く下へ連綿する——この要領で習つて下さい。この行は、特に下へ来る字を左から始まるものに書いてあります。

ら

「に」は云ふまでもなく第四種に属する文字であります。特に前に習つた「た」と同じやうなものであります。

すから、敢えて説明は致しません。

「にや」「にと」——共に、同じ要領で練習してみして下さい。今までの練習が十分お出来る方には、大して難しくない筈です。

ら

「ら」は手本第一で習つた「あ」「わ」の「ら」と同じ種類——即ち第一種に属する文字であります。云ふまで

ら

もなく、左へつづく場合は、十分形を完成させてから、そのまゝ左へ向ふ可きであります。——と云つて、それが筆の順序でありますから、特に連綿させると云ふ氣持でなく、自然に筆を右から左へ——そしてそのまゝ左から下の字の起筆——と云ふ氣持でよろしいでせう。「らす」の「す」は、思ひ切つて左から始まつてゐます。十分練習の上、呼吸を呑み込んで下さい。

り

前の「らす」が出来れば、「らむ」も僅かの練習で出来ませう。たゞお断りしておきますが、連綿は筆の滯りを嫌ひます。手本を見ながら、一度や二度うまく書けたと云ふので、そのまゝ先へ進んではなりません。愉快の間に筆をとつて、すらすらと書いても、手本のやうに、何の滯りもなしに書けるやうになるまで、十分練習して下さい。でないと、連綿の練習としては、何の價值もなくなりませう。同じ種類を何度か出しますのも、全くの故に他なりません。

ふ

「ふみ」
「ふ」は手本第二の「し」と同じく第二種に属するものであります。云ふまでもなく、終筆が點になるものであります。

連綿手本第五

ぬ

「ぬ」は前にあつた「ほ」「は」と同じく、第五種——即ちその終筆が結びになる字であります。連綿の要領については、前にお話した通りでありますから、お分りでありませう。

たゞ下へ来る「る」の始筆は、思ひ切つて左から始めないと「る」の字が落ちつきません。この邊、手本について十分注意して練習して下さい。
この行の「ぬれ」「ぬま」は説明を要しませんが、練習をお願いしておきませう。

り

この種の連綿についての注意は前にもお話した通りであります。即ち點を十分に打つて、丸くはねる——十分横を廣くするやうに書いて、丁度よくなりませう。「ふ」と「し」の最後の點は、その書方が先づ同じ調子ですから、一つ一つの説明は要しませんが、最「ふみ」「ふき」は、下へ来る字が、左から始まつてゐる例。最後の「ふゆ」は、思ひ切つて左から始まつてゐる例であります。この場合「ふ」の終筆は、十分に左に運んでから、とんと下に落すやうにします。尚委しくは、手本について、十分御練習下さい。
「なり」
「な」は今習つたばかりの「ぬ」、前に習つた「ほ」「は」と同じく、終筆が結びになる字であります。

次の「なむ」——之はもうお出来になりませう。手本について、十分にお習ひ下さい。



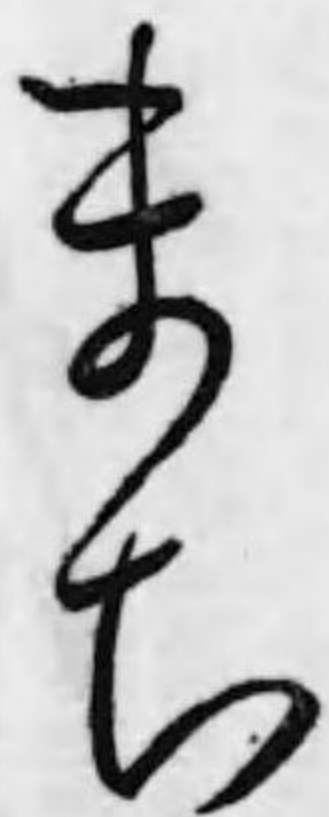
【なめ】
之も要領は、前の二つと同じであります。特に、下の「め」への連綿は、急いで、下に直ぐ下ろし易い字でありますから十分気をつけてお習ひ下さい。「な」の終筆を右に廻はしてから、左へ運ぶ——この邊は、一々お話するより、手本をよく注意して、習つて戴きたいと思ひます。

連綿手本第六



この行は、それぞれ手本について習つて戴きませう。

上の「さ」は、前に習つた「き」「こ」「に」「せ」等と同じですから、更めて説明は要しません。



【ま】は云ふまでもなく、終筆が結びになつてゐる種類の字であります。今まで何度か練習したものは可なり結び目が小さいものでしたが、こゝでは、大分大きく書いておきました。十分右へ廻してから、丸く下へ連綿するやうに氣をつけて習つて下さい。



【よと】
連綿については、別に更めてお話する事ありません。皆さんもお分りの事と思ひます。たゞ「よと」の場合最初の點が離れてゐるだけで、後は一筆で、全部を書いてしまひますから、最初の間は、一寸形がとり難いかも知れませんが、何處で筆を休めるか——速く一氣に書く處、一寸筆を止める處は手本について、一つ皆さんが研究して下さい。そのつもりで御覽になればお分りになりませう。
その次の「よき」「より」「よと」が十分お出来になれば、難しくはない筈です。

連綿手本第七—第十

一筆に書くこと云つても、同じ速さで、さつと一氣に書いてしまふものでなく、一寸筆を止める處、ゆつくり書く處があるものです。そこを十分うまく生かして書くこと、割に樂に書けるものです。一つ練習してみてください。

以上で、大體、連綿については、お分りの事と思ひます。勿論これは、連綿の基本中の基本で、これがそのまゝ、何處へでもこの儘の形ばかりで使はれてゐるわけではありませんが、要するにあらゆる連綿は此等の變化したものと思へば間違ひないのであります。以下、手本第十まで、皆さんの練習用として、お手本だけを出しておきます。十分に御練習を望みます。第十の最後の「けり」「ひと」「こと」はよく用ひる省略された連綿であります。

連綿手本第十一

連綿手本第一から第十までお習ひになつた所は、十分お出来になる事と思ひます。

さて、今まで練習したのは、平假名のみで連綿でありましたが、之は、前にも一寸お話したやうに、大體は、左上から始まつて、右下に終るのを普通としてゐます。随つて、自然の場合、平假名のみ

を使用して連綿しますと、その連綿は、起筆が左上にあり、收筆が右下にある關係で、極端から極端に移ることになり、得てして無理を生じ勝ちであります。この無理を避けるためには、あまり難しくなない變體假名を撰んで交ぜて書くやうにします。これは第一の終筆と第二の起筆とを近くし、且つ同じ筆意の重複をさけるためにも便利な方法であります。で、連綿手本第十一、同第十二では、變體と平假名との二字連綿を練習してみませう。この二字連綿も、理論は、今まで練習して来たものと、全く同じであります。



【ろ】
云ふまでもなく、變體假名の「以」と、平假名の「ろ」との連綿であります。「以」は右から左へはねて終る字であり、下の「ろ」は、中心より少し左から、筆をつける字でありますから、この連綿は、現在の皆さんには、決して難しくない筈です。たゞ挿入點の處、角立たないやうに氣をつけねばなりません。手本でもお分りのやうに、字と字の間隔はあまり狭過ぎないやうに習つて下さい。狭過ぎると、連綿が窮屈なものになつて、伸び伸

びとした字は出来ません。

それから、今までは、文字の中心を申しませんでしたが、この課では、挿圖に文字の中心を示しておきましたから、十分注意して、上下の中心が手本のやうに、揃ふやうに習つて下さい。之は、三字四字になつて来ると、なかなか中心の取り難いものですから、十分に習つて下さるやう、お願ひしておきます。

一つ一つの文字を書く上の注意は、更めて云ふまでもなくお分りでありませう。一字一字を離して書く時と、二字を一筆に書く時とは、大分調子の違ふものですから、特に注意して下さい。

「ろ」の點線の處は、十分に伸び伸びと引くこと、○印は強くあたりませう。○印から右上に上がる線の方向は、手本について御注意



「はに」
云ふまでもなく、變體假名の「者」と平假名の「に」であります。

「はに」と連綿する場合、大抵の場合、そのどちらかを變體假名にします。——と云ふのは、「はに」と、二字を平假名にしますと、「は」の終筆が右端であり、「に」の始筆が左端である關係から、その筆は極端から極端へ運ぶ事になり、その連綿は窮屈で、無理が出来るからであります。

す。又、「はに」と平假名にしますと、「は」と「に」の第一筆がそれぞれ同じで、縦畫が同じやうに左に並んで見苦しいのを避けるためでもあります。

手本のやうに、上を變體にしますと、上の字の終筆は略中心に收まる程度であつて、下への連綿は、至つて自然に、且つ樂になりませう。連綿は、大して難くありません。上の字を十分に書き切つてから、上から下りて来た筆の力で、自然に丸味を持たせて——挿圖點線の部分に御注意——滑らかに次の始筆へ移るやうにします。上の「波」は、手本でもお分りのやうに左右に廣くならないやうに書き、下の「に」は、左右に廣く、上下に高過ぎないやうに、氣をつけて習つて下さい。



「はへ」
上は變體假名の「本」下は平假名の「へ」であります。これは「はへ」と平假名で書きますと、「は」が長方形で畫の多いものであり、その反對に下の「へ」が、扁平な、極端に畫の少ないものである關係で、手本のやうにした方が、見よくなるからであります。

この連綿は、前にお話した第二種——最後が點になつてゐる文字

——に屬するものであります。随つて、下の字が、左から始まる場合は、點は十分に丸く書いて次へつづくやうにしないと、挿圖○印の邊りが、狭く窮屈になります。それから、このやうに、極端に右から左へ連綿する場合は、手本のやうに、字と字の間を、心持ち引きはなして、連綿が窮屈にならないやうに、ゆとりをつけるやうにするとよろしい。



「と知」
平假名の「と」と變體假名の「知」であります。「とち」と上下を平假名で書くよりも、手本のやうに、下

を變體假名にしますと、一寸變化が出来て面白くなります。

この連綿は、前の「はに」と同じ要領——即ち、上の字の終筆が中央で終つて、左下へと續いてゐる型であります。挿圖點線の箇所を御注意下さい。一寸中心が取りにくいかも知れません。そのついで御練習下さい。



「りぬ」
變體假名の「利」と平假名の「ぬ」之を二つとも平假名で「りぬ」と書いてしま

ひますと、上の字は極端に細く、そして下の下が左右に廣過ぎるの

で、調子の悪いものになつてしまひませう。こんな場合には、變體假名は、なかなか便利なものであります。

この變體の「利」は、よほど氣をつけないと、平假名の「わ」と間違はれ易い字であります。これは、手本次の行の上の「わ」と比較するとお分りのやうに、變體の「利」の場合は、平假名の「わ」よりも小さく書き、左右もあまり張らせないやうにします。

この連綿は、上の字の終筆のまゝ、自然に下へ持つて行けば、それでよいのですから、別に説明はいりませう。



「るを」
平假名の「る」と變體假名の「遠」であります。これも、平假名で「るを」と書いては、二つながら、あま

りにも細長い、電信柱のやうなものが出来てしまひませうし、二つともに變體假名で書けば、これまた、少しくど過ぎるものが出来てしまひませう。

この連綿は、急ぎさえしなければ、別に難しくはありません。たゞ下の字は、一寸始めはまじめに細かいかも知れません。中心をよく見てお習ひ下さい。

わ

「わか」
平假名の「わ」と變體假名の「可」であります。
之を二つながら平假名で書きますと、連綿がこれ程

樂に行きませんし、一寸くどいやうな氣もさせよう。
この連綿は至つて樂に出来ませう。「わ」を十分に書いて、そのまゝ次へうつればよいのであります。「可」の點は一寸力を入れま

よ

「よた」
平假名の「よ」に變體假名の「當」であります。

この場合、二つながら平假名で書きますと、下の字の始筆は左になりますが、手本のやうに下を變體にする時、「よ」の終筆から直ちに引き下ろして、下の始筆を始めることが出来ま

そ

「れそ」
變體假名の「連」と平假名の「そ」これも上を平假名にしたよりも、變體假名にした方が、連綿も樂であり

形も見よい事は、もうお分りでありませう。
上の字は一寸中心がとりにくいかも知れません。挿圖點線の部分が角ばらぬやうに氣をつける事を忘れないやうに、御練習下さい。

ね

「つね」
上は變體の「徒」下は平假名の「ね」であります。

この字は、連綿から云へば、上を平假名に書いても同じわけでありますが、下の「ね」の畫の多いに對して、「つ」が極端に畫の少い字なので、それを嫌つて上を變體で書いてみました。うっかり書くと、挿圖點線の處を角ばらしてしまひますから御注意。

なら

「なら」
上は殆ど平假名に近い變體であります。
連綿は別に難しくはありません。丸く筆を持つて行

く事を忘れないで下さい。
「奈」の字は、○印のところを十分に廣くとります。第三筆の點の位置は、思ひ切つて右に打ちます。これで、字の中心を崩さないやうに氣をつけて下さい。

むら

「むら」
之は二つとも平假名で書きました。「む」と「う」の連綿が、一寸練習を要すると思つたからであります。

これは前の「ほへ」と同じ連綿——但し之は下の字が中央から始まりま

連綿手本第十二

この課は、前の課の續きであります。

の

「の」
云ふまでもなく二字ともに平假名であります。
これはこの方が連綿が樂なのと、今一つは、挿圖に

示したやうに、二つの點線の處を練習して、敷き度い爲であります。
これはお話するまでもなくお分りでありませうが、一體書では、同じやうなもの二つ並ぶのを嫌ひます。この事については、變化と云ふ事について、學習法講義でお話した通りであります。處が、挿圖點線の部分は、よく手本なしで書くと、同形に書いてしまふ處であります。手本を御覽になればお分りのやうに、この二つの部分は、それぞれはつきりと違つたものであります。この邊の相違に氣をつけて習つて下さい。

く

「かく」
變體假名の「於」と平假名の「く」であります。
この連綿については、更めてお話する事もあります

まい。たゞ氣をつけなければならぬのは、「於」の終筆から、いきなり「く」へ入らない事で、かうすると、下の「く」が力のない

變にまとまりのつかないものになつてしまひます。挿圖點線で示したやうに、「く」の始筆はとんと一つ下へ抑へて、それから左下へ筆を連んで書く——と云ふ風にしなければなりません。



平假名の「や」と變體假名の「方」。

連綿としては、上から引き下して来た線をそのまま左へ運ばばよいのですが、この左へ運ぶのをどの邊りからすればよいか問題であるわけでありませう。早すぎたは間延びしたのにならずし、遅すぎれば窮屈なものになります。挿圖△印の邊り——即ち「や」を完全に書き切つてから、左に移るのですが、この邊の呼吸は、手本について、實際に練習して戴くより仕方がありません。



平假名の「け」と平假名の「介」と變體假名の「ふ」であります。

連綿自體としては、至つて簡單なものでありますが上の字の終りと、「ふ」の最初の點をはつきり書くやうに習つて下

さい。「ふ」の點は強すぎても變でずし、かと云つて、あまり弱く書くと、點だか何んだか分らなくなりませう。心持ちすつと力を入れて軽く抜くやうにするのですが、之も實際に、そのつもりで練習して戴くより仕方がありません。中心に御注意。



平假名の「こ」と變體假名の「衣」であります。

之は連綿としては、上の「こ」の終筆を丸く持つて行く事に氣をつけられ、簡單なものであります。たゞ下の「衣」をうまくまとめるために、練習して下さい。中心を見て習ふと、刻に樂に書けませう。字と字の間隔に御注意。



これは二つとも平假名でありますから、お出来になりませう。

連綿について云へば、挿圖點線の部分を丸く持つて行く事は勿論ですが、あまり連綿を急ぐと、挿圖點線の處がうまく行きませせん。「て」を十分に書いてから柔かく次の字へうつる——かう云つた心懸けが大切でせう。



平假名の「さ」と變體假名の「支」。

連綿から云へば同じですが、「さき」では、同じやうな字がつづくので、下を變體にします。連綿について云へば、之は前の「てあ」の場合と同じであります。字間に氣をつけなないと、文字の形がうまく出来ませせん。下の字は、特に中心に御注意。



平假名の「ゆ」と變體假名の「免」。

下を平假名にしますと、同じ圓弧が二つ続きますので、下を變體にして避けます。この連綿は至つて簡單であります。「ゆ」の終筆をさつと勢ひよく書けばよいのですが、これを一気に書いてしまふと味の無いものになつてしまひます。挿圖に實線で示したやうに、それぞれ筆意の變化を見せませう。之は、上の部分はゆつくりと書き、下の部分をさつと書くやうにします。文字については、下の字の點線で示したところは、注意を要します。



平假名の「し」と平假名の「し」。

下の「し」が極端に細長い字ですから、極端に横に廣い「み」を避けます。下へ「し」が来る場合の連綿は、上の字の筆の終つたところから、「し」を書けばよいのですから容易です。但し、「し」の字の筆意の變化には注意して下さい。



平假名の「ま」と變體假名の「毛」。

上は變體假名の「毛」に平假名の「ま」に平假名の「ま」。



平假名の「せ」と變體假名の「毛」。

この連綿は前に何度かあつたもの——この課で云へば「おく」「こえ」

「せ」は思ひ切つて左から始まつてゐますから、そのつもりで、挿
圖點線の部分を彎曲に廻はさねばなりません。又、全體が右上りの
字でありますから、始筆は、十分左下から始めて、丁度よくなりま
せう。



「すん」
變體假名の「春」と「ん」。
之は上を平假名にします
と、上の字が淋しく、下の
字も淋しい字ですから、二

字を連綿した場合、中央が變に物足りなくなりませう。
連綿については取えて説明を要しますまい。下の「ん」の字は、
少し思ひ切つて書きます。最後のはねの方向に注意して習つて下さ
い。挿圖點線の部分は、あまり大きくしない事、はねは、内側へ捲
き込む筆意ある事等が肝心です。要するに痛快に書かないと面白味
がありません。

以上で、「しろは」の二字連綿を終へた事になります。始めから
今一度、今度は手本をよく見て習つて下さい。

連綿手本第十三

さて以上で、一通りの二字連綿を終へることにして、この課から
三字つゞき——即ち三字連綿の練習にとりかゝる事に致しませう。
云ふまでもなく、連綿も、色紙や短冊等に書く散らし書にまで行
くと、大變高級なものです。さうでなくとも、連綿は日用の場合
によく使はれるものですから、そのつもりで、十分の御練習を望ん
でおきます。



「やまと」
の下へ来る
「ま」と「と」
は御覽のや
うに巾を狭

く書き、「や」を十分に張つて書き、變化を求めるやうにします。
「や」の最後の縦畫は、あまり右へ引き過ぎますと、次の「ま」
へそのまゝ連綿した場合、「ま」が中心より右へ行くやうになりま
すから、十分注意して書かねばなりません。「ま」と「と」の連綿
は、あまり急がないやうに、挿圖點線で注意したやうに、彎曲した
曲線を描くやうに筆を廻します。最後の「と」は、あまり大きくな
らないやうに氣をつけて下さい。

では、そのつもりで、手本、挿圖をよく御覽になつて、頭に入り
切つた處で、練習して下さい。



「かはち」
これはあま
り難しくは
ありません

「か」の第一筆、第二筆はあまり大きくならないやう、又、力の
弱くならないやうに氣をつけて書いて下さい。

「か」はその終筆が點で終る字で、その下に来る「は」は、又うん
と左から始まる字であります。連綿は前にも習つたやうに、點を十
分に丸く書いて、力を抜くにつれて次へ移ります。挿圖點線の邊り
十分に習つて下さい。

「は」と「ち」の連綿は、既にお分りのやうに、「は」の最後の
結びを十分に結んでから、次の「ち」へ移るやうにします。



「はつみ」
これを平假
名ばかりで
書きますと
「は」

二字連綿で、中心をとる練習をしました。これが三字となりま
すと、最初はなかなか中心がとりにくいものであります。少し注
意して練習すれば、さう難しいものではありませんから、そのつも
りで、始めの間は十分に練習して下さい。
二字の場合は、字數も僅かですから、墨も一度つければ、そのま
ゝお書きになつたでせうが、三字になると、どうかすると、途中で
かすれ易いものであります。これは、少しも差支へありませんから
途中で墨をつけ足さないで書き終つて下さい。
更に又、お手本の見方についてであります。三字になりますと
最初の間は一度見ただけではお分りにならず、書いてゐる途中で何
度か手本を見るものですが、この場合は、筆を休める處、筆を新た
に起す處で、お手本を見るやうにし、筆を動かさずお手本を見る
のは、絶対に避ける可きであります。
それから、今一つ注意すべき事は、運筆の緩急であります。一氣
に、一筆で書くと云ふ事は、大急ぎで書くと云ふ事でもなければ、
同じ速度で書くと云ふ事でもありません。ゆつくり書く處、さつと
速く書く處、とそれぞれの調子の變化があつて、始めて連綿として
の調子も生れて來るのであります。これは、そのつもりで、少し念
入りに、お手本を研究すれば、直ぐその邊の呼吸は分る事ですし、
一度覚え込めば、自然に他の場合にも應用出來る事です。

は畫の少い字で、上下が低くて左右に廣い字になり、又「み」は同じやうに横に廣い字と云ふことになつて、面白くありませんので、手本のやうに、「つ」を變體假名にして變化させ、中央が大きく畫の多い字になつたので、次の「み」も巾の狭い變體假名を撰んで調子をとりました。この邊の呼吸も、最初はお分りになりますまいが大體こんな調子だな、と云ふ氣持で習つてゐられる中には、はつきりお分りになるやうになりませう。

「し」と「徒」の連綿は、前の「かは」の場合と全く同じであります。「徒三」の連綿は、二字の場合にも何度かあつたもので、お出来になりませう。



「を」は別に難しい連綿もありませんが、この場合で

は、最初の「を」の字の出来次第で、うまく書けるかどうかが決つてしまひます。
挿圖① ②は長く、しつかりと書き、③を思ひ切つて右に打ちます。④が長くなければ、⑤を右に思ひ切つて離すことは出来ませんし、離せば形の見にくいものになつてしまひませう。

「を」の最後の點は、十分に書き切つてから、次の字へ移るやうにしないと、「を」の形がわるくなります。



「するが」の第一畫は十分に強く引きます。縦畫

は右寄りから引下ろして、挿圖○印の處はつけないやうにします。「す」の結びから下は、單體では引き下ろしますが、連綿の場合はそのまゝ次の字へ持つて行くやうにした方が、間延びした感じがしません。

次の「る」は十分練習して下さい。特に、挿圖點線の處は、練習が必要でありませう。「る」を結んで、そのまゝ眞直に下に下ろすよりは、挿圖に示した筆意を持たせる方が、遙かに面白く、且つ連綿も樂でありませう。「る可」は挿圖のやうに、巾狭く書くとよろしい。

「る」の始筆は、心持ち左から始まつたので、「可」の第二筆を心持ち右に書いて、一連綿としての釣合を取ります。挿圖の二つの△印のところがそれでありませう。

此の點を御注意下さい。

「すさ」の連綿は前にあつた「するが」の場合と同じであります。が、「さ」の始筆は略中央に近いものですから、「す」の結び目からは眞直に引き下ろして、軽く左へつゞけます。



「あふみ」の「阿」の終筆は、次が中央から始まる字でありますから、

りますから、そのまゝ自然に中央まで持つて来て、次へ連綿すればよいのでありますが、「ふ」の最初の點は、よくわかるやうに——と云つても不自然に際立たせるのでなく、極く自然にちやんと書かねばなりません。

「ふみ」この連綿はお分りでありませう。「ふ」の最後の點を丸く打つ事を忘れないで下さい。挿圖△印の處は、十分に左右に張らせることは、前にお話した通りであります。尙挿圖に示した「阿」の○印のところは、狭すぎないやうに、十分氣をつけて習つて下さい。

前にお話するのを忘れてゐましたが、文字と文字との間へ来る時は大抵の場合に平假名の「か」を使はずに、變體假名の「可」を使ひます。之は中央から始筆して右上で終るので、連綿がしよいのと、小さい型でありますから、他との調和がうまくとれるからであります。之に反して、最初に来る場合には、小型の「可」を避けて、平假名の「か」を使ふ——これは、大體の話ですが、その方が調和がいゝやうであります。

最後の「み」の字、これは十分左右に張らせると見よくなります



「かみ」は次に来る「す」の始筆が、思ひ切つて左か

ら始まる字でありますから、「か」の終筆の點との連綿は、十分に丸味を持たせて書かないと、懐が狭く、窮屈なものになります。



と、次の「者」は、挿圖點線の部分を十分に習つて下さい。その他は、さう難しい事ありません。



来になれませう。たゞ氣をつけなければならぬは、中の「可」は元來が小さい型の字でありますから、大きく書かない事、「わ」は十分にしっかりと書くこと等でありませう。



「あ」は「あ」云ふまでもなくお分りでありませうが、「あ」

の最後の點——挿圖點線の部分は、丸味を持たせてはねるやうにしなればなりません。次の「知」の△印のところは、十分右に張らせるやうにします。次への連綿を急ぎますと、得てして、△印の張りやうが小さくなつて、見苦しくなりますから御注意下さい。



「た」は「た」問題は一「た」の連綿にありませう。

後の點を十分に書き切つてから、そのまゝ「し」へつゞけるのであります。その「し」は、「た」の中心より心持ち右へ来る事になります。「しま」は、自然、又右寄りに「ま」が来る来になります。この場合は、「た」の一畫二畫——即ち左方と、「ま」で一行の釣合をとる氣持で書くこととよいでせう。こんな場合は、無理に各文字の中心を描へやうとすると、自然、連綿に無理が出来て参りますから、三字なら三字で、釣合をとるやうにすればよいのであります。

連綿手本第十四——第十六

さて、今までお話し、習つても来た處によつて、三字の連綿の要領は、大體お分りの事と思ひます。手本第十三を十分習つて下さ

つた方には、第十四から第十六までの練習は、所謂應用で、何も新しい處に難しい處はない筈であります。皆さんの練習用として書いておきましたから、連綿に氣をつけて習つて戴きませう。前にも云つた事ですが、中心に注意して、三字が不揃ひにならないやうにして下さい。

連綿手本第十七

二字、三字の連綿が出来れば、この課からは、四字の連綿の練習に取りかゝりませう。四字の連綿と云ひましても、二字、三字の連綿と、その要領は同じ事でありませう。四字を一つの連綿として纏める——その纏め方が練習であると云へませう。一字から二字、二字から三字の、個々の連綿の仕方については、今まで習つた處と全く同じでありますから十分出来になりませう。では練習にとりかゝりませう。



(挿圖中の黒點は筆を休めて手本に眼をやつてもよい處)

よく見て、中心を歪めないやうに練習して下さい。
 それから、手本を見るところですが、これも前にお話した様に筆の切れめで、手本を見るのが正しく、若しその間にも手本を見やうと云ふのならば、筆を一寸休める處——即ち挿圖に黒點を打つた處で、一寸筆を休めるやうにして、手本を見るとよいでせう。が、手本と挿圖は、最初に十分によく研究して、墨をつけて習ふ前に、指で書くなり、筆を使つて宙に書くなりして、大體の事は覚えるやうにしておいてから、實際に習ふやうにして下さい。



「あたらし」

連綿それ自身は、別に難しくはありませんが、字の中心をとる事、釣合をとる事に、練習を要しませう。

全體の釣合から云へば、挿圖實線で示した通り、「當」の第一畫は右方、「ら」の第一畫が左方、「し」が右方と、同じやうな畫が三つ左右の上下にあります。この調子をうまくとるやうにすればよろしい。更に以上の他に「阿」の左方をも含める氣持もあつて然る可きでありませう。

この連綿は、中心をとると一緒に、全體の釣合をとる練習として十分に習つてみて下さい。



「あさがほ」(朝顔)

「あ」の變體、「さ」の變體、「か」の變體と三つ並べました。上と下の三字を大きくし、中の二字を小さくして、調子をとりませう。これは、中心のとり方、連綿ともに難しいものではない筈です。たゞ、挿圖實線で示した二つの畫は、思ひ切つて左に引いてから次の畫に移らないと、字の中心がとれなくなりますから注意して下さい。「可」の點は横に打たないで、手本のやうに立てる方が見よいでせう。



「あきはぎ」

三字目は「は」の變體、四字目は「き」の變體、「秋萩」であり

ます。

「き」の挿圖△印の畫を上畫の上まで持つて行くと、「あ」の收筆とかち合つて、一寸うるさくなりますので、それをさけて、△印のところをあげました。

「は」の變體は何度かあつたものですが、なかなか形がとりにくいやうでありますから、十分練習して下さい。連綿その他は、別に説明するまでもありますまい。



「きよらか」

之はお分りになりませう。「清らか」であります。

之も別に説明を要するところはありますまい。強いてお話しすれば「き」の挿圖○印が狭くならないやうに氣をつけること、「よ」の終筆から次へ移る部分——挿圖點線の部分は、丸く廻してから、うんと左へ持つて行かないと、次の「ら」が、右へ寄り勝ちであります。次の「ら」の挿圖點線の部分は、小さい乍らも十分に筆を廻します。上からの筆の勢ひで、小さいものが更に小さくなり勝ちであります。之が小さくなりますと、一寸字として判然とせず、讀みに

くくなります。せう。「き」の終筆から「よら」のあたり、十分練習して下さい。



「きはら」

即ち「如月」二月の古名であります。

「左」の字は、上下に「き」があり、直ぐ上が「き」である關係から、之とよく似た「さ」は避けて、どうしても變體にしなければならぬ處であります。また、上と下に同じ平假名の「き」が來で、多少、「き」の形を變へて書きました。

連綿は同じやうな種類で、大して難しくもありませんまい。



「こほろぎ」

これは、上と下の字を小さく、中の二字を大きくして、釣合をとるやうにします。連綿や各文字については、説明を要しませう。

たゞ「ろ」は挿圖△印を思ひ切つて左下へつき出さない、
「ろ」の右方を大きく廻すことが出来ず、自然形が崩れるやうになりま
すから、氣をつけて習つて下さい。

「ほ」「ろ」の挿圖點線の部分も、若干の練習を要させよう。連
綿では、特によく出て来る運筆ですから、十分習熟して下さい。



「さみだれ」
即ち「五月雨」であります。
中、小、小、大——と云ふ字の配列にしました。各々の連綿につ
いては、もう十分に習熟されたことと思ひます。

各字の注意すべき點について云へば、「さ」の○印のところを開
けること、「當」の△印の點は、得てして、下へ下がり勝ちであり
ますから、そのつもりで、思ひ切つて引き上げて打つつもりで、丁
度よくなりませう。

最後の「れ」は、割に畫が多くなりますから、手本のやうに、筆
先で、あまり大きくならないやう、と云つて弱々しくならないやう
に、すつすつと書くとよいでせう。



「えもつき」

即ち「霜月」で、十一月の古名であります。

手本を見てもお分りのやうに、大、小、大、小の組合せでありま
すから、そのつもりで習つて下さい。「も」は變體假名にしない
下の「つ」の變體假名に對して、あまり小さ過ぎませうし、「つ」
を平假名にしますと、他に對して、畫が少なくなり過ぎませう。

連綿、各文字については、もうお分りでありませう。中心に注意
する事、挿圖點線の連綿も同様、挿圖○印の處は廣くします。



「なばた」

云ふまでもなく「七夕」であります。

多少は、大、小、大、小の氣味がありますが、前程、際立つた相
違はありません。一體に字畫の少い字が集つてゐますから、特に筆
に滯滞のないやう、すらすらと書き流さなければなりません。「な」
の變體は、初めて出て来たものですから、十分習つておいて下さい
下手をすると、「る」と間違はれ易い字でありますから御注意。他
はお分りでありませう。挿圖點線の曲線に氣をつける事。「た」の
最後の點は、下に過ぎないやうに氣をつけて下さい。



「たらちね」

垂乳根——「母親」或は「兩親」の事であります。別に難しい字
もありません。たゞ連綿を窮屈にならないやうに氣をつけて練習し
て下さい。



「たまづさ」

「玉章」——手紙の事であります。

最初の字を變體にしてみました。全體の形は、挿圖に示した通り
「つ」だけが大きく、他は巾の狭いものになつてゐます。そのつも
りで習つて下さい。
「堂」が十分に出来てゐれば、大して難しいものでない筈です。
御練習を望みます。



「なでしこ」(撫子)

これも別に難しいものではありません。たゞこの連綿では、他の
字の間隔をやゝつめ氣味に書き、「し」を手本のやうに、十分にの
びのびと書くと、面白い感じが出ませう。この「し」を書く時に注
意しなければならぬ事は、單調にならないこと、そのために、連
綿に無理をしない事でありませう。
以上の心構えで習つて下さい。



「ひぐらし」(朔)

この運筆は十分に習つて下さい。筆をつけてからは、最後まで、紙面から筆を離すことなく書きつゞけなければなりません。手本を見てよい箇所は、挿圖に●印を打つて示しておきました。

又、この連綿は、中心のとり方に練習を要します。即ち、挿圖でもお分りのやうに、最初の「ひ」の左の部分——挿圖点線の部分——が、心持ち左に寄つてゐます。これは、下の「ら」の下半部と「し」を——即ち挿圖点線の部分——を心持ち右に書いて、一つの連綿としての中心をとるやうにするのであります。自然、その部分を、たつぷりと書くやうにすると、更に面白くなります。



「みなづき」

みなづきは「水無月」と書き、六月の古名であります。最初の「み」は、少し畫の多い變體假名を持つて来て、多少の變化を求めました。

別に難しいものではありません。各文字は、挿圖でもお分りのやうに、大體同じ巾に書きます。挿圖○印は狭くならないやう御注意

いま一息の處でありますから、そのつもりで御練習を願つておきます。さて最初は、



「みよし」

即ち「み吉野」であります。

最初の「み」は、少し字畫の多い變體假名にしました。「美」の右方を、心持ち重くしたのは、次の「よ」の二畫と釣合を保たせるために外なりません。その他の連綿、文字の書方等については、更めて云ふまでもなく、お分りでありませう。「美」と「能」は廣く「よ、し、ゝ」は巾狭くなります。そのつもりで、十分に練習して下さい。中心をとる事に御注意。



「うつくしき」



「ながつき」

ながつきは「長月」と書き、九月の古名であります。

この連綿は、大體に於いて、大、小、大、小の變化を見せます。「つ」は特に畫の多い變體を持つて来て、變化を見せました。連綿文字、別に難しくはありません。たゞ「都」を十分に習つてゐないと、こんな場合、字と字との間にあつて、一氣に書く時に、一寸困りませう。

連綿手本第十九

さて、この課は五字つゞき——即ち五字連綿の練習であります。五字連綿と云ひましても、四字連綿の練習が十分出来てゐるさへすれば、四字連綿と大した相違はありません。これは三字連綿から、四字連綿に移つた場合よりも遙に樂であります。

連綿も、いくら文字を積ると云つた處で、後はもう、同じ要領で書いて行けばよいので、連綿として、特に練習を要するのは、先づ四字、五字の連綿まででありませう。

即ち「美しき」であります。

この連綿は、下の「久しき」は問題であります。注意としては、各文字が、あまり巾の廣くならないやうに氣をつけなければならぬ位のものであります。

自然、問題は上の二文字であります。

「う」は、中心よりも心持ち左に寄つてゐますが、これは、次の「徒」の右方が勝つてゐるので、それと調和をとるためであります。それから今一つ、「徒」の終筆——挿圖点線の部分——は、今までに習つたのでは、筆を丸く持つて行つたのですが、この場合は、手本のやうに角を立てました。之は、かうした方が次への連綿がしよいのと、字の形が、挿圖○印の部分のやうに廣く開いてゐるので、かうしても、目立たないからであります。この邊の處、十分會得する迄、習つて戴き度いと思ひます。



「あさまだき」

即ち「朝まだき」であります。

これは、最初の一字を大きく、他は幅狭く書いて、全體の釣合を

とるやうにします。

連綿その他については、別にお話するまでもなく、何度か習った
ものですから、お分りでありませう。



「す」のねに」

即ち「鈴の音に」であります。

終りの「ねに」は別に問題はありますまい。練習の目標は、「す
」の」にあります。

「す」の二筆——挿圖△印の畫の中心の右から入れて結びを中心
へ持つて行く邊り——前にも習ったところですが、御注意が必要で
ありませう。それから、次の「し」のあたりも輕卒に書いては、決
してうまく出来ないところであります。

「し」から次の「能」の連綿は、十分左へ持つて来てから、すつ
と垂直に下へ引き下ろすやうにしないと、「能」の字が、うまく書
けません。特に挿圖點線の邊を十分に注意して練習して下さい。



「はるすきて」

即ち「春過ぎて」であります。

字の大小の配列の具合は、挿圖を御覽になれば、大體はお分りに
なりませう。連綿については別にお話する事もありませんが、本連
綿中の「る」の書方——挿圖點線の部分は特に注意を要しませう。
向、「る」の終筆は十分に左に引いてから「す」へ移らないと「す」
の横畫が短かくなつて見苦しくなりませう。



「なつきたる」

即ち「夏來る」であります。

「な」と「徒」は大きい型の字、他はあまり幅の廣くならないや
うに氣をつけます。この連綿では「な徒き」までは、今までの練習
が十分な方には、先づ無難でありませうが、「當る」の邊り、多少

の練習を要しませう。即ち挿圖點線の部分であります。特に「き」
の點から終りまでは一筆で書きますから、特に御注意下さい。

「當」の字——手本のやうに書く場合、よほど氣をつけないと、
何と云ふ字か分らなくなりませうから御注意。書くのは、今までと同
じ要領でよろしく。



「まろたへの」

即ち「白妙の」であります。

これはもう難しくありません。若干練習を要するのは「ろ當
へ」の邊りでありませう。がこれも、今までに何度かあつたもので
ありますから、少し氣をつけてお書きになれば決して難しいもので
はない筈です。



「ゆきつもり」

「雪積り」であります。
字は大、小、大、小、小の氣持であります。之も今では、別にお
話することもありません。たゞ念のために云つておきますと、「も」
の變體「毛」、これは——挿圖點線で示した部分——を十分に書き
切つてから、始めて次へ連綿するやうにします。
又最後の「利」は、左右に張らせませうと、平假名の「わ」と間違
はれ易いものになりますから、御注意下さい。

連綿手本 第二十



「さらなみの」

「小波の」であります。

注意す可き點を挙げますと——

先づ「さ」の最後の點と次の「な」のあたり、この邊が不明瞭に
ならないやうに、はつきりと書かなければなりません。

次の「奈」は、前にもありました。他の字と紛れ易い字ですから
ちゃんと書かねばなりません。挿圖○印のところは、思ひ切つて左

へ延ばします。
「三能」の連綿、挿圖點線のところは、十分丸く書かなければ、下の「能」の形がつきませんから御注意。なほ、「能」は、左右に十分張らせて書いて下さい。



「ながらへて」
即ち「永らへて」であります。

これも別に難しいところはありません。たゞ「ら」の書き方は今までになかったものですから注意して下さい。この曲線——挿圖點線の部分——が、不明瞭だと、何を書いてあるのか分らない事になつてしまひます。手本について、十分練習して下さい。勿論、たゞ線を曲げる——と云ふのではなく、「可」を書き終つて、ちやんと「ら」の筆意を出さねばなりません。「へ」の始筆——挿圖の○印は十分に、左へ出さないと、右へ引けない事になります。「へ」は十分に、左右へ張る方が、この場合は見よくなります。「へ」

「て」の終筆は押へて止めるのではなく、軽くはねるやうにして筆を抜きます。

「咲きにけり」であります。

之は別に説明を要しません。「に」の終筆○印のところは、特に角だてをみました。連綿は、必ずしも丸く書くとは限つてゐない例であります。



「いましばし」

「今暫し」であります。

「しばし」と「し」が二つある場合には、そのどちらか一つを變體假名にして變化させます。「いま志」までは別に説明を要する處もありません。「者し」の連綿——挿圖點線のところは、二文字がはつきりと分るやうに書いて下さい。これは「者」をはつきりと書き切つてから、その後へ「し」を書くやうにすればよいのですが、「し」を急ぎすぎると、讀めないやうなものが出來上がりますから御注意下さい。



「やまざくら」
即ち「山櫻」であります。

連綿については「や」と「ま」の間——挿圖點線の具合——これは「や」の終筆の方向が大切です。手本をよく見て習つて下さい。「ま」の終筆は、十分丸く廻してから、次の「さ」へ續けます。「さ」から「久」への連綿——挿圖點線の部分——これも、最初の間は特に注意しないと、續き具合が、はつきりしないものになります。「久」の○印の開きは廣くならないやうに御注意。①——②は水平に書くやうにするとうろしい。



「さきにけり」

「たまほこの」

即ち「玉鉾」であります。

大、小、大、小、大の字の組合せになつてゐます。「堂」の終筆から「ま」への連綿——挿圖點線——「ま」から「ほ」の一畫への線——挿圖點線——若干の練習を要しませう。手本について、十分に習つて下さい。餘程筆を軽く運ばせないと、手本のやうに軽い線は書けません。他は取えて説明するまでもなくお分りでありませう。



「きみがため」

「君がため」であります。

之も別に説明する要はありません。たゞ「か」の終筆から次の「當」への連綿——即ち挿圖點線のところは氣をつけて習つて下さい。



「はるのゝに」
 「春の野に」であります。
 「は」の終筆から「る」へ来て——挿圖の○印の處は、強く筆をあて、結んで戻します。「る」の點線のところ、前にもありました。更によく練習して下さい。挿圖○印の處も、はつきりと結びます。「の」の終筆から、「ゝ」へのつゞき、更に「ゝ」から次へのつゞき具合——挿圖點線の處を十分味つて下さい。點は、はつきりと——と云つて際立て、はいけません、分るやうに書かなければなりません。

さて、これで、二字連綿から、五字連綿までを、一通り練習した事になります。次は、今一段と高級な、連綿にとりかゝりませう。

連綿手本第二十一

愈々、以上で連綿の基礎を一通り終つた事は、前にも云つた通りであります。云ふまでもなく、これらは連綿の基礎中の基礎とも云ふべきもので、眞の連綿の理想ともす可きは、所謂古名筆に見られるが如きものであります。即ち、筆の進むまゝに、心の働くにまかせて、大小、肥瘦、濃淡、布置、あらゆる方法を取り入れ乍ら、然も一點の作爲の跡を止めぬ——と云つた風に大變高級なものになる

のであります。
 さて、今まで習つたのは、假名許りでありましたが、この課からは、少し漢字を交へることにいたします。
 書式は、所謂「散らし書」になつてゐますが、これらの書式については、又先で研究することとして、こゝでは、文字の書き方、連綿の仕方に主力を注いで戴きませう。そのつもりで、十分の練習を希望しておきます。
 手本第二十一に書きましたのは、有名な芭蕉の句「古池や蛙とびこむ水の音」であります。出来るだけ假名を多くし、漢字を少くして置きました。



最初の句、「古いけや」であります。手本でもお分りのやうに繁、粗、繁、粗の配字になつて居ります。

先づ順序通りにお話して行きますと、「古」は、手本のやうに、たつぷりと書きます。この字をしつかり書かないと、後の調子がとれなくなります。「い」は云ふまでもありますまい。第一の點と第二の點の間、紙の上では離れてゐますが、筆意では、續かせねばな

りません。「し」から次への連綿はお出来になりませう。「し」の最後の點は丸く書くやうにします。

「希」は、すらすらと書けるやうでなくては、かう云つた場合に早速困りませう。お出来にならない字があれば、いきなり練習にとりかゝらないで、先づその字を十分習つてからかゝるやうにして下さい。さて、この字は、挿圖①—②—③—④—⑤—⑥のあたりは出来るだけ筆先で、すつすつと書くやうにします。御覽のやうに、畫の多い字ですから、點畫が太くなります。際立ちすぎて、他との調和がとれなくなりませう。この字の終筆は、挿圖點線のやうに、途中まで引き下ろしてから、さつと左に拂つて、次の字へつゞくのですが、この左に拂ふのが、早すぎても不可、遅すぎてもいけません。寧ろ急ぎ過ぎないやうに、ゆつくりと書く練習が大切であります。最後の「や」は云ふまでもなくお分りでありませう。「や」の終筆——最後の畫は、直線で行き下げるのではなく、多少、右に反らせる筆意がなければなりません。手本についてよく御覽下さい。さて、以上が一聯の連綿であります。



次の一聯は「蛙とび」であります。この一聯も可なりしつ

かりと書くやうにします。

「蛙」は扁と旁、鈞合に注意し、中央の開きの狭くならないやうに氣をつけます。終筆は抑へてからさつと次へ移るやうにします。この場合、「蛙」の終筆は極端に右にあり、下の「ひ」の始筆は極端に左にある關係から、中の「と」は、挿圖點線で示したやうな關係に置きます。これは「蛙」の終筆を中央へ持つて来て「と」の始筆に入れ、「と」の終筆は、連綿の原則によつて、或る程度まで書いて——この邊の呼吸は手本について十分味つて下さい——から丸味を持たせて、次の字の左に向ふと、自然、手本のやうな、少し傾いた「と」が出来ます。

たゞ、こんな時には、挿圖○印で示した上下の部分で、鈞合をとる氣持がないと、この一聯は、右に傾いてしまふ虞れがあります。



これは手本のやうに、筆先で軽く書きます。こゝをしつかり書いてしまつては、更に味の無いものになつてしまふのですが、これ等のお話は先ですとして、こゝでは軽く書く練習をして下さい。

他に難しい事はありません。「無」は、上部が左へ張つてゐますから下部——即ち終筆は、中央で止めずに、右に軽く出して鈞合を

とります。挿圖に示した二つの○印のところでありませう。

次の一聯は「みづの音」

これは、前の「蛙とび」よりやや軽く「こ無」より

や、強く、その中間位の強さで書く練習をして下さい。

これは別に難しくありません。

挿圖○印のところは、十分に長くあけて、「徒」を左右に張るやうにして下さい。

最初の「枯」は、勿論しつかり書かねばなりません。次の「衣」は、上の漢字に比して、平假名ではあまりに筆が違ひ過ぎるので、少し筆の多い變體にしました。「衣」の點と、次の筆は、紙面では離れていますが、筆意の上では、はつきり續かせなければなりません。即ち挿圖○印のところであります。同じく、「衣」の挿圖の△印のところは、かつきりと角立てます。これから下の「當」へ連綿

最後の「音」を、どうして少し左に書いたか——これは、「散らし方」の研究の方に入りますから、後でお話する事にして、こゝでは文字の書き方を十分に習つて下さい。
さて、以上で、各一聯づゝのお話を終りました。その練習が終れば、次は始めから、終まで、一度に書く練習をして下さい。

連綿手本第二十二

連綿手本第二十二は、之も有名な芭蕉の句「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」であります。例によつて、練習用として、假名を多くしておきました。

「鳥の」は、○印を廣くしないやう、●——●を殆ど水平に書きます。下の「連」は一寸書きにくい字です。前にも云つたやうに、最初この「連」だけを十分に習つてから、「久連」を續けて書く練習をして下さい。

「に」と同じく、痛快に引きます。この一聯は、特に中心に氣をつけて習つて下さい。歪み易い傾きがあります。

「鳥の」は字の中心をうまくとつて書きます。次の「能」は、「鳥」の終筆から、すつと入れてもよいのですが、少し淋しくなりますので、挿圖點線のやうな頭をつけました。自然、釣合をとるために、右下の終筆が、手本のやうになります。この邊をよく味つて下さい。

「鳥の」

「鳥」は字の中心をうまくとつて書きます。次の「能」は、「鳥」の終筆から、すつと入れてもよいのですが、少し淋しくなりますので、挿圖點線のやうな頭をつけました。自然、釣合をとるために、右下の終筆が、手本のやうになります。この邊をよく味つて下さい。

「に」と同じく、痛快に引きます。この一聯は、特に中心に氣をつけて習つて下さい。歪み易い傾きがあります。

「秋の」

別に説明の要はありません。ただ「秋」と「の」は離れていますが、「秋」の終筆は手本のやうに、次へつゞく意を十分にを見せてゐるやうに書きます。

「とまりけり」

「とま」の連綿は、何時も云ふことですが、急ぎ過ぎないやう御注意。「と」を十分書き切つてから、次へ移るやうにして下さい。「馬」の下部は、左右に廣がらないやう御注意。「利」之は下に「り」があるのです、どうしてもこゝはこの字でないと、落ちつかない事はもうお分りでありませう。云ふまでもなく、あまり大きく書くと、平假名の「わ」に間違はれます。「介」の始筆——挿圖實線で示した筆は、實線で示した筆意がなければなりません。「り」は前の

連綿手本第二十三

これも有名な句「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」であります。作者は皆様に御存じの加賀の千代女であります。



「あさがほに」

「あ」は十分たつぷりと、大きく書きます。特に挿圖點線の部分は右に張らせないと、見ばえのしないものになります。挿圖實線のあたり、弱くなり勝ちですから、ろんと強く書くやうにして下さる。

「さ」の終筆から「可」の點への連綿——これは何度かあつたものですが、十分氣をつけて習ふこと。「可」の下部は、大きくなつてはいけません。「可」の終筆は、十分に左に延ばさないと、「本」の始筆が右に寄ることにより、従つて字全體が右に歪むことになります。御注意。最後の「耳」は前で習つたばかりですから、お分りでありませう。



「ほるへ」
注意すべき箇所は、挿圖に示した通り、「徒」の○印を廣く

とること、前にも習つたことですが「る」の書き方——挿圖點線——



「とられて」

この一聯も、別に難しいところはありますが、「ら」の字は、氣をつけて習つて下さい。亂雑に書くと、何の字やら讀めなくなり易い字であります。

「て」の挿圖○印のところは、筆を結ぶやうにして返しますが、この結び目は、大きくなつてはいけません。又、終筆は、次へつゞく氣持で、止めて押へずに、軽く上へはね出すやうにします。

この一聯は、手本でもお分りのやうに、あまり太く書かずに、軽く輕快に書くやうに心がけて下さい。

同じ理由であります。さて、一通り各聯の練習が十分お出来になつたら、始めから終りまで、一氣に練習して下さい。

連綿手本第二十四

これは一茶の有名な句であります。「我と来て遊べや親のない雀」——一茶七八歳の折の句と云はれてゐます。さて例によつて、一通りお話してみませう。



「王」の最後の横畫は、手本のやうに、少し右下りに書きます。「れ」は十分に左右に張らせて書くことは手本でもお分りの通りであります。「れ」の右部は、下へ下がり過ぎないやうに氣をつけて下さい。單に勢ひがなくなるばかりでなく、次への連綿がしにくくなりませう。「れ」の終筆は、次の「と」への意連を示します。従つて「れ」と「と」の間は、紙の上では途切れてゐるやうですが、「れ」ではねた筆は、休めずに、その勢ひのまま、すつと「と」へ入るのであります。

「と」から「き」への連綿——挿圖點線の間は、「き」の○印の



「もらひ水」

「毛」は下部が大きくなり過ぎないやうに、注意します。「毛ら」の連綿はお分りでありませう。この「ら」は、直ぐ右上にも「ら」があるので、少し形を變へました。即ち、前の「ら」は最初の點を省略しましたが、この「ら」は、御覽のやうに、點をはつきり書いてあります。自然、「ら」の上部が重くなりますので、挿圖實線で示した様に、下部は右に張らせませう。

「ひ」の終筆は、前の「て」の終筆と同じやうに、止めないで、大きく筆を廻して次へ移る筆意を見せませう——挿圖點線参照下さい——「水」へは、點線通りに筆を運んで、すつと軽く筆を入れませう。この字は、手本でもお分りのやうに、すつと筆先で書くやうにします。各筆は手本のやうに少し狂體染みにしてみました。この「水」を少し左に寄せたのは、前の「古池や」の、「音」と

開きと同じか、或はそれ以上でない、**「き」**の最初の點が**「と」**と食つて、何の字か讀みにくいものになりますから御注意。『て』の終筆は輕くはね出す筆法であります。



「あそべや」

「あ」は大きめに書きますが、たつぷりと書くのではありません。一體この一聯は、前一聯を書き終つたまゝの筆で——即ち更めて墨をつけずに、書くのであります。自然、**「あ」**も肉の細いものを書く事にもなるのであります。

「そ」の頭は大きくなり過ぎないやうに氣をつけて下さい。「あ」の終筆を受けて筆を一寸止めて右下に押へ、そのまま次へ移つて行くやうにし、特に頭を作る氣持で書かない方がよいでせう。「そ」の下——即ち挿圖點線の部分は、すつと筆を入れて、右へ引き寄せながら左へ廻すやうにしないと、物足りないものが出来ませう。

「へ」もこの場合注意を要します。挿圖點線の部分を、あまり大きく、深く廻しすぎると、「つ」に誤られ易いものになります。その爲に、「へ」で筆を離して、「や」へ移る方がよい様であります。



「おやの」

「お」の挿圖實線で示した通り、上部は可なり左に傾けて書いてみました。このためには、最後の點を、思ひ切つて主部とは引きはなして打たないと、釣合がとれなくなります。但し、「お」の最後の點は、次の「や」への意連を見せて、實際につゞくと同じやうに十分丸味を持たせて打ちます。

最後の「能」は、前の「れ」と同じやうに、右上りに書きます。



「ないすゞめ」

「な」から次の「い」への連綿は、可なり極端なものになつてゐますから、挿圖點線の部分は、筆を圓く廻さないと、窮屈なものになつてしまひます。

「春」の字は、前以つて、十分練習してから、この一聯の練習に着手される方が、より容易であります。

連綿手本第二十六

さて、今までは、連綿の練習として、最も字數の少い俳句を撰んで來ましたが、墨繼その他の難しい事は別にして、連綿だけについて云へば、お出來になれる事と思ひます。

この課からは、今一つ二つ、和歌を題材に連綿の練習をしてみませう。云ふまでもなく、散らし方、墨繼等のお話は、先に渡つて、こゝでは連綿を主に習つて戴くのであります。

御参考までに、簡單作ら、墨繼、散らし方も附け加へてはおきますが、そんな譯ですから、あまり氣になさらない方がよいでせう。



「君が代は」

「君」は假名のやうにすらすらと書かないで、重々しく書くと、手本のやうに、どつしりした感じが出来ませう。

「可」は前にも何度かありましたが、これの次の「代」への連綿は——挿圖點線の部分——あまり細くしても、上下との釣合がとれませんし、と云つて、あまり太く最後まで續けるのも、「可」の右



「千よに」

「千」の最後の横畫は、十分右方に張らせませう。挿圖點線のところは、角張らせないで、筆を圓く廻します。

「與」之は、上に「代」がありましたから、重複をさけて、體假名を撰びました。これと次の「耳」はお分りでありませう。



「やちよに」

「や」の終筆から次へ移る連綿——挿圖點線の處——の筆の持つて行き方が、不自然にならないやうに注意して習つて下さい。

「ち」の右部——挿圖點線の處は、十分に右に張らせると共に、心持ち、上へ上げることをお忘れなさい。

「よ」の最初の點から、次へ移る間、筆は紙から離れますが、挿圖點線に示すやうな氣持がなければなりません。この字から、次の「に」への連綿の曲線——挿圖點線の處——は中心から歪まぬやう、不自然にならないやう、特に御注意の事。



以上、「君が代」から、こゝまでは、最初に一度墨をつけただけで、書いてしまふので、途中で、墨を繼ぎ足さない事になつてゐます。それから、「君が代」の一聯よりも、「やちよ」の方を、細く筆先で書く事は、少し注意して手本を御覽になればお分りでありませう。



「れ」の石のこゝで、新しく墨を繼ぎ足して書きます。「さ」と次の點の間は、十分に間を開けて書くつもりで、丁度よ



「若のむすまで」

「いはほとなりて」こゝは、別に難しい事はありません。たゞ七字の連綿になつてゐますから、餘程筆を軽く自由に動くやうにしてゐなければなりませんし、行の中心に氣をつけねばなりません。注意すべき點としては、「本」の終筆——挿圖點線の部分と「利」を幅廣くしないことくらゐのものであります。「利」の幅については、挿圖に示した、他の文字との比例でお分りにならませう。

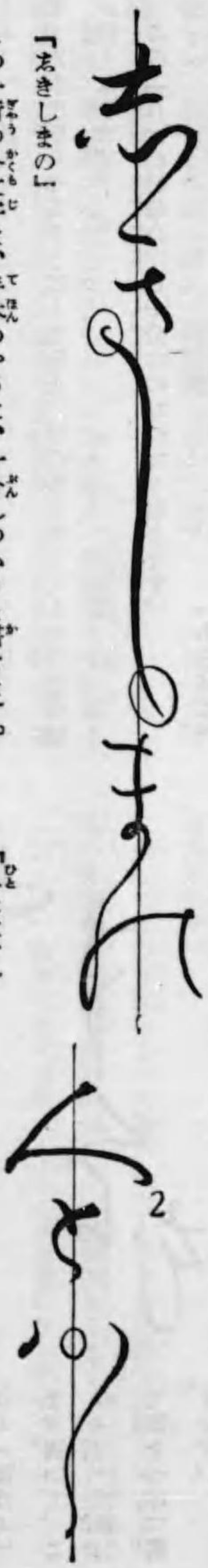
「若」をしつかり書く事は前の「石」と同じであります。「の、む、す」の字は、可なり大きくなります。「の」の挿圖點線のあたり、十分しつかりと書き、角ばらせます。「む」の終筆の點を圓く打ち、次の字へ、挿圖點線のやうに意連する事——これも既にお分りの筈です。何時も云ふ通り「ま」の點線の部分は、筆を十分に廻さない上、連綿が窮屈なものになりますから御注意。



連綿手本第二十六

さて、今一つ和歌の連綿を練習させよう。

これは有名な和歌で、皆様も既に御存知であります。——「數島の大和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花」で、作者は徳川時代の大國學者、本居宣長であります。



「まきしまの」この一行の各文字は、手本のやうに、十分しつかりと書きます。連綿その他については、お分りでありませう。この一行で問題なのは、「きし」——特に「き」の最後の點と「し」とが連なつた部分

「人とはゞ」「人」で、一寸筆に墨を足します。「人」は十分強くあたります。さつと挿圖〇へ引き下げ、押へて

筆を返して、②へ行きますが、①—②は、輕快に、十分右へ持つて行つて、その勢ひではねて次へ連綿します。

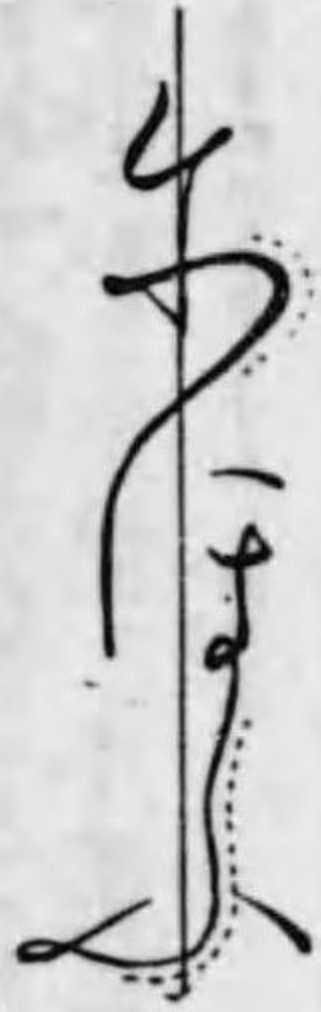
「と」は説明を要さない筈。「八」は挿圖○印を十分に廣くかつて、左右に張らせるやうにしないと、下の字が點ですから、この邊が弱くなります。

この「八」の終筆以下は十分にのびのびと書きます。



「あさ日に」
「日」は手本のやうに小さく書きます。

最後の「に」は、挿圖○印を廣くとり、實線で示すやうに、下廣がりに書きます。



「にほふ」
この三字は、墨をつぎ足さないで、前の筆のまゝで書き終ります。

「爾」の點線の部分は、次への連綿を急いで小さくなり勝ちのところですから御注意下さい。「ふ」の挿圖點線の部分は、眞下へ引くと、「ふ」の字が右によつたものになります。心持ち左に寄せて中心へ近づけるやうにします。尙この曲線が不自然にならないやう

に御注意下さい。



「山ざくら花」
前の「爾ほふ」まで書いて、この「山」で新しい墨をつけて書きます。

「山」では、挿圖點線の部分をよく練習して下さい。この山で「爾ほふ」の行を終つて次の行へ移ります。

次の行では、挿圖點線の部分——何度かあつたものですが、これがうまく書ければ、先づ無難でありませう。

最後の「花」の草書——これは手本について、習つて戴くことに致しませう。

以上で、先づ一通り連綿の練習を終りました。云ふまでもなく連綿は、單に連綿として使用されるのではなく、いろいろの條件と一緒になつて使用され、始めて本當の連綿としての美しさも、價値も生れて來るのであります。が、それは少し先の問題として、こゝでは十分に繰り返し、繰り返し習つて、連綿に習熟しておいて戴き度いと思ひます。連綿の運筆が不十分では、これから先へ行つても何にもならない事になりますから。

調和體講義

中村春堂

調和體とは何か

さて、これから調和體の練習に入るのでありますが、順序として調和體とはどんなものであるか、のお話から致しませう。

調和體と云ふ事を、この頃よく云はれるやうになりましたが、草書とか、行書とか云ふ風に、調和體と云ふ、ハツキリした獨特の書體があるわけはありません。

では、調和體とは何んであるかと云ひますと、漢字交り文を書く場合に、漢字と假名を渾然と融合させ、調和させるための特殊な書體を云ふのであります。

一體、漢字と假名では、その形の大小から云つても、字畫の多少から云つても、大分違ふものであります。これを漢字は漢字、假名

は假名と云ふ風に、各々の特長を發揮して書きますと、漢字交り文では、一見してその不自然さが目に立ちませう。云ふまでもなく漢字交り文を書く上から云へば、漢字は漢字、假名は假名と云ふ風に孤立させないで、渾然として融合させる——一見して漢字が際立つて見えたりする不自然さを取り除く——と云ふのが、最も大切な事でありませう。

そしてこの方法によつて書かれたものを調和體と云ふのであり、この方法を研究練習するのが、この講義であります。つまり分り易く云へば、假名交り文の研究——と云ふ事になりませう。

調和體の方法

漢字と假名とを調和させる——と云ひますが、これには、先づ三

つの方法があります。

即ち、

第一 漢字を假名に向くやうに柔かみを持たせる、つまり假名に接近させる。

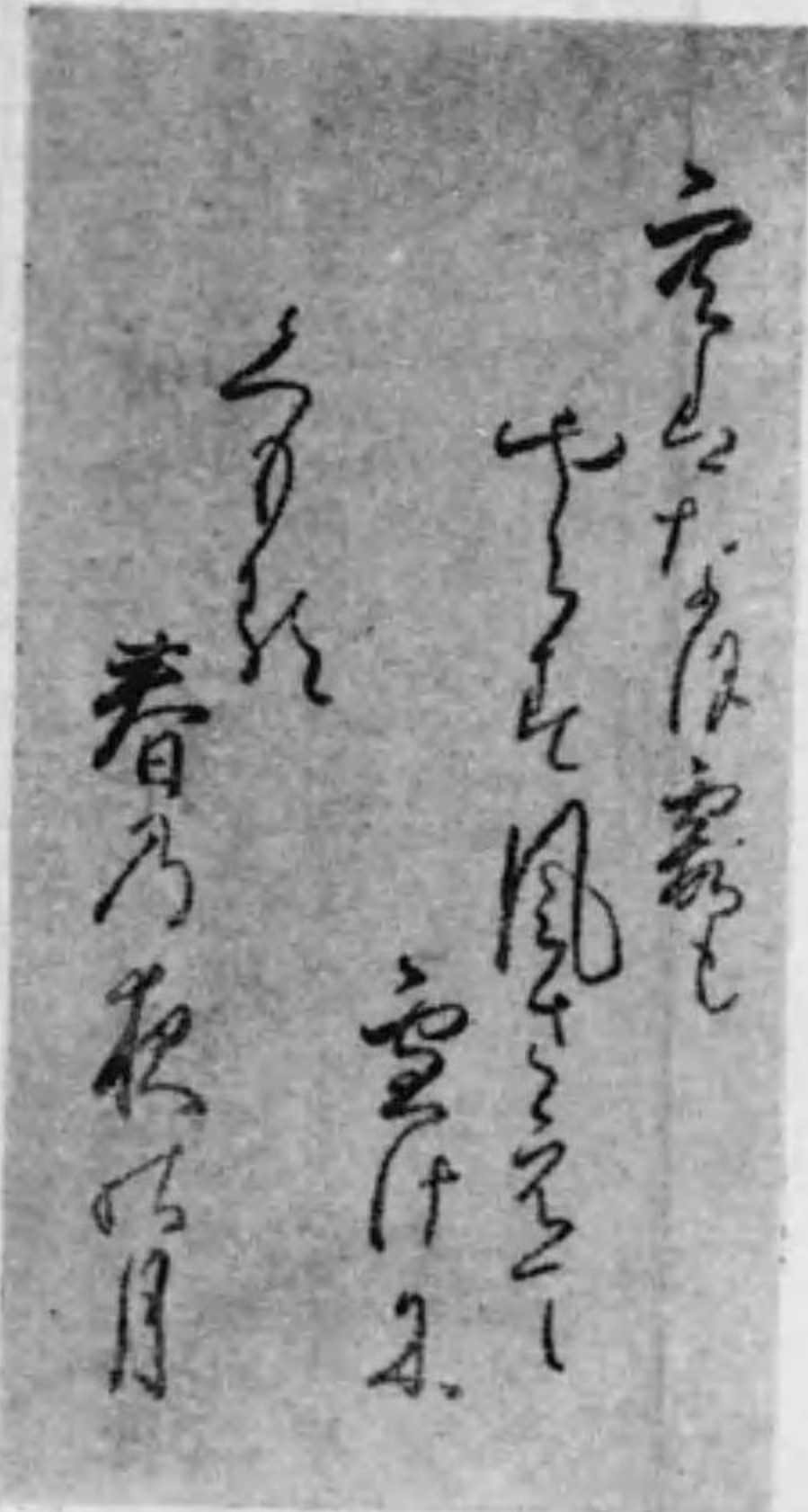
第二 假名を強く書いて、假名を漢字に接近させる。

第三 漢字を假名に近づけると同じに、假名も漢字に接近させる

——そして、漢字と假名とを調和させやうと云ふのであります。

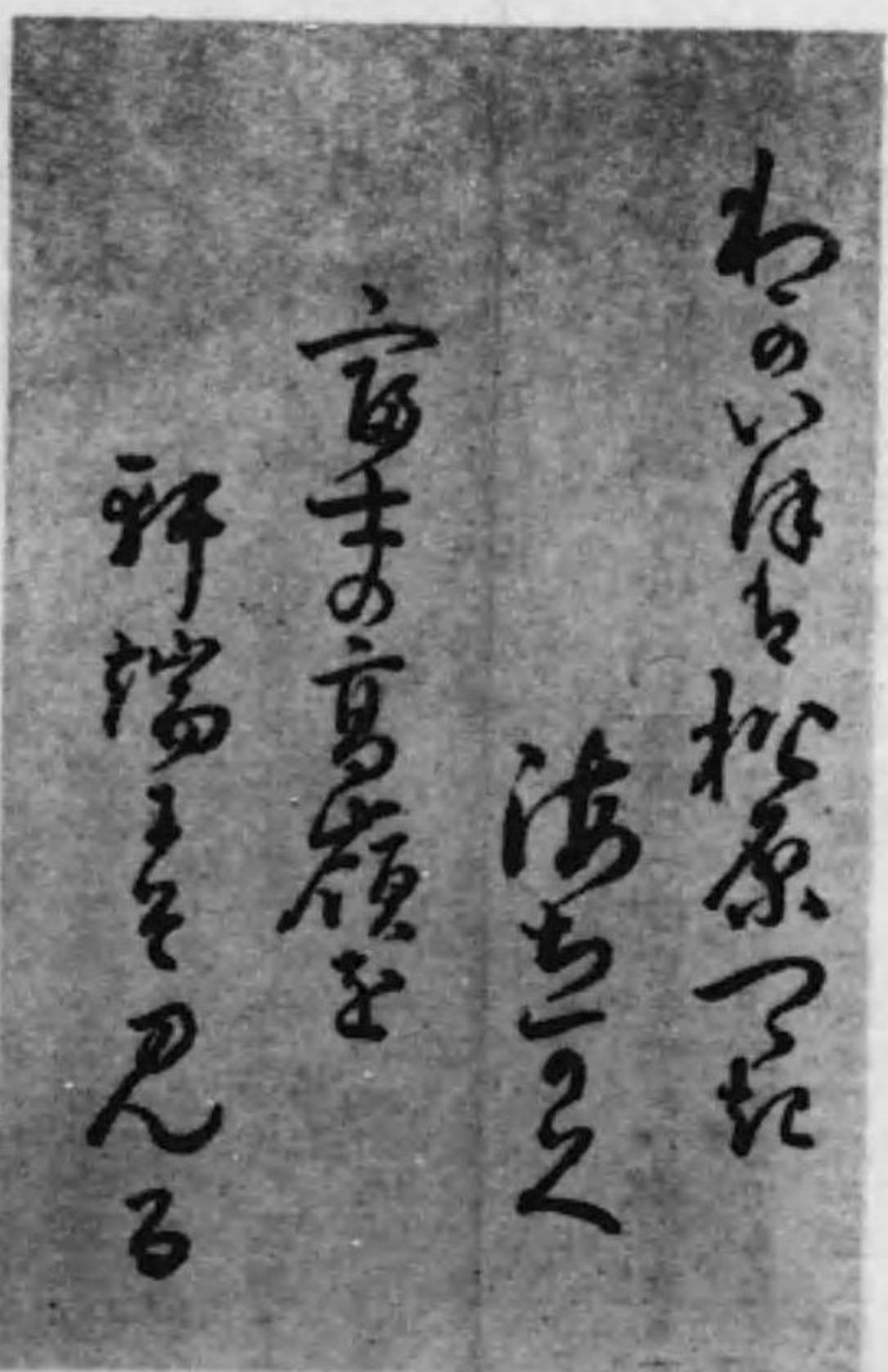
和様と唐様

一寸、話が脇道へそれるやうですが、こゝで和様書家、唐様書家と云ふ事をお話しておくのも無駄ではありません。和様書家 多田親愛先生書



和様書家と云ひますのは、假名を主として書く書家であり、假名は我國で生れ、假名書道は我國で發生したものでありますからこれを和様書家と云ひ習はして居ります。

之に反して、漢字を主として書く書家——随つて、その書法も支那の先人について學ぶ書家を、和様に對して唐様と云つて居ります。和様書家は、假名を書くのを得意とする人々でありますから、その書く漢字も自然に柔かいものになつて、漢字としての特有の味がない、書としての價値がない——と唐様書家は云つてゐます。唐様書家 日高秩父先生書



では唐様書家の場合はどうかと云ひますと、これは成る程、漢字

は漢字として特長を十分に發揮してゐますが、これは漢字だけの話で、假名の方は、どうも感心しない、假名の特長とも云ふ可き、典雅、流麗と云ふ點が、やはり漢字らしくゴツゴツしたものになつて眞の假名とは云へない——と云ふのが、和様書家の意見であります。この和様、唐様の書風については、前頁に掲げた二通りの寫眞版を御覽になると、よくお分りになりませう。

漢字と假名との調和

では、漢字と假名は、如何に調和さす可きか、——之は前に三つの方法を挙げましたが、それについての、各々の缺點は、和様、唐様の處でお分りでありませう。即ち

1、漢字を主とすれば、假名が艶のないものになつて了ひます。

2、假名を主とすれば、漢字が骨のない、柔かいものになつてしまひます。

3、漢字と假名を双方から接近させる——と云ふのは、云ふ可くして、一寸行はれ難いと云ふ可きでありませう。

では如何にするか——と云ふ事になるのであります。現在の我々日本人としては、漢字だけを書く、と云ふ事は、先づ漢詩を書くか、或は漢文を書くかの特別の場合で、一般の人々にとっては、特に考慮に入れる事はなからうと思ひます。随つて、先づ普通一般の

場合には、或々日本人には假名が主でありますから、假名を主にし、漢字を之に近づけるやうにするのが、最も無難でありませう。それには漢字を草書、或は草書に近い行書で書くのが最も調和し易いのであります。では、草書、行書以外の場合はどうするか、——これは、その場その場でお話することに致しませう。

以上、お話した事によつて、調和體の大體はお分りになつた事と思ひます。

では、次に手本の練習にとりかゝりませう。

調和體手本第一——第四 (手本第四頁第三十頁下)

調和體手本第一は、片假名交り文の練習であります。明治大帝の「教育勅語」を謄書致しました。

片假名交り文——と一口に云つてしまふと、至つて簡單なやうであります。之が案外に簡單ではないのであります。こゝで、研究練習す可き點を、逐次お話致しませう。

今までに、皆さんは、一字乃至數字の練習をして來ましたが、まだ、一枚乃至數枚に亘つた一つの文章を書く練習を済ましてはゐません。一文字、一文字がうまく書ければ、文章だつて、立派に、美しく書けさうなものです。之も、案外にさう簡單には參らないのであります。で、先づ——

一つの纏つた文章を書く心得

から、お話しして参りませう。

先づ一つの纏つたものを書くには、次の各項が守られてゐなければなりません。

- 1、各行の中心が真直に揃つてゐること
いくら各文字が、立派に書けてゐても、各行が、蛇のうねつたやうに、左右にうねうねしたのや、大きく、左或は右に弓なりに曲つたの等は、どう考へても感心したものではありません。
- 2、各行の天地が、真直に揃つてゐること
各行の頭、或は終りの字が、凸凹になつてゐるのも、決して見よいものではありません。各行の天地を横に揃へると云ひますと、よく字の上、或は下を揃へる人がありますが、これでは、天或は地が横に揃ひません。行の縦を揃へると同じやうに、各文字の横の中心を揃へるやうにしないと、文字には大小がありますから、書き終つて、きちんと揃つたやうには見えないものであります。手本をよく御覽下さい。
- 3、文字に大小のないこと
——と云つても、目立たない程度の多くの大小は、止むを得

- 4、點畫に太い細いがないこと
これも説明を要しますまい。際立つて太い線や細い線があつてはならない事であります。
- 5、行間が揃つてゐること
6、字間が揃つてゐること
等であります。

云はれて見ると、別に當然の事で、誰れでもが知つてゐる事ではありますが、さて實際にあたつて見ると、之がなかなかさうは行かないのであります。

これ等の各項は、軽く見逃さないで、十分に頭に刻み込んでおいて下さい。

さて、一つの文章を書く心得がお分りになれば、次は——

片假名交り文について

お話ししてみませう。

片假名交り文とは、申すまでもなく、片假名と漢字とを取り交せて書く文章であります。ところが、前にも一寸お話ししたやうに、漢

字は、大變に字畫の多い文字であります。之に反して、片假名は、極端に字畫の少ないものであります。この極端に字畫の多い漢字と、極端に字畫の少ない片假名とを、漢字は漢字、假名は假名、と云ふ風に、それぞれ勝手に書いて、一つの文章を書いて見ませう。出來上

がつたものは、必らず次のやうなものでありませう。即ち

- 1、字畫の多い漢字の處は、黒々と見えますが、この反對に、片假名のところは、變に白つぽく、紙面だけが眼について、疎らな、淋しい感じがしませう。
 - 2、同時に、字畫の多い漢字は、自然大きくなりますし、之に反して片假名は、自然小さくなります。大きい漢字と小さい片假名が、雜然、混然と入り亂れて、そこには美しさどころか、變にこちやこちやした亂雜さしかありません。
- これでは、いくら一文字一文字が立派に書かれてあつても、決して美しい、立派な書と云へない事は、前にもお話しした通りであります。

この混雜を防いで、見る人に、如何にもスッキリした、美しい感じを與へるやうにするには、どうすればよいか——之が前にもお話しした調和體の眼目であり、片假名交り文を片假名交り文として、練習しなければならぬ所以であります。

さて、假名と漢字を、如何にして調和さすか——調和と云ふ以上

漢字は漢字としての特長を持たせ、假名は假名としての特長を生かしながら、尙且つ全體として、一つの纏つたものと云ふ感じを出すやうにしなければなりません。では——

假名と漢字を調和させるには

どうすればよいか——をお話する順序になりましたが、之は今までお話しした處から、自然お分りでありませう。先づ

- 1、漢字の點畫を細くすること
心を懸けなければなりません。漢字の點畫を細くすると云つても、極端に細くすると云ふ意味でない事は、云はずともお分りでありませう。又一概に漢字と云つても畫の多い字もあれば、又畫の少ない字があり、それを全部細くせよ、と云ふ意味でもありません。これは勿論、片假名と云ふものを對照としてのお話で、之に漢字を調和させる——と云ふ氣持があれば、先づ大體の見當はおつきになりませうし、そのつもりで手本を御覽になれば、尙よくお分りになります。畫の極端に少ない漢字の點畫まで細くする等は、寧ろ漢字の特長を殺すやうな事になつて、決して調和させたとは云へなくなりませう。

2、片假名の點畫を太くすること
これが、前と同じ意味で必要であります。これも勿論、程度問題で、さう無闇に太くしてしまつては決して漢字に調和したとは云へますまい。畫の少ない漢字よりも、假

名の方が、太く、しつかりしてゐた等は、考へてみるだけでも變なものでありませう。

之も、漢字を相手に考へて、或る程度まで、太く、しつかりと書くことが大切なので、片假名より漢字の方が、太く、しつかりしてゐなければならぬ事は、云ふまでもなくお分りでありませう。

3、漢字を小さく書く——と云つても、小さく書いて、假名と同じ大きさにせよ、と云ふのではありません。假名に譲り、假名と調和させる氣持ちで、幾分小さいめに書く——と云ふ事でありませう。

4、假名を大きく書く——これは、前項と、將に正反對でありますから、別に説明を要しませう。漢字と調和させ、釣合をとるために、多少、假名を太く、大きめに書く、と云ふ事でありませう。

以上お話ししたのが、漢字と片假名を調和させるための方法であります。但し、どの程度にするかに就いては、實際に手本について習つて戴くより外に仕方がありません。

要するに、之等のことを、大體頭に入れておいて下さつて、後は手本について、練習又練習——その中に、自然と會得される事が多いでせう。

では、以上の事を頭に入れて、調和體手本第一——第四を十分に習つて戴きませう。

調和體手本第五——第八 (手本第四卷第三十一頁以下)

片假名交り文の練習が、十分お出来になれば、次には、平假名交り文の行書を練習してみませう。

平假名交り文の行書は、前の片假名交り文よりは、調和體としては幾分樂であります。調和體、その他の心得については、前と同じで、たゞ片假名が平假名になり、楷書が行書になつたに過ぎません。

この文章は、徳富蘆花の「自然と人生」から取りました。徳富蘆花の名は、皆さんも御存じの方があります。明治の終りから大正へかけて活躍した文士で、「不如歸」等は特に有名であります。一應、本文の讀み方を示しませう。

朝は晴れたり、午後は綿の如き雲の頻りに東より西に飛ぶを見しが、四時とも覺しき頃、障子の内俄かに鬱然と曇れるに開き見れば、一帯の黒雲己に小野子持の頭上を目がけて横はり満目の山川濕氣を含むて濃やかに宛ながら黙然と口を噤むて色憂ふるに似たり、一葉も動かず

一樹も鳴らさず、宛として一幅雨前山水の圖なり、二つ嶽は己に墨を潑したる如き雲の中に没し去りて、唯屏風岩の屹然として人を味する如き黒雲の空に突立つのみ、鼠色の雲満天に飛むで天移るかと思はる。

調和體手本第九 (第四卷手本第三十五頁)

調和體手本第九から第二十一までは、平假名交り文の草書體の練習としました。この平假名交り文の草書は、手紙等を書く時にも、よく使はれるものであります。十分練習して下さい。

假名と漢字の調和については、前の心得と同じでありますから、お分りでありませう。

こゝでは、一寸、「墨濃き」と云ふことをお話ししておきませう。墨濃きとは、墨を濃く處であります。最初筆に墨を含ませる。そして何字かを書いて來ますと、筆の墨がかすれて來る。そこで筆に墨がなければなりません。そして墨を濃いだ處を、墨濃き、と云ふのであります。

この墨濃きは、何んでもないやうで、なかなか難かしいのであります。特にそれが、一つの文章の場合には、よほど氣をつけなければなりません。

ればなりません。この墨濃きを何處にするかによつて、平面的な全體に、深い淺いが出来て、書面を變化あらしめる——これは、一定の濃度の墨で書かれた場合と比較して考へて御覽になると、よくお分りでありませう。

更に墨濃きの特長と云ひますか、役目と云ひますか、をお話ししますと、先づ、文章の區切りをはつきりさせてくれますし、行の混亂を防いでくれます。そして前にも云つたやうに、全體の單調化を防いでくれます。

墨濃きでは、對照がその生命とされてゐます。これは文字の大小の配置と同じやうなものであります。濃い處、淡い處がうまく、交錯して配置されてゐなければなりません。濃い處が一ヶ所に固つてゐたり、淡い處が一かたまりになつてゐる——などは、最も避けなければならぬことであります。

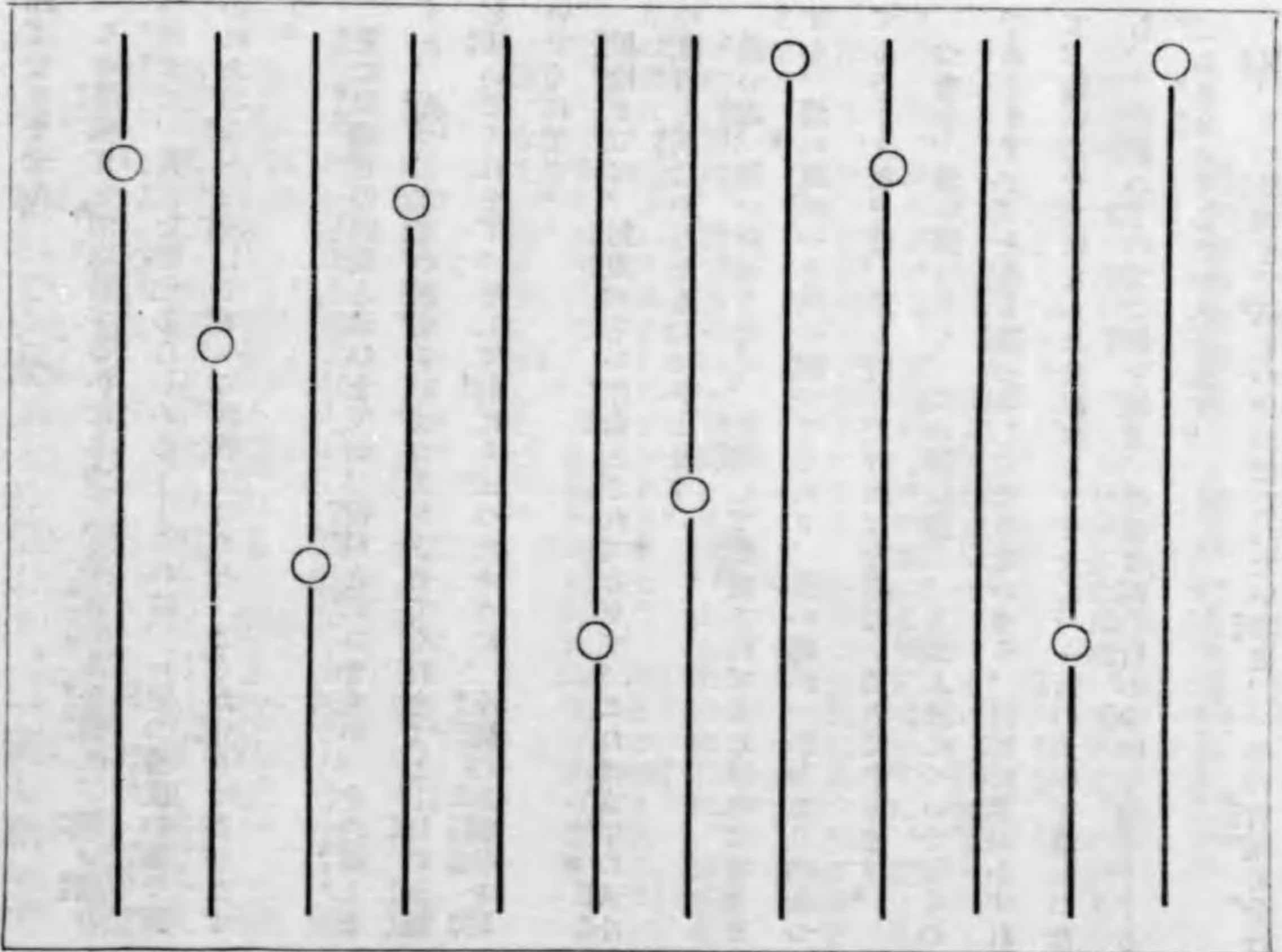
つまり、濃い處は淡く、淡い處は濃く、と云ふ風について行くのであります。それも態とらしくならないやう、自然に墨がかすれて、濃いだやうにならなければなりません。一行の最初が濃かつたら、二行目の下の方で墨を濃く、今度は四行目の中頃で濃く——と云ふ具合にするのであります。又、この墨濃きで氣をつけねばならない事は、一つの言葉を分け

て續いではならない事でありませぬ。例へば、「豊臣」と書いて「秀吉」で墨繼ぎをすべきでありませぬし、「豊」と書いて「臣秀吉」と書けば、ますますいけなくなりませう。

之と同じやうに「どうぞ」を「ぞ」で繼ぐのもいけないし、「先生」を「生」で繼ぐのも避けなければなりません。何れにしても、一つの意味をもつてゐるものに、墨繼ぎを無關心で行ひますと、うっかりすると意味を切つてしまひますから、よく注意しなければなりません。

例へば、連綿體の「手本第二十一、第二十二、第二十三の俳句は最初の十二音を一筆で書き、こゝで墨を繼いでありますが、第二十四の俳句は、最初の九音を一筆で書き、「おやのない壽じめ」で墨を繼いであります。このやうに俳句は元來二筆で書くのが普通であります。また和歌は、元來三筆で書くもので、手本第二十五は「君」で始め「左」「苔」で墨を繼いであり、第二十六は、「志」で始め「人」「山」で墨を繼いであります。

元來、この墨繼ぎは、畫家が水墨山水を畫く時のやうな心持で濃淡によつて「墨の色彩」を發揮する一つの技巧でありますから、十分に心して、要領を得るやうにして下さい。次に、墨繼ぎの要領の一例を示しませう。云ふまでもなく、一例である事に御注意下さい。○印の場所が墨繼ぎの場所であります。



さて、手本の文章は、「徒然草」から抜きました。「徒然草」と云ふのは、兼好法師と云ふお坊さんの隨筆集で、我國では、清少納言の「枕草紙」と共に、隨筆文學の双璧とされてゐるものであります。

兼好、俗名は吉田兼好、後村上天皇の頃の人で、宮中に仕へて北面の武士となり、のち通世して兼好と稱した人です。豊かな文才と共に、和歌にも巧みで、當時、和歌の四天王の一人に擧げられてゐます。お手本は、中古文でありますから、讀めない方もあるかも知れません。一應説明してみませう。

九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、
明くるまで月見ありくことはべりしに、おほし
いづる處ありて、案内させていり給ひぬ。荒れ
れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂しめや
かに打ちかをりて、しのびたる氣配、いと物あ
はれなり。よき程にて出て給ひぬれど猶事さま
の優におぼへて、物のかくれより、暫し見わた
るに、妻戸をいまずこし押しあけて、月見るけ
しきなり。やがてかけこもらましかば、口惜し

からまし。後まで見る人ありとは如何てか知らむ。かやうのことは、ただ朝夕のこゝろづかひによるべし、その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

これを、大體、現代文に直してみますと、
「九月二十日の頃、或る人に誘はれまして、明るくなるまで、月見に歩いたことがありましたが、その人が思ひ出された處があつて、そこへお寄りになり、供の者に案内を乞はせてその家へお入りになりました。私は外でお待ちしてゐましたが、荒れた庭に露がびつしよりと下りたその上に、故意と匂はせた、と云ふのではない匂がしめやかに匂つて来て、如何に然る可き由緒ある人が世を忍んで往ひなした様子が、實に情趣があります。
私を誘つた人は、丁度よい頃に出て來られました。私は尚その邊の様子を、誠に優しい趣のあるやうに思はれたので、物の蔭から暫く眺めてゐましたのに、客を送り出した主人が、今少し妻戸を押あけて、月を見てゐる様子です。客を送り出してそのまゝ内に駆け入つたとしたならば、誠に残念でせう。後まで見てゐる人があるとは、どうしてその人は心づきませう。このやうな事は、たゞ日頃の心遣ひによるのでありませう。その人は間も

なくなられたと聞きました。」

——と、これだけでは、お分りにならないかも知れないので、一寸註釋を施しますと、兼好を誘つた人の訪れた先を云ふのは、この時代の風習に随つて、女性であつたのでありませう。

兼好は、特に手を入れたやうな、わざとらしさを、極度に輕蔑した人であります。偶々訪れた人の出て来るのを待つて、庭を見ると雑草が生ひ繁つて、如何にも荒れた感じである。それに、夜もおそいから、露がびつしよりと下りてゐる。何處からともなくわざとらしからぬ匂が、かすかに漂つて来る——こゝで、一寸註を入れるとその頃の嗜ある人は、匂を實に大切に、且つ愛好した、匂に對する感覺は、到底、現代の我々の及びもつかぬ程度に發達してゐた——で、如何にも由ある人が、世を忍んで住つてゐるやうな様子である。

訪れた人は、丁度よい頃出て來た。主人の女性は、その人を送り出して、そのまゝ妻戸を開けて、月を見てゐる様子である。これが客が出ると一緒に妻戸を、びしやりと下りて内へ引込んだとしたらその由あり氣な、世を忍んでゐる女性は、荒れたる庭の景色、つゆけき趣、それを照らしてゐる月に何の感情も、美しさも見出せぬ人である。見てゐる兼好の好みから云へば、如何にも「口惜しがる。

べし」でありませう。

特にそれが、見てゐる人が、ありとも覺えぬ處でした仕科であるが故に、一層兼好を感激させてこの一篇が生れたのでありませう。さて、以上が、文章の方の説明であります。これから書く方のお話をして参りませう。先づ、一課一課を十分に習つて、それから全部——即ち手本第九から第二十一までを一氣に習つて戴くやうにしませう。

こゝで、特に氣をつけて戴かなければならないのは、墨つきと、連綿であります。

それから、天地を描へる事も練習して下さい。草書にあつては、字間を伸縮したり、字の大小で、或る程度まで調節が出来易いものであります。この邊も、手本について、十分練習して下さい。

では手本の練習に取りかゝりませう。最初にたつぷりと墨をつけますと、

『九月二十日能ころあるひとに』

までを、一筆で書いてしまひます。

『九月二十日』は手本のやうに、十分にたつぷりと書くやうにします。『二』と『十』の横畫の平行を避ける事は、手本にある通りであります。



「能」は十分、左右に廣く書くやうにします。「ころ」の連綿はもうお分りでありませう。大して難しいものではない筈です。

「あるひ」

このところはよく氣をつけないと、うまく書けません。まづ挿圖「あ」の點線の部分は、十分に右に張り丸く書くやうにします。先へ急ぐと、何時も云ふ事ですが、丸味が小さくなります。「る」の始筆——挿圖○印のところは、突き返すやうにして「る」を始めます。こゝは、きつかりとさせた方がよいでせう。挿圖「る」の點線の部分も、十分注意して書いて下さい。「る」の中心を氣をつけないと、うつ向き過ぎたり、仰むき過ぎたりした字になります。「る」の終筆は、思ひ切つて左から始めないと、「ひ」が右に寄つてしまひませう。



「と」
この二字は、先づ中心をとるやうに氣をつけます。



「と」の終筆は中央まで書いてから、十分に丸味を持たせて左に向けます。角立ゝないやうに、くれぐれも御注意のこと。「に」の一畫——挿圖實線の部分も、あまり右に傾き過ぎたり、或は立ち過ぎたりしないやうに御注意下さい。さて、こゝで筆に墨を續ぎます。

「者れ奉りて」

これは難しくはありません。中心、字間に氣をつけて下さい。



「明久る」
「明」の字は偏と旁の間を廣くとり、釣合をう

まく取つて書きます。「明」の終筆から「久」へ連綿する邊り、十分に習つて下さい。何んでもないやうで、一寸書き慣れないと、形がつかえません。最後の「る」は小さく書かないと、行へ納まらない事になりませう。

調和體手本第十 (第四卷手本第三十六頁)

この課は

「まで月見あり久ことはへ利しにおほしい徒る」

で、「は」の處——〇印——が、墨繼ぎの場所であります。

この課は、今までの連綿が十分に出来てゐれば、大して難しくな
い筈です。

「月見」は強く書かない方がよいでせう。

それに、字畫も多くない字ですから、假名と
同じ調子に書きます。之を強く書くと、次の
行の墨繼ぎの場所を變へないと、この邊りが
黒っぽくなつて、見苦しくなります。



調和體手本第十一 (第四卷手本第三十七頁)

この課の墨繼ぎは、次の通り〇印のところであります。

「と。ころあ利天

あ奈い左せ亭

い利たまひぬ荒」

「と」は十分にしつかりと書きます。「ろ」の左下への畫は、十
分にのびのびと引き下ろして、右へ圓やかに筆を廻すやうにします
この「ろ」と次の「あ」は十分に大きく書きます。「天」は、始め
て出て来る字體です。行の最後ですから、淋しくなるのを嫌つて、
一寸變化させて見ました。中心を失はないやうに氣をつけて習つて
下さい。

次の行には、別に難しい字はありません。たゞ、次の連綿は一
寸中心が取りにくいかも知れませんが、挿圖を出しておきます。

「左せ亭」

右の中、「さ」の終筆は十分左下に引いてから、「せ」の始筆に
入らないと、「さ」と「せ」の字間が狭いものになりますから御注
意の事。

次の行は、「た」で墨繼ぎします。

「たまひぬ」を心持ち大きめに書き、最後の「荒」を心持ち小さ
く書いて、全體としての調和をとる事は、手本の通りであります。
十分注意して習つて下さい。

調和 手本第十二 (第四卷手本第三十八頁)

こゝの墨繼ぎは、次の通りであります。

「連當る庭の徒ゆ

し介支耳わさと

ならぬ匂し免」



「連當る」

これは一寸中心が取りにくく、一つの連綿として調子がとりにく
いかも知れません。これは、挿圖點線の部分で、即ち上の右の方が
重くなつてゐますので、「る」の始筆——挿圖〇印のところを、思
ひ切つて左へ出して釣合をとるやうにするとよいでせう。その心で
十分に習つて下さい。

「庭」はかなり畫の多い大きな字でありますので、次の「の」は
大きく書いて、「庭」だけを目立たさないやうにします。

次の行は云ふ事もあります。

最後の行は、「ならぬ」——特に「ぬ」を大きく、しつかりと書

らして「匂」と調和させます。「し」は丁度一字分の餘裕を置いて、
十分に引いて、行の納りをよくします。

調和體手本第十三 (第四卷手本第三十九頁)

こゝでの墨繼ぎは左の通りであります。

「や。可にう知可

を利て志能ひ

たる介者ひいと」

この課では、別に難しいところもありません。各行の中心を歪
まぬやう、行の天地の揃ふやうに氣をつけて、手本のやうに、のび
のびと書くやうに練習して下さい。

調和體手本第十四 (第四卷手本第四十頁)

こゝの墨繼ぎは左の通りであります。

「物。あ者れ奈り

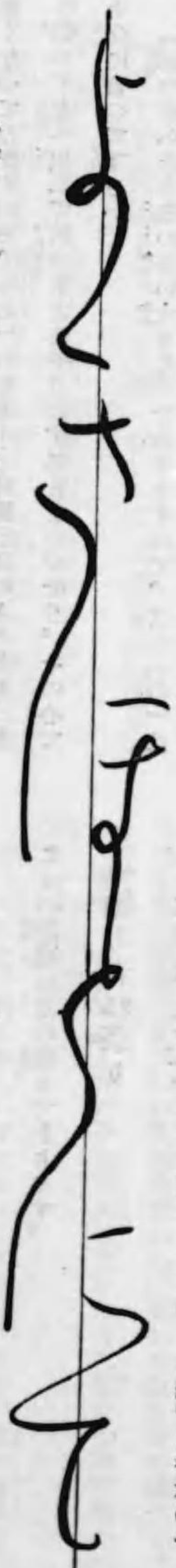
よきほとにて

いて給ひぬれと」

第一行目——「物」はあまり大きくならないやうに書かねばなり

ません。「あ」は十分に書いて、上の「物」との釣合をとります。他は、さう難しいところはありますまい。

第二行——これは、前以つて餘程よく手本を研究して書かないと



に、あまり目立たさねやうに氣をつけて習つて下さい。それから「ひ」の終筆から次へ連綿する邊り、注意を要しませう。

調和體手本第十五 (第四卷手本第四十一頁)

こゝの墨繼は、左の通りであります。

「猶事さ馬の優

耳於本衣て物

の可く連より」

第一行は、手本を御覽になれば、説明するまでもなく、お分りで



全部の文字が連綿してゐるやうなものですから、中心をとるに骨が折れませう。挿圖に、中心を示しておきますから、御参照下さい。

第三行は、最初の「い」で墨繼をします。「給」を手本のやう

ありませう。

第二行は、第一行の一字、二字めが割に混んだ部分であるので、二行目のその際のところは、「に」の終筆を長く引いて釣合をとるやうにします。最後の「物」は、この右にたつぷりとした漢字があるので、出来るだけ細く、小さいめに書いて、この邊がくどくならないやうに心がけます。

最後の行も、始めから終りまで、連綿してゐます。中心、一字一字の書き方を十分心に入れてから筆をとつて練習するやうにして下さい。

一寸説明してみますと

春こしお志」

第一行——は、別に難しいところもありません。上で、一字挟んで「し」の字が二つ出て來ますので、最初の文字を變體にししました。「し」は痛快に引きます。「る」は心持ち大きく書いて、上の「見」と調和させるやうにします。

第二行——こゝも別に難しいところはあります。「妻戸」は前回の「し」が少し淋しいので、故意とに、しつかりと大きく書いて變化を求めるとなりました。

第三行——この行にも、一字挟んで「し」の字が二つ出て來ますので、一方を變體假名にして、單調になるのを避けます。

調和體手本第十七 (第四卷手本第四十三頁)

こゝの墨繼は左の通りであります。

「あ希て月三

介しき奈り

や可てかけこ毛」

第一行——「あ希」は、十分にしつかりと書きます。さうしておけば、「月」を普通に書いても、うまく調和しませう。その他には

前行の上の方が、少し淋しくなつてゐますから、この行では、たつぷり書くやうにしますが、第一行ほどには書かない方が宜しい。

「の」の挿圖點線の部分は、十分力を入れて、しつかりと書きまします。「か」の第一の點は、筆を入れた勢ひで、すつと抜くやうにして次へ移ります。「か」と「久」の連綿——挿圖點線の部分の曲線は、筆の勢ひで、自然に書く——そんな氣持で書くと、滑らかな、自然なものが書かせう。

「久」の二つの○印の線は、殆ど水平に引く事は、前にもお話した通りであります。

「連」これは、始めの間は、一寸中心がとりにくい字です。最後の畫——挿圖點線の畫の引き方に、十分御注意下さい。

「より」は手本にもある通り、糸の如く細く、すつすつと書きまします。この線を、細く書くために、弱いものにならないやうに氣をつけて下さい。勢ひよく書けば、その懼れはない筈です。

調和體手本第十六 (第四卷手本第四十二頁)

こゝでの墨繼は左の通りであります。

「志八し見み當

るに妻戸をいま

別にお話する處もないでせう。

第二行の「介し」は、第一行のこの部分がしつかりしたところから、輕快に書きます。「き」で、少し墨を繼ぎたします。

第三行——最初の「や」の字で墨繼ぎをします。同時に、この字は十分にしつかりと書く事は手本の通りであります。

調和體手本第十八 (第四卷手本第四十四頁)

「らまし可は口措

志から万し阿と

まて見る人あり」

第一行——「ま」の最後の結びを思ひ切つて右上に上げてから、次の「し」は痛快に引いて、さあつと拂ひます。最後の「口措」は手本のやうに、あまり大きく書かないやうにします。

第二行——で、氣をつけなければならぬのは「ら」の字であります。うっかり書くと、何の字だか分らない事になりますから御注意のこと。

第三行——前行が、割に淡い部分ですから、こゝはたつぷりと書くやうにします。「見」「人」は字畫も割に簡單ですから、假名よりも心持ち大きく書いて見ました。

調和體手本第十九 (第四卷手本第四十五頁)

こゝの墨繼ぎは左の通りであります。

「と者いかて可

しらむ可やう

能ことは當々朝夕」

第一行——これは別にお話するまでもなくお分りでありませう。

第二行も同前。
第三行——前行の「し」が淋しいので、三行めの上部分はかなり、しつかりと書きます。他は、もうお分りになれませう。

調和體手本第二十 (第四卷手本第四十六頁)

こゝの墨繼ぎは次の通りであります。

「のこゝろ徒かひ爾

よるへしそ能

人本となくう世」

この課も別に難しい處はありません。第一行は、六字の連綿があります。中心さへ氣をつければ連綿には難しいところはないで

せう。

二行も同様です。「し」は十分に痛快に引くやうにします。その他は、別に説明を要しません。

調和體手本第二十一 (第四卷手本第四十七頁)

この課の墨繼ぎは左の通りであります。

「爾介利登

き、者へ利

し」

即ち最後にたつぷりと墨をつけただけで、全部を一筆で書くやうにします。

このやうに、一行づゝを纏めて書くと、紙に餘白が出来る場合は手本のやうに散らして書きます。散らし方に就いては、先でお話する事にして、こゝでは連綿その他について練習して下さい。

第一行、第二行ともに、もうお分りでありませう。

最後の「し」は、手本のやうに細く、長く十分勢ひよく書きます

さて、以上、一課一課についてお話しし、練習もして参りましたが、こゝで、一つの文章が終つたわけがあります。各課をそれぞれ

練習された方は、最初から——即ち調和體手本第九課からこの課までを、一氣に書く練習を何度かして下さい。短かい文章は書けるが長いものになると駄目だ、などは、いざと云ふ場合に困りませう。いくら長く書いても、最初と同じやうに、文字も亂れず、ちやんと統一のある美しい字が書けるやう、十分腕を練られるやう、お願ひしておきます。

調和體手本第二十二 (第四卷手本第四十八頁)

さて、最後に自作の和歌を一つ書いておきましたから練習して下さい。

この歌は、日頃皆さんの熱心な清書を見てゐる中に、ふと浮んだ私の感慨であります。

墨繼ぎは左の通りであります。

「かきならふ筆の

あとにも

をしへ子

の

ゆく春ゑみ衣て

當能毛し支

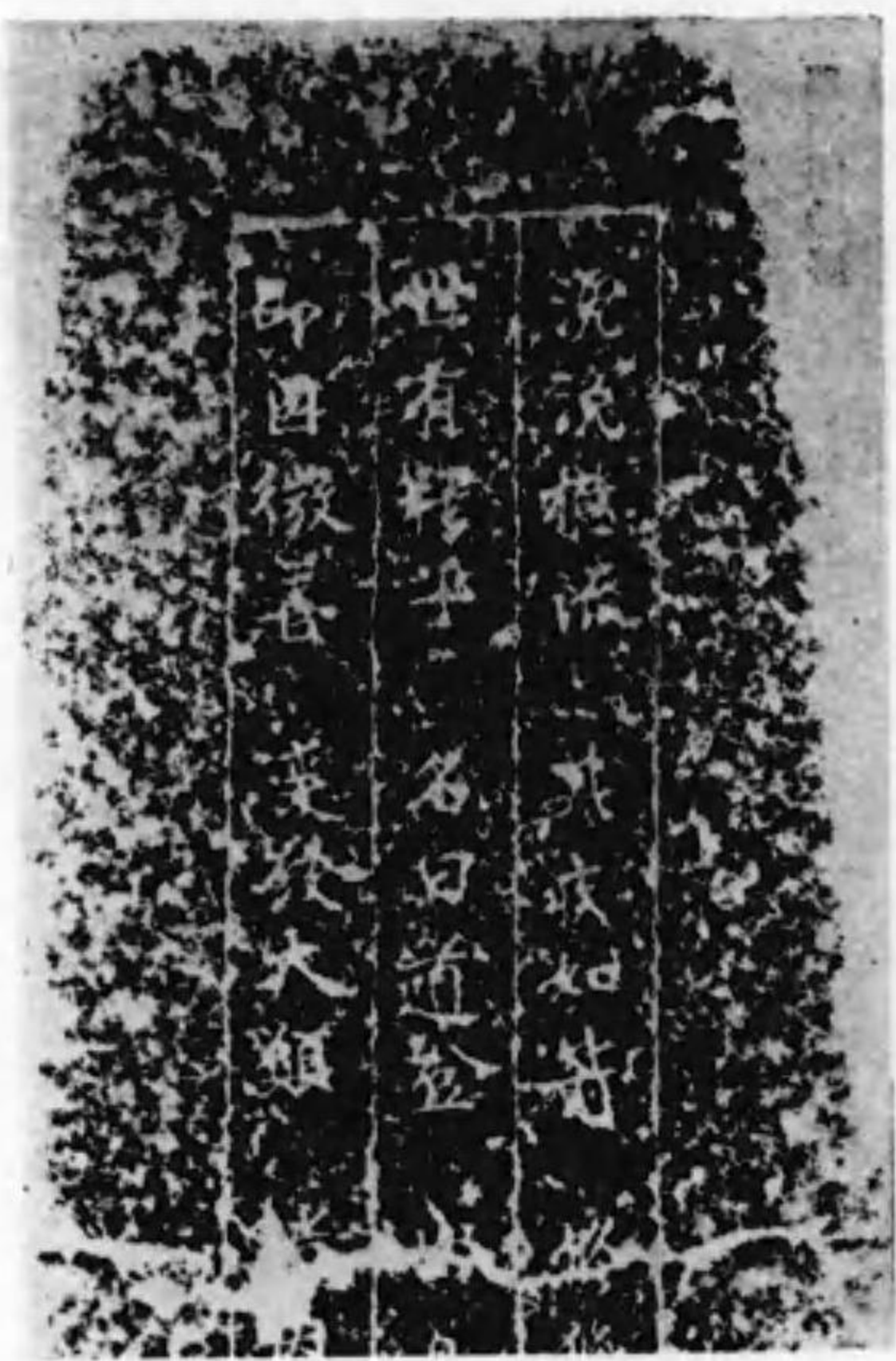
か那

かう云つた風な、行を亂して書く書方を「散らし書」と云ひますが、この散らし方については、先になつてお話しませう。こゝでは、連綿、調和、墨織等について練習して下さい。
何故、こゝで墨を糺ぐか、どうしてこの邊を細く書き、或は太く書くか、これは前にお話した事ですが、こゝでは一つ皆さんで研究して戴く事に致しませう。何度か練習してゐる中には、自然、納得が行く事と思ひます。

日本書道史

中村春堂

宇治橋斷碑



日本書道史

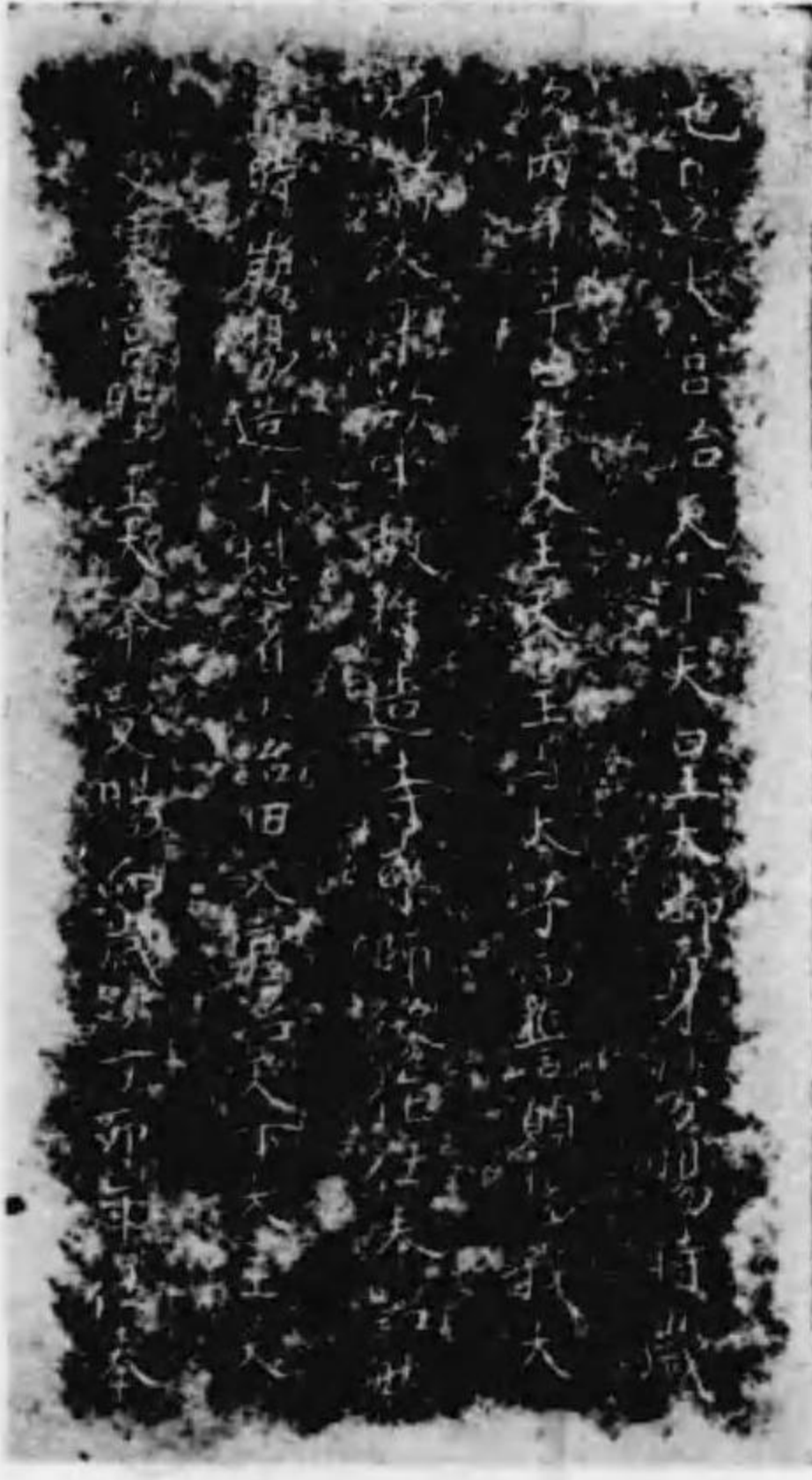
序の言葉

云ふまでもなく、書も昔から現在の形態を具へてゐたのではなく様々の變遷を経て、今日に到達したのであります。これは、社會や思想が、様々の變遷を経て今日に到達したのと同じであります。典雅な、櫻かざして歌ふ大宮人の平安朝には、それにふさわしい書が発達し、剛毅果斷な武人が天下を掌握してゐる時代には、又それにふさわしい書が発達してゐるのであります。
由來、書道史と云ひますと、無味乾燥、たゞ専門家の専有物で、一般の人々には、更に縁遠いものゝやうに考へられ勝ちであります。たが、之がとんでもない考へ違ひである事は、上述の意味からお分りになリませう。

藥師佛光背銘



那須國造碑



更に又、一通り書の基礎が出来た。曉には、一通り書道史を心得てのると云ふ事は、その人の書に對する見識を高くし、眼を豊富にする上にも、至極大切な事でありませう。

書道の發生と搖籃期

支那から文字が入つて来る前に、日本特有の文字があつたか、なかつたかは、大分議論のあるやうであります。先づ一般にはなかつたと思はれて居ります。

隨つて我國に始めて文字の輸入された時、即ち第十五代應仁天皇の十六年、百濟の王仁が論語、千字文を献じた時が、日本書道史の第一頁となるわけでありませう。

文字が我國に輸入されてから、之が書として發達するためには、第二十九代欽明天皇の御代の佛教の傳來——一二二二年——と云ふ事實が必要になつて参ります。即ち、佛教の輸入と共に、寫經——お經を寫す——と云ふ事が盛んに行はれるやうになつたのであります。之は信仰心からもされたのでありませうし、又印刷術の發明さ

釋迦佛光背銘



れてゐない當時は、需要上の必要からも、大いになされたのでありませう。かうして、書道は、漸く發達の過程を辿りつゝあつたのであります。

そして第三十八代天智天皇の御代に淡海の朝の書法一百卷を、第四十六代孝謙天皇の天平勝寶八年に崇福寺に施入したと云ふ記事が見えたり、或は書生、書博士等の言葉が現はれたり、式部省内大學寮に書博士十二名を置いて書法を講ぜしめたとか、或は中務省の圖書寮に寫書手二十名を置いて史書を筆寫させた——等々の記録があるところを見ますと、當時既に、日本書道の隆盛に赴きつゝある事が分ります。

この當時の書風は、支那六朝北派の風を帯びてゐる、脱俗高雅な筆致のものであります。

現在まで残つてゐるものは、聖德太子の肉筆で、日本最大の筆蹟「法華義疏」二十數種ある金石文——その中で特に有名なものは、「藥師佛光背銘」、「釋迦佛光背銘」、「宇治橋斷碑」、「那須國造碑」、「伊豫道後溫泉碑」等であります。

奈良朝時代

奈良朝時代と云ふのは、既に御存知の様に、第四十三代元明天皇から、第四十九代光仁天皇まで七代七十餘年間の事を云ひます。この時代は、大變に佛教の盛んな時代であり、同時に支那との交通が盛んで、王羲之の書が輸入されたり、吉備真備が入唐して張旭の書法を傳へる等の事があり、書道界も大いに新興の意氣に燃えた時代

樂毅論 之は光明皇后が王羲之の樂毅論を臨書されたもので、行の文字數も、文字の結體も全く同じであります。筆力は女性としては、非常に雄健であります。當時はまだ文字が渡來した直後であり、我が國風に同化してゐない故であります。卷尾に「天平十六年十月三日 藤三娘」とあり、正倉院御物となつて居ります。(皇后は藤原氏の出であります)

◇吉備眞備 元正天皇の養老元年三月、年廿四歳にして、阿部仲麿と共に唐にわたり、在唐二十年、經、天、數、樂、軍書等の諸學を修めた大學者、大政治家で、八十二歳に歿しました。書は唐にあつて張旭に學び、世に片假名の作者として傳へられてゐます。その筆と云はれてゐるものに

南都の焼切
虫食切

がありま。虫食切は寫體で、習熟し切つた筆致で書かれた整正なものであります。

以上の他に、當時の能書家として有名な人は、眞備の子の朝野魚養、橘諸兄(治部卿美女王の子、天平寶字元年七十四歳薨)、惠美押勝(左大臣武智麿の子)、僧鑑眞(揚州江陽縣の人、天平勝寶六年に來朝歸化、七十七歳薨)、僧良辨(近江志賀の人、俗姓百濟氏、義淵僧正に師事す、東大寺の開山、八十五歳薨)等があります。

平安朝時代

平安朝時代と云ふのは、云ふまでもなく、第五十代桓武天皇から第八十一代安徳天皇に至る約四百年間を云ふのであります。この平安朝時代は、我國の書道を論ずる眼目は平安朝にあると云つてよい程、種々な意味から重要な時代であるのであります。

即ち大和、奈良の兩時代に準備を調べ、育くまれつゝあつた書道は、この期の絢爛たる文化の下に、ものゝ見事に咲き誇り、書の極致にまで發達した——と云ふ程の黄金時代を現出したのであります。之は云ふまでもなく、遣唐使、留學生等によつて、燦然たる盛唐の書法が傳へられると共に、一方、三筆、三蹟の天才を生み、幾多の能書家を輩出して、平安朝時代を現出したのであります。更に我が國獨特の和樣體、假名文字が創成された事も、この時代の大きな特徴の一つであります。

この時代についてお話をするには、先づ三期に分けてお話をするのが都合であります。即ち

- 初期 第五十代桓武天皇の御宇から第五十八代光孝天皇の御宇、皇紀一五五〇年までの約百年間。
- 中期 第五十九代宇多天皇の御宇から第六十八代後一條天皇の御宇、皇紀一六九六年頃迄、約百五十年間。

末期 第六十九代後朱雀天皇の御宇から第八十一代安徳天皇の御宇まで、皇紀一八四五年頃迄約百五十年間。

平安朝初期

この時代は、皇威の最もよく振ひ、天下またよく治つた時代で、書道に於ても、漢字に於ける我國書道の全盛期であると云つても差支へありません。

この時代は、支那では丁度中唐の時代で、我國からは、最澄、空海、逸勢等が入唐して、宗教を學び、文物を傳へると同時に、書道をもまた傳へたのであります。書は晋唐風と云はれてゐるものがあります。當時の人々が研究傳習したのは、自然晋唐風の書であつた事は云ふ迄もありません。同時に晋唐風を傳習し乍らも、その漢字が日本化し、我國獨特の書法に向つて進みつゝあつたのであります。之は云ふまでもなく、我日本人の同化力の素晴らしい表現するものであると共に、支那文化を、單に受け入れる許りでなく、既に之を咀嚼吸収してゐたことを示すものに外なりません。

之は、この時代に、片假名、平假名が完成されてゐた點からも明らかであります。

この時代は、世に有名な三筆——即ち嵯峨天皇、僧空海(弘法大師) 橘逸勢を始め、三筆に劣らぬ僧最澄(傳教大師)があり、藤

原敏行、菅原道眞等の能書家が輩出した時代であります。

平安朝中期

この期の特徴は、和樣體——即ち日本獨自の書風を完成したこと。高雅、秀麗な平假名書道の極致を示し得た事にあります。

漢字は晋唐の書風を脱して濃厚圓柔な趣きを帯びるやうになり、當時の時代精神をそのまゝ反映させて居ります。唐漸く衰へて國內大いに亂れたため、宇多天皇の御宇、菅原道眞の建議によつて遣唐使が遂に停止され、支那との交通は少くなり、ために漢文學が漸次衰へると共に、之に代つて國文學が大いに勃つた——これもこの期の大きな特徴の一つであります。詩文に和歌に繪畫に、大いに名家が輩出しましたが、特に和歌、國文となると、婦人の中から才媛が多く生れ、紫式部、清少納言等は、特に有名であります。

此等の國文學の隆盛に隨つて、完成されたのが、假名書道であります。

平安朝初期にあつて、假名は既に發生し、使用されてゐたのであります。その完成はこの期の、洗練され切つた文化に會ふ迄待たなければならなかつたのであります。優雅典麗を愛する大宮人の手によつて、假名は更に流麗になり、典雅になり、連綿遊絲の趣を得るやうになつたのであります。

この華やかな書道の全盛時代にあつて能筆又雲の如く起つた事は云ふまでもありません。小野道風(野蹟)藤原佐理(佐蹟)藤原行成(権蹟)の所謂三蹟を始め、紀貫之、源順、兼明親王、紫式部大貳三位、小大君、藤原公任等、それぞれに、この期にあつて活躍したのであります。

中にも行成の書風は、大いに一般から愛好され、空海の大師流と相並んで、世尊寺流として後世に傳はり、日本書道の上に、大きな歩みをつけて居ります。

平安朝末期

この時代は、社会的にも騒々しい、不安な時代で、藤原氏の勢力も漸く衰へ、源平二氏の激しい闘ひが展開された時代であります。随つて書道も、中期の遺風を守り乍らも次第に光を失ひ、格調の下つて来た事が眼立つて参ります。

假名は行成、公任の遺風を傳へて、益々伸達した感じがあります。が、やはり漢字と同じやうに、中期に比らべますと、格調の下るのを認めなければなりません。

その中にあつて、獨り萬丈の氣を吐いてゐるのは、西本願寺藏の三十六人集で、書と云ひ、料紙と云ひ、古筆中の隨一を以つて推されて居ります。

以上は、平安朝書道史の、ほんの概観に過ぎません。平安朝書道

史は、研究すればするだけ、益々興味深くなつて来るものであります。が、今は、残念乍ら次の機会にゆづる事に致しませう。

平安朝時代の能書家

平安朝時代は、前にもお話ししたやうに、書道の黄金期であり、随つて、様々の能書家が雲の如く輩出し、將に百花繚亂の有様であつたのであります。その中でも特に有名な人を挙げますと、先づ次の人々があります。

嵯峨天皇、僧空海、橘逸勢(以上三筆)小野道風、藤原佐理、藤原行成(以上三蹟)僧最澄、大江朝綱、藤原公任、藤原敏行、菅原道真、兼明親王、小野篁、紀貫之、源俊賴、源順、小大君、具平親王、源道濟、藤原道長、紫式部、藤原定賴、藤原忠家、藤原伊房、藤原定信、藤原伊行、藤原行經、大貳三位、藤原俊忠、源俊房、藤原基俊、藤原綱輔、西行法師、源賴政。

以下、それぞれについて、一通りお話しませう。

嵯峨天皇

人皇第五十二代。桓武天皇の第二皇子。延暦五年九月七日御生誕。承和九年七月十五日崩御。御年五十七。

嵯峨天皇は御幼少から甚だ學問を好まされ、博く經史に通じ詩文を善くされた方でありませう。特に書は僧空海、橘逸勢と共に

に世に三筆と稱せられ給ふたのであります。

天皇のお書きになつたもので、今日まで傳はつてゐるものとしては

◆金字法華經

帝室御物、御父桓武天皇のために書寫せられたもの、謹嚴な楷書で書かれてあります。

李嶠詩集

虚室重指海忘多契断介
 其序漢分酒雪麓先王琴
 度想松香茂多臺晚史吟
 何何聽權秀誰肯訪山陰

◆李嶠詩集

唐の李嶠の詩百二十篇の中、二十首が帝室の御物となつて居り外に一首、近衛家の藏になつてゐます。白麻紙に書かれたもので、王羲之、歐陽詢の書風に似て、靈氣を發する感あるもの、雄大超妙の行草體であります。

空海の書と似通ふものが多くあります。

◆哭澄上人 五言排律
 帝室御物、天皇が、傳教大師の入寂を惜しませられた御製五首長律の御書であります。

前の李嶠詩に比べますと、之は大師流の御筆蹟であります。氣品の高い、精妙な草書であります。

◆飯室切
 叡山飯室別院所藏。これは淺黄麻紙に書かれた寫經で墨野のあるものであります。

僧 空海

僧空海と云へば一寸馴染まない名前であつても、弘法大師と云へば、すつと親しく聞える程、空海は有名な人でありませう。眞言宗の開祖であります。生地は讃岐多度郡屏風浦、寶龜五年六月十五日(一四三四年)に生れ、姓は佐伯、俗名は眞名又は實物、法名を教海如空、無空と云ひ、後空海と改め、遍照金剛とも號しました。幼兒から神童の譽高く、才氣俊拔、少年の折に上京、儒を學んだのですが、後勤操について三輪を究めました。

桓武天皇の延暦二十三年、三十一歳の時、遣唐使藤原葛野麿に随つて入唐し、密教を修得する一方、書を韓方明に就いて學びました。が、忽ちの間に五筆和尚とまで、唐人に崇拜せられるやうになりました。

した。
 歸朝後は、嵯峨天皇の御寵遇が厚く、佛法の弘通、書道の普及、
 又は、池堤を修築して産業開發に貢獻すると共に、育英事業に盡し
 又和漢の學に通じて二百餘部の著を成す一方、詩文、書畫、彫刻に
 も長じ、萬世の宗師と仰がれました。承和二年三月二十一日（一四
 八五年）六十二歳で入寂。後弘法大師の勅號を諡られました。
 空海の書は、神韻飛動、致趣豊潤、變轉自在、人をして陶酔せし
 めずにはおかぬと云はれてゐます。空海は、單に書を能くしたのみ
 ならず、製筆法にも通じ、書論、口訣にも詳しく、眞に書聖と云は
 れた人であります。

聖賢指歸

龍華聖賢指歸下卷 并序
 龍龜毛先生論
 慶古隱士論
 假名乞以論
 觀世常賦

今日に至るも、大師流として、空海の傳へた書流が残つてゐる事
 を見ても、この事はお分りにならませう。
 現在でも、空海の書は、非常に澤山保存されてゐますが、特に有
 名なものを御紹介してみませう。

聖賢指歸

これは十八歳の時、孔子、老子、釋迦の三教について比較研究
 して著した「聖賢指歸」三卷を、二十四歳の時、朝野魚養に就
 て學習中に書いたものと云はれてゐます。字の大きさ、八、九
 分、稍一調子であります。筆力雄健で、流石他日の書聖の面
 影を示してゐるものであります。之は高野山金剛峯寺の藏物に
 なつてゐます。

三十帖策子

在唐中に、眞言の法文を書寫したもので、三十冊ある故にこの
 名があります。細字で、方二、三分、楷、行、草の各體があり
 ます。
 この書は、一部を橋逸勢、或は彼地の人の手になつた部分も
 ある由であります。寫眞に出したのは、大師の書とされてゐ
 る部分であります。

三十帖策子

此中說以慈悲喜捨作阿毗遮增迦法微
 細金剛調心軌儀 第四說羯磨曼荼
 羅具三十七說八曼荼羅儀令弟子學字護
 摩儀軌於無量佛菩薩所成廣大供養
 速得悉地現前說廿五種護摩隨類所求法
 第五說四印曼荼羅具二十一成就諸藥法等
 已上曼荼羅中成就法於此曼荼羅中成就
 法於此曼荼羅像前求
 第六說一印曼荼羅具十七說引入弟子及
 先行法次為外金剛部眾說四種曼荼羅
 各說本真言言本印契嚴佛已為說效
 勅大曼荼羅具三十七說引入弟子儀
 說為弟子使役外金剛部軌則此中說大
 佛頂及光聚佛頂真言及契亦通一字頂
 輪法

風信帖

これは大師が僧最澄に宛てた手紙であります。帖首に「風信雲
 書云々」とあるので風信帖の名があります。手紙はもと五通あ
 つたのが、一通は秀次に献じ、一通は盜難に遭ひ、残りの三通
 が現存されてゐます。弘法大師の眞蹟中、最も有名なもの、字
 は方一寸大の行草體手紙でありますから、卒意の間に筆を取つ
 たもの、随つて縦横自在、好趣無限、大師行草の妙趣は、この
 帖に盡くと云つても過言ではありません。

灌頂肥

弘仁三年十一月十五日於高野山
 寺文金剛多灌頂人、磨名
 好家澄、信磨大板、和氣真
 空、大摩大九、和氣仲世、美深、後
 弘仁三年十二月十四日於高野山寺受
 胎藏灌頂人、磨名

◆瀧頂記
 之は弘仁三年十一月、高雄山で大師が瀧頂の儀を行はれた時、其時の受戒の人名を書かれたもので、不用意の間になされたものだけに、天真暢達、超妙とも稱す可きものであります。以上の外に

狸毛筆奉獻表、七祖僧談、崔子玉座右銘、金剛般若經開題、綜藝種智院式等々があります。

橋逸勢

前にもお話しした通り、三筆の一人、天性放膽で、枝葉末節に拘泥せぬ人で、その書も氣骨の優れた豪快なもので有名です。空海と共に入唐して有名な柳宗元に書を學び、その技、大いに上る——と云はれてゐます。文才の豊かな事も有名なもので、橋秀才とまで稱はれた人でもあります。歸朝後、病を得て閑居して居ましたが、後に但馬權守となり、晩年恒良親王を奉じて事をなさんとて露れて伊豆に流され、承和九年、遠江の板築で歿しました。

この人の書として残つてゐるものは、極めて少く、伊都内親王願文、興福寺南圓堂銅燈臺扉銘、王勃文集斷簡があります。

◆伊都内親王願文

後空海等と一緒に入唐し、延暦二十四年六月、歸朝して比叡山に延暦寺を開き、天臺宗の開祖となつた事は、人皆の知る通りであります。書は三筆と併び稱されて居り、清朗明徹、その人となりを感じさせるものがあります。現存してゐるものは、數通の消息と、學法目錄、天臺法華宗年分緣起、入唐牒などであります。

天臺法華宗年分緣起

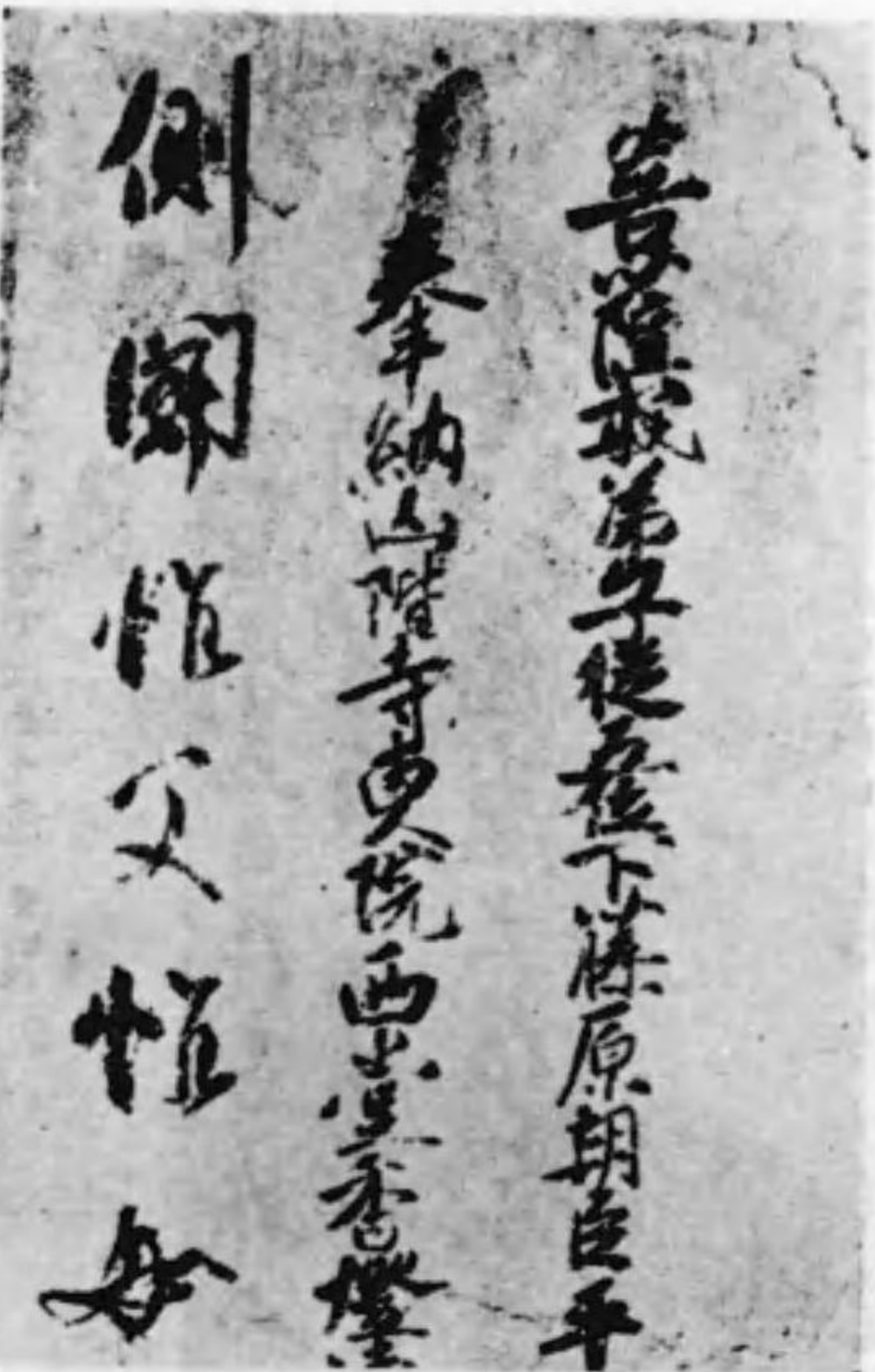
天台法華宗年分緣起

請續將絶諸宗更加法華宗主
 沙門寂澄言寂澄開一目之羅
 一雨之宗何足普及徒有諸宗
 傳業人誠願准十二律呂定年
 數法六波羅蜜分授業諸宗之
 曜之明宗別二人花嚴宗二
 華宗二人律宗二人三論宗三

◆天臺法華宗年分緣起

この書は、空海にも見られる傳教大師のいゝ處を見せてゐる書

これは桓武天皇第八王女伊都内親王が、御生母藤原平子の御遺言により、天長十年九月廿一日、山階寺東院西堂に香燈讀經料
 伊都内親王願文



として、墨田十六町餘、莊一處、島一町を寄進された時の願文で、卷中處々に内親王の御手形が捺されて居ります。行書で六十七行、筆力豪健、運筆自在を極め、眞に天下の絶品、遠く雲外に響ゆる感じを與へます。

傳教大師

俗姓は三浦氏、近江滋賀の人、十二歳の時に得度して僧となり、

と云へませう。即ち、暢達の筆で然も骨力を有し、清朗秋空を思はするものがあります。

尺牘

久隔清音馳志多
 安和且慰下情
 大阿闍梨所示五八詩
 一百廿神仏并方圓圖

◆尺牘

これは最澄が空海に與へた書狀で、弘仁四年十一月、弟子を以て空海にその著一百二十禮佛等の借覽を乞ひ、併せて所持の法花梵本一卷をお貸しやう、と云ふ意味を書いたもので、空海の風信帖と將に好一對のものであります。書體は行書、氣品の高いこと驚く可きものがあります。

神護寺鐘銘

愛當之山神護之寺
三寶既備六度無虧
唯所有梵鐘形小音
窄故禪林寺少僧都
真紹和尚始發弘願
有心改鑄銘乾未成
衣祴早化檀越少納
言從五位上和氣朝

藤原敏行

藤原敏行は、按察使藤原富土麿の子で、書をよくした許りではなく、和歌にも、有名であります。書は、おそらくは、空海以後の第一人者でありませう。之には、こんな逸話が残つてゐます。村上天皇が、小野道風に、我が朝に於ける古今の名手は誰か、と問はせられた時、道風は言下に「空海と敏行」とお答へ申上げた——と云ふ事であります。更に又、敏行の逸話としては、元慶の頃、渤海へ遣はされる勅書を敏行が書いたのですが、之が彼國人には大變な評判で、王義之にも勝ると激賞された、と云ふ事があります。たゞ残念なのは、敏行の書は、殆ど残つてゐない事で、たゞ僅かに神護寺の鐘銘が残つてゐるきりです。

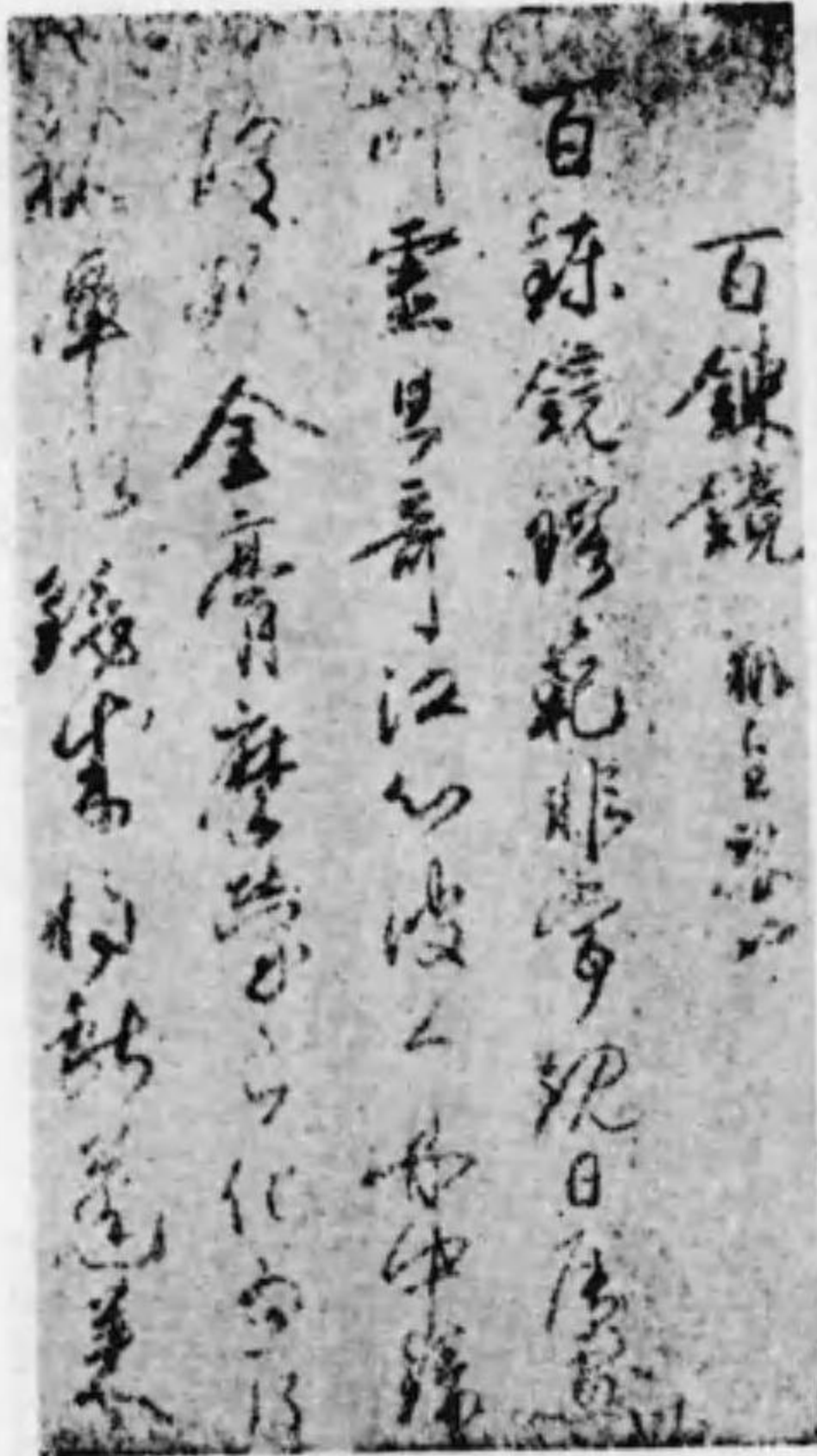
神護寺鐘銘

貞觀十七年、參護首原是善が銘文を作り、右小辨橋廣相が序文を作り、藤原敏行が之を書いたものであります。鐘は高さ四尺九寸二分、一行八字、三十二行、二百四十五字、字の大きさは、八、九分、楷書で莊重、古雅を極めたものであります。當時三絶の鐘と云はれたもの、現在では國寶になつてゐます。

菅原道眞

天神様として有名な菅原道眞の事は、皆様もよく御存じでありませう。小名を阿呼、參議是善の第三子、幼少の時から既に拔群の才智を現はし始め、十一歳の時には、有名な「梅花の詩」を賦して人々を嘆稱せしめたものであります。一文童生より身を起して、遂に右大臣從二位に昇進、寛平、昌泰の頃には左大臣藤原時平と共に天下の政治に參與したのであります。後、時平の讒に遭ひ、延喜元年、筑紫に流され、寓すること三年にして、二月二十五日、五十九歳で薨せられました。

百練鏡



書は尊圓法親王が「聖廟拔群なり」と云はれたやうに、和様をよくされ、遂に書道の神様とまで崇敬せられた——これも御承知の事でありませう。現在、百練鏡、金光明、最勝、玉經、等が傳へられてゐますが、道眞の書としての確證がない事が残念であります。

百練鏡

白樂天の詩集の断片で十三行あります。書風は非常に古雅、且つ氣韻の高いものであります。

紀貫之

藏人、紀望行の子、延喜中、木工權頭從四位に叙せられた人です。柿本人麿などと共に平安朝きつての歌人であり、人麿の後をうけて萬葉調を變じて、七五調の古今調としての和歌を作り上げた人です。醍醐天皇の延喜五年、勅を奉じて、躬恒、友則、忠岑等と共に、我國最初の勅選歌集「古今和歌集」を撰しました。貫之が、和歌ばかりでなく、書にも優れてゐた事は、「繪は巨勢の相寛、手は紀の貫之」と歌はれたのでも明らかで、特にその假名は高い氣品を有して古今随一と云はれてゐます。

天慶九年、六月六十三歳で卒しました。

貫之の書として傳へられてゐるものは、随分と澤山ありますが、何れも眞筆としての確證のない事は、大變残念であります。で、こ

では古來から貫之の筆として傳へられてゐるもの——即ち傳貫之について、お話しして行きます。

◆高野切(傳、紀貫之書)

これは「古今和歌」の古い寫本で、もと高野山に藏せられていたのでありますが、その後切斷されて諸家に藏せられるやうになりました。それで「高野切」の名があります。

序に云つておきますが、よく古筆には「何々切」と、「切」の字をつけたものがありますが、之はすべて、まともなものはなく、斷片の事を云ふのであります。

この高野切は、二十卷中、現在まで残つてゐる完全なものは、卷五(原氏藏)卷八(毛利侯藏)卷二十(山内侯藏)だけで、卷一、二、三、九、十八、十九の卷は、何れも諸家に散じ、それ以前のものはいくつもありません。

この高野切の筆者は紀貫之と傳へられてゐますが、よく研究してみますと、三人の筆者の手によつて書かれてゐる事が分ります。高野切を、筆蹟によつて分けて見ますと、次の三種になります。

第一種(卷一、九、二十の三卷)

この種のもは、かなりの長鋒を用ひて書かれたやうであります。即ち濃淡、肥瘦の變化に富み、特に大膽な端筆の使ひ方等は注目に値ひませう。筆意も亦、變化が多く、形態は豊麗を極め、連続は

最もその自然を得てゐます。この第一種と、同筆と目されてゐるものに、行成卿の曼珠院古今集、同じく和漢朗詠集、宗尊親王御書深窓秘抄等があります。

第一種

古今集卷第一

春歌上



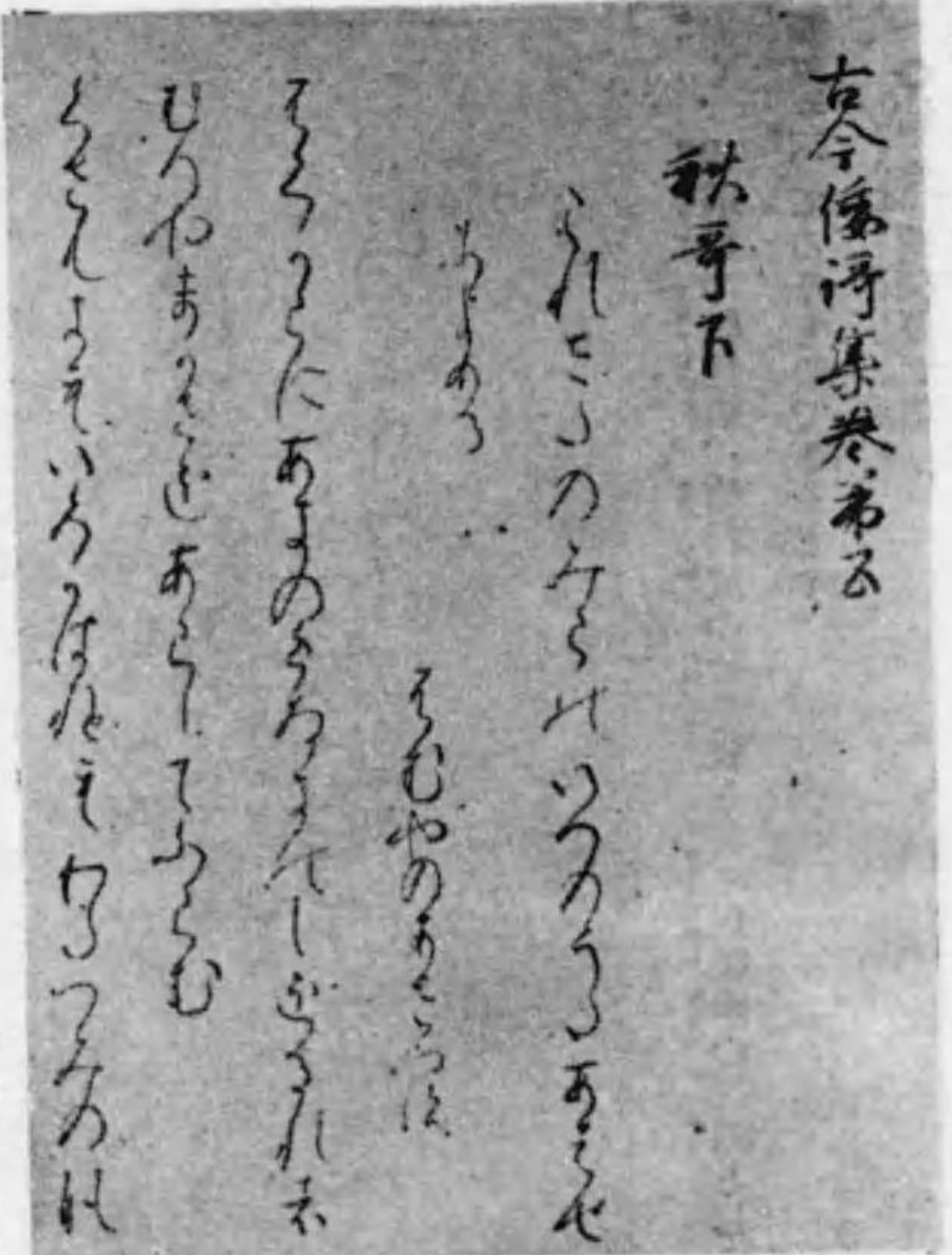
第二種(卷二、三、五、八の四卷)

これは前とは反對に短鋒で書かれたものやうであります。濃淡、肥瘦、墨濃等の變化の點は、前の第一種程豊富ではありませんがそれだけに、その線條は素朴で緊張し、豪宏、沈着の趣、古雅愛す可きものを含んで居ります。——と云つた書風を、普通には貫之風と稱して居ります。

第二種

古今集卷第一

秋歌下

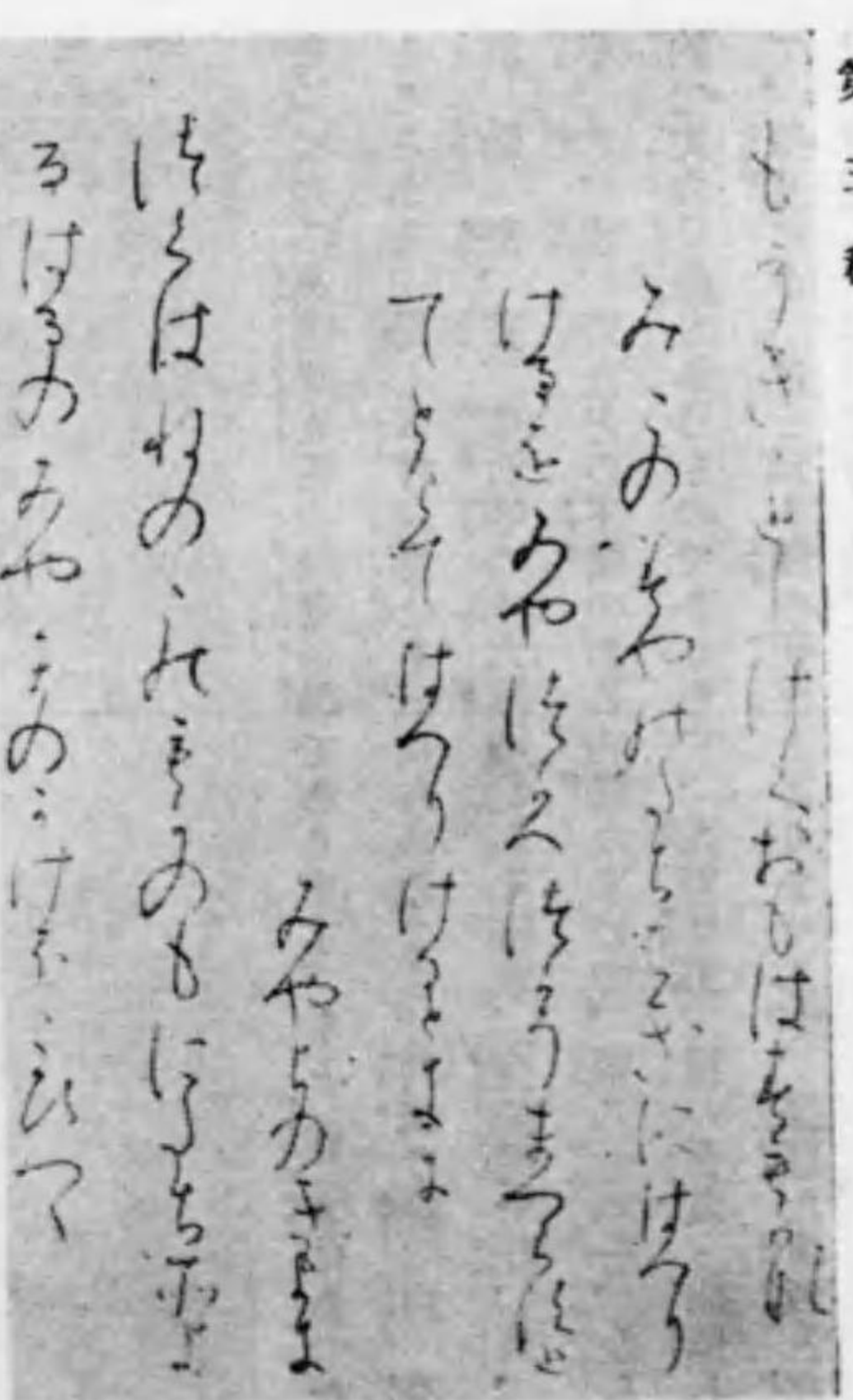


この第二種のもと同筆と目されてゐるものには、行成書の御物、和漢朗詠集卷子本、關戸氏藏の和漢朗詠集、源順書の桂宮萬葉集、宗尊親王の寛平歌合等があります。

第三種(卷十八、十九の二卷)

この種のもは、多少變化に乏しい憾みはありますが、形態は典麗端正で氣品高く、筆致は清楚且つ輕妙、特に連続は最も自然に行はれて、行を斷じても意連なる趣が紙面に滲透して居ります。これと同種のもは、行成卿の御物、和漢朗詠集帖子本、近衛家の和

第三種

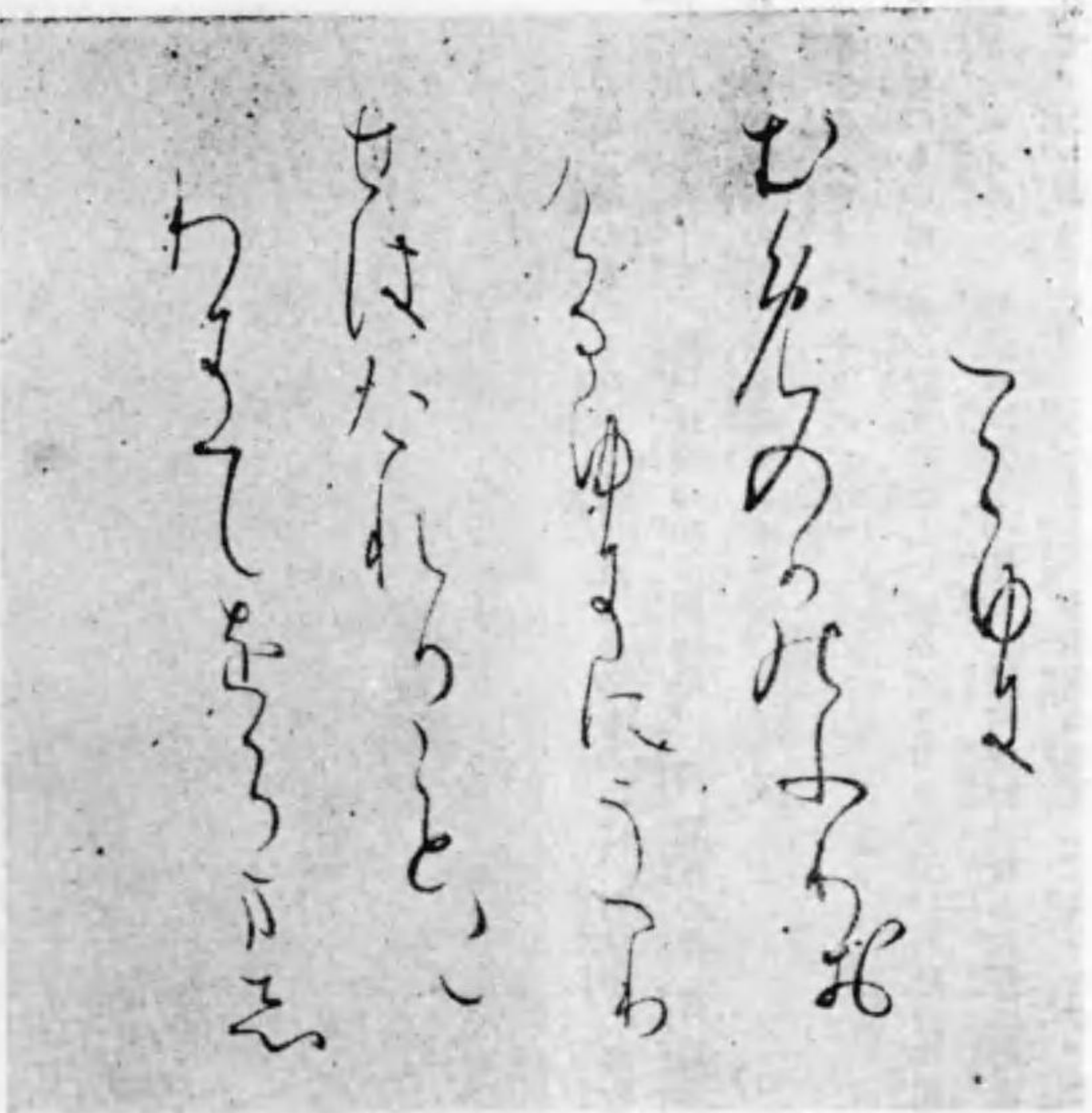


漢朗詠集、松浦家藏の五首一紙、伊豫切等は、先づ之と同筆と見られてゐるやうであります。

◆寸松庵色紙

織田家の家臣、佐久間將監眞勝が入道して後、京都紫野寸松庵に住して、之を愛玩してゐたためにこの名があると云ひます。この色紙はもと和泉の南宗寺に三十六枚あつたのを將監が請ふて入手したと云はれてゐます。縦四寸三分、横四寸二分位の大きな色紙形の白、茶、靑、藍等の唐紙に、草や虫の模様のある美しいもので、現存してゐるもの三十葉、諸家に散逸してゐます。書風は圓轉自在の筆になるもので、筆意に餘裕があり、自然に行はれた連続に變化が

寸松庵色紙

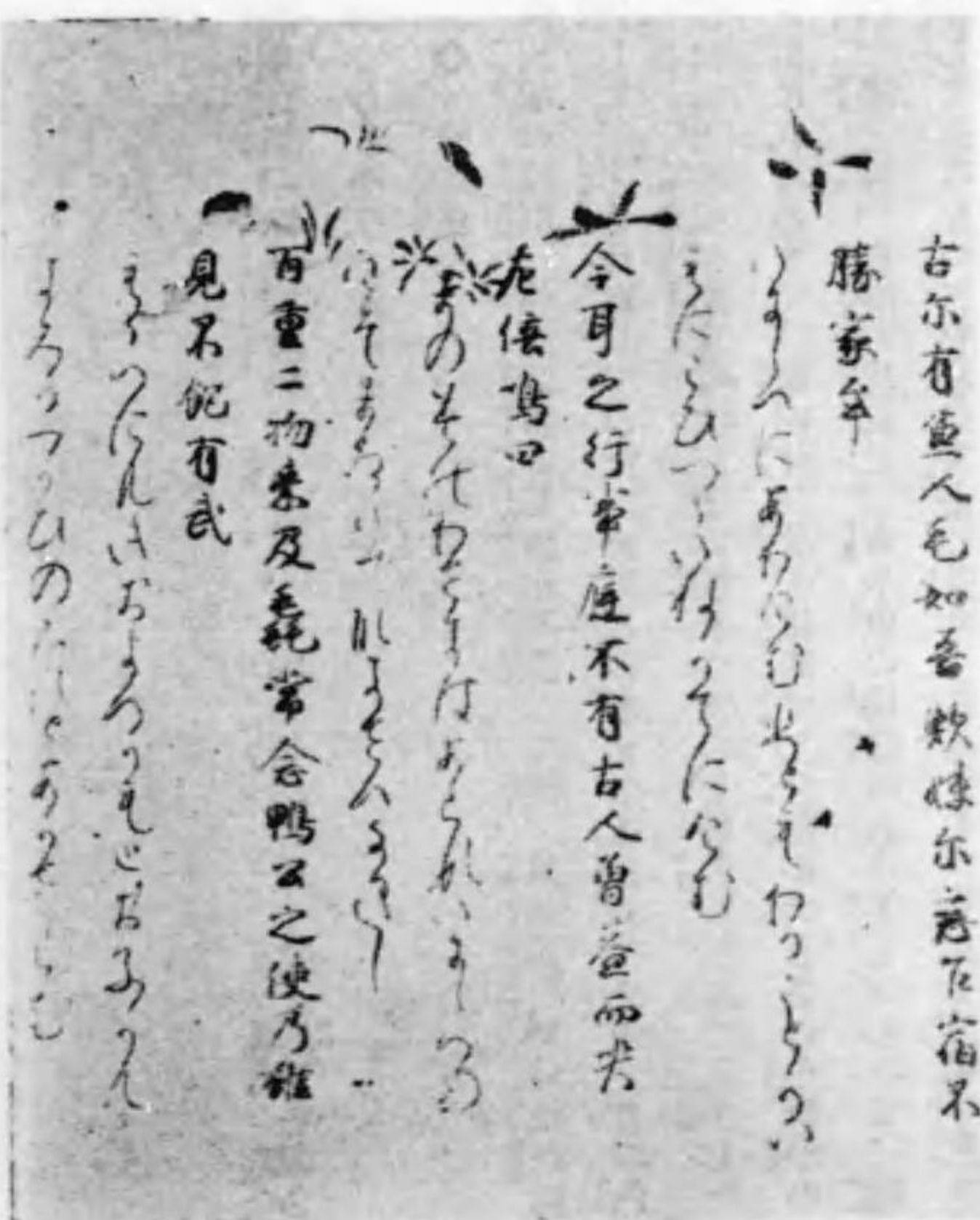


多く、傳道風の襷色紙、傳行成の竹色紙と共に色紙中の三絶として断然光つてゐるものであります。

◆桂宮 舊藏萬葉集切

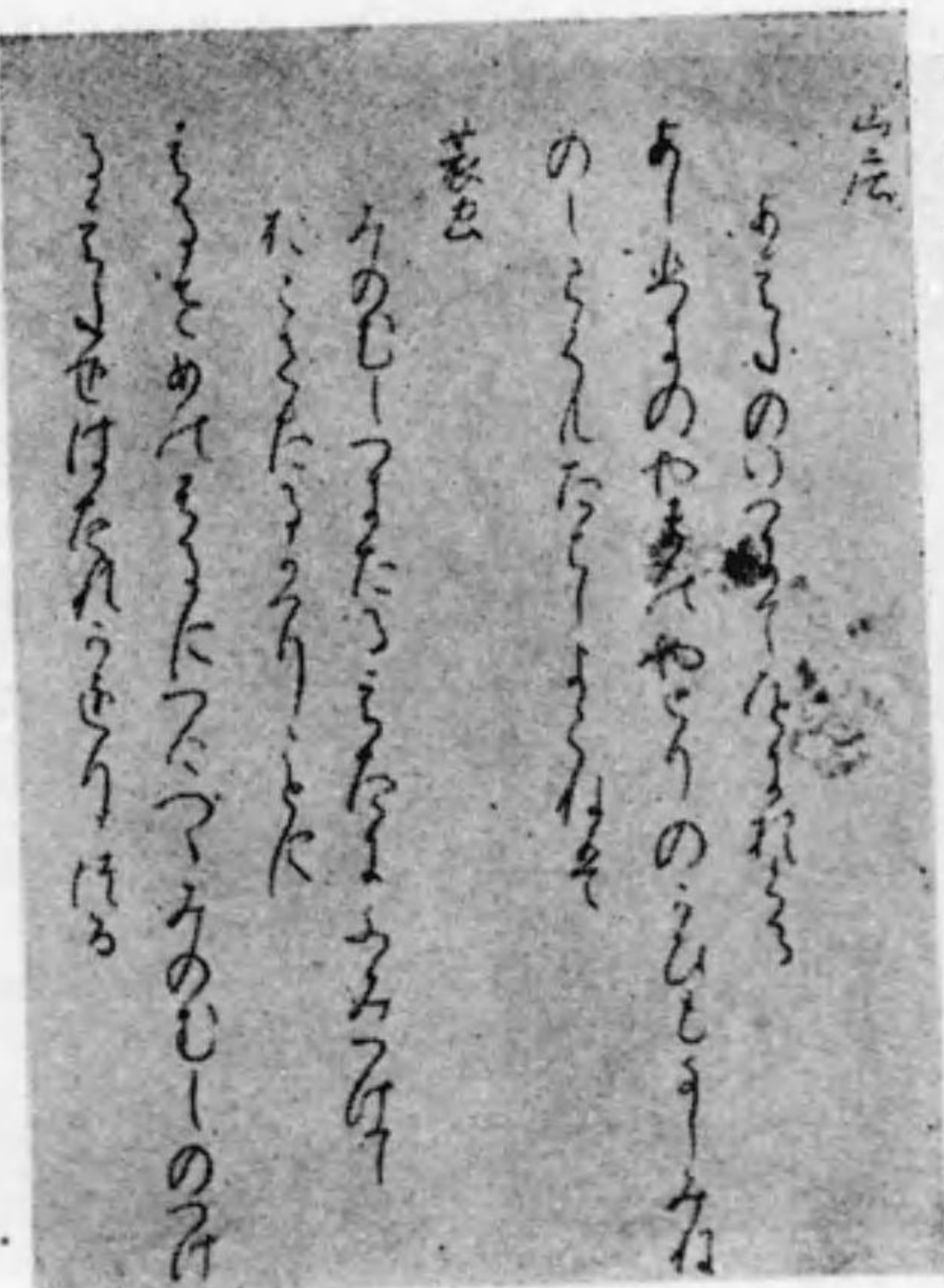
これは前田家から桂宮家へ献上されたもので、今は帝室御物と

桂宮舊藏萬葉集切



なつてゐる萬葉集卷四の殘卷一軸であります。もと桂宮にあつたところから、略して桂萬葉とも云はれてゐます。料紙は緑、白、淡紅、紫、藍、茶、藍黄等の十六葉の色紙を襷ぎ、金銀泥で花、鳥、草、木、水、岩などの下繪のある古雅なもので、幅八寸八分、全長約二丈六尺餘もあるものであります。高野切第二種の書風と酷似して、筆意には、之と云ふ程の變化もありませんが、謹嚴な筆致と高邁な氣品とは誠に敬服に値するものがあります。

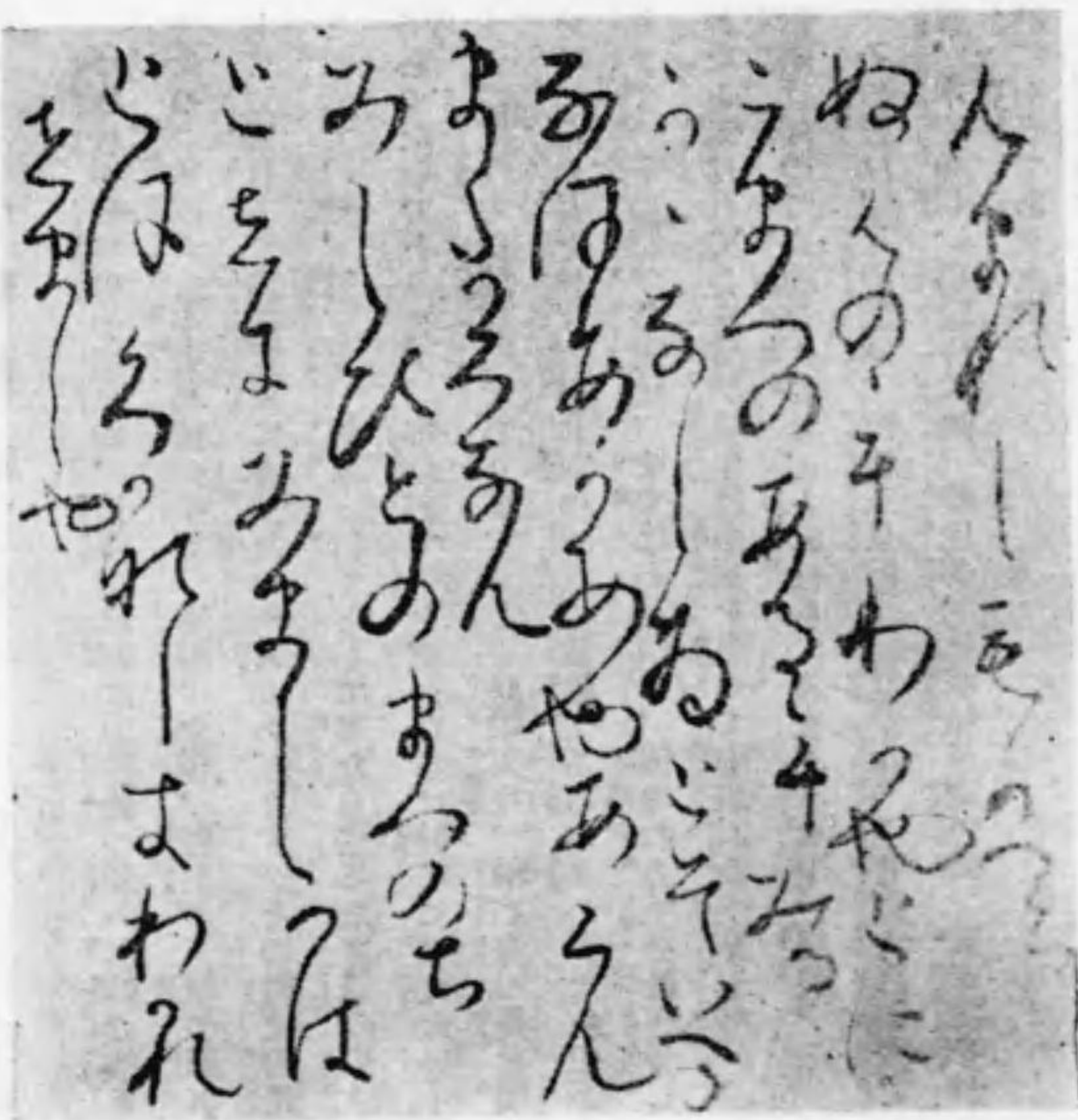
名家集切



◆名家集切
これは貫之と同時代の歌人兼輔、公忠、是則、元方、興風、深養父等の家集と分類して書いたものであります。高野切の第二種と筆致は似てゐますが、彼の男性的なのに對すると、これは著しく女性的で、品は高いものですが、線條が弱く、且つ細くなつてゐます。卷子本で断片となつて、諸家に藏されてゐます。名家集切が、各歌人の選集であるのに對して、貫之自家の歌集があります。自家集切と云つてゐます。古雅な書風で、萬葉假名が多く配されてゐます。

筆致は、前と同じであります。

土佐日記



◆土佐日記
これは委しく云へば、「藤原定家臨貫之自筆本土佐日記」と云ふ可きで、貫之が書いた土佐日記を、鎌倉時代の初期、文暦二年乙未五日に、藤原定家が臨書したものであります。自然、定家卿の書

玉泉帖



辨が加へられてゐますが、貫之の眞筆と云ふ確證が何一つ擧つてゐない今日、貫之の書風研究に與へられた貴い資料と云へませう。この素材な筆致は高野切の第二種に通ふ處が見られます。

小野道風

小學校の教科書や唱歌で、皆様には既にお馴染の深い名前でありませう。大宰大貳小野葛弦の子で、醍醐、朱雀、村上の三朝に歴事して正四位下、内藏權頭にまでなつた人であります。その書は野蹟と云つて、楷、行、草、假名、行くとして可ならざるなき書の天才であつたのであります。奉勅して筆を執つた事は計るに勝えない一とは、自らの述懐であります。よく嵯峨天皇、僧空海の後を繼いで、その長を伸ばし、和様の大成に貢獻する事が多かつたのであります。その行、草書は、支那にわたつて、彼地の名手を驚嘆せしめたと云はれてゐます。晩年は中風を患つて手がふるへましたが、筆勢は却つて奇趣を生じた、と云はれてゐます。七十一歳歿。

その書は、尺牘數通、御物玉泉帖、屏風土代、智證大師賜號勅書、本能寺切、道澄寺鐘銘、綾地切、秋萩帖、織色紙、靈岸帖等が特に有名であります。

◇玉泉帖
これは有名な白樂天の詩を書いたもので、最初に「玉泉云々」の

文字があるところから、この名がつけられたのであります。この書はその巻尾に「是を以つて爽貶を爲す可からず、例體にあらざるのみ」と書いてある通り、楷、行、草書を打ちませ、大小を隨處に變化させ、誠に天馬空を行く程の痛快豪放なものであります。

屏風土代



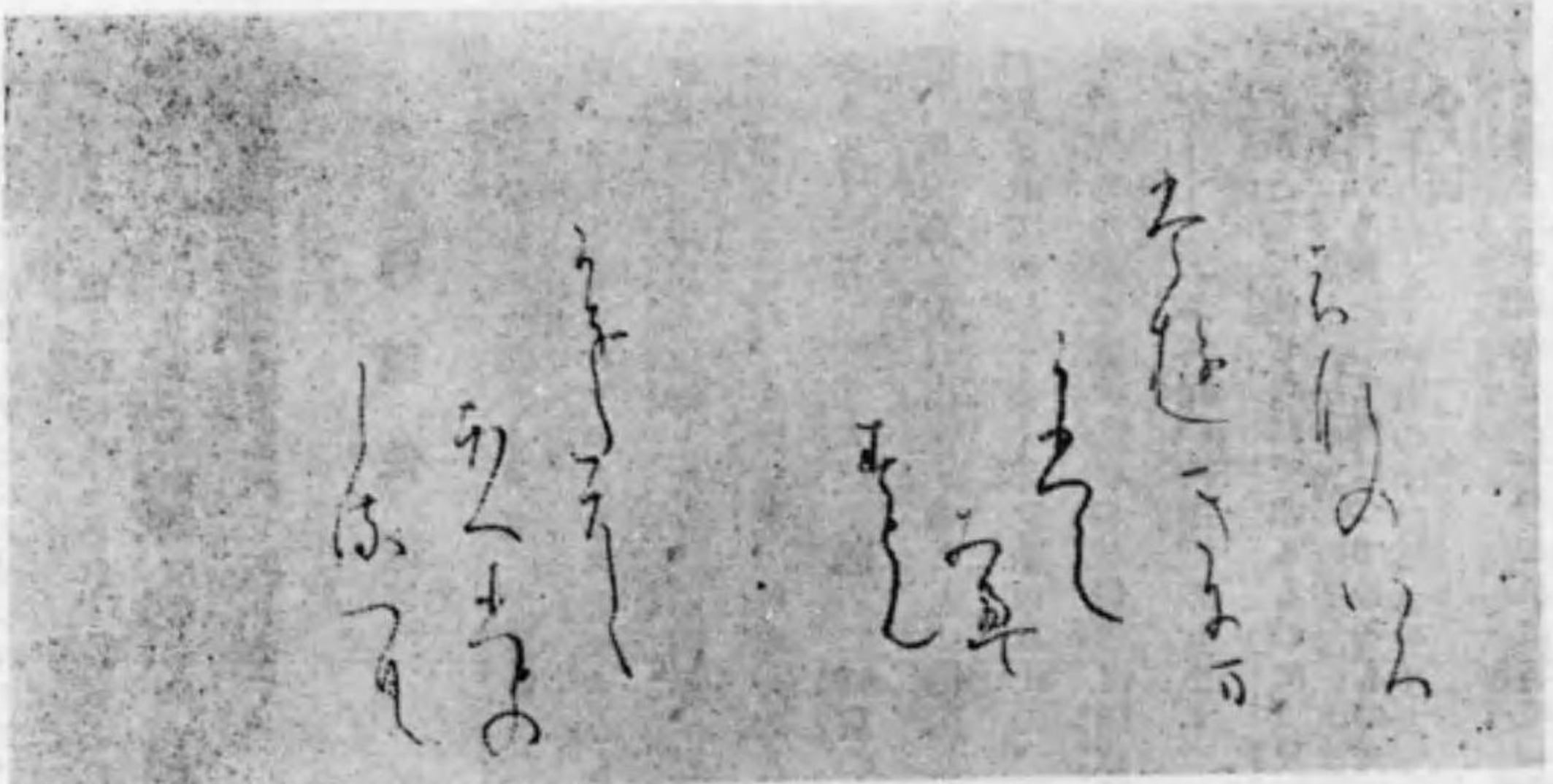
◇屏風土代

土代と云ふのは、草稿のことであり、延長六年十一月(三十五歳)道風が勅命によつて屏風に揮毫した時の下書であります。書は豊潤古雅な筆致で、その間に、和様體の萌芽を認めることが出来ます。書體は行、草、現在は帝室御物となつてゐます。

◇織色紙

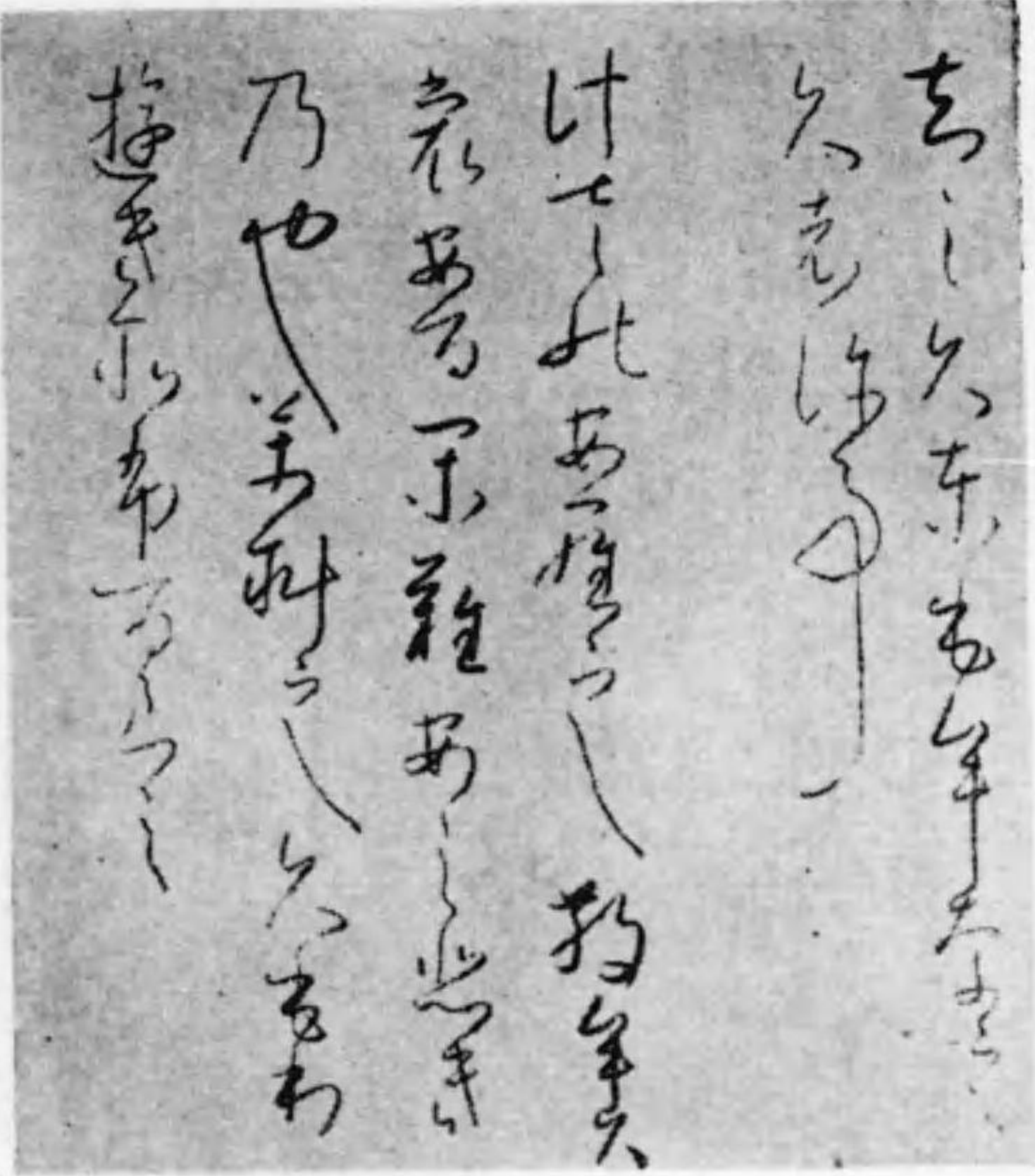
これは色紙型の料紙を二枚宛織いであるために、この名が生れた

織色紙



のであります。之は大聖寺前田家にあつたもの、今は諸家に散在して、歌數三十餘首はありませう。傳貫之筆寸松庵色紙、傳行成筆升色紙と共に三色紙の一であり、行成筆の關戸本古今集と共に古筆中の王座を占めて居ります。書風は古淡老蒼、連綿と云ひ、布置と云ひ、將に仙境のものゝ感あらしめます。道風筆の確證はありませんが、朝臣が晩年の病間消息に現はれてゐる老淡古雅な書風と相通する處の多いのも、なか

なか面白く事と思ひます。
秋萩帖



◇秋萩帖
これは、實は帖ではなくて巻物であります。
巻首に「安幾波起云々」の言葉があるところから、この名が生れたのであります。四十八首の和歌が、全部萬葉假名で書いてあります。之は同一形態の文字の多いこと、又説説がある等の點から、古

來、集字ではないかと云ふ説もありますし、臨書ではないかの説もあります。然し何はともあれ、悠揚として迫らぬ書品は、誠にすて難いものがあります。料紙は最初の一葉を除く他は、淮南子(兵書)の反古紙の裏面に書かれてあります。

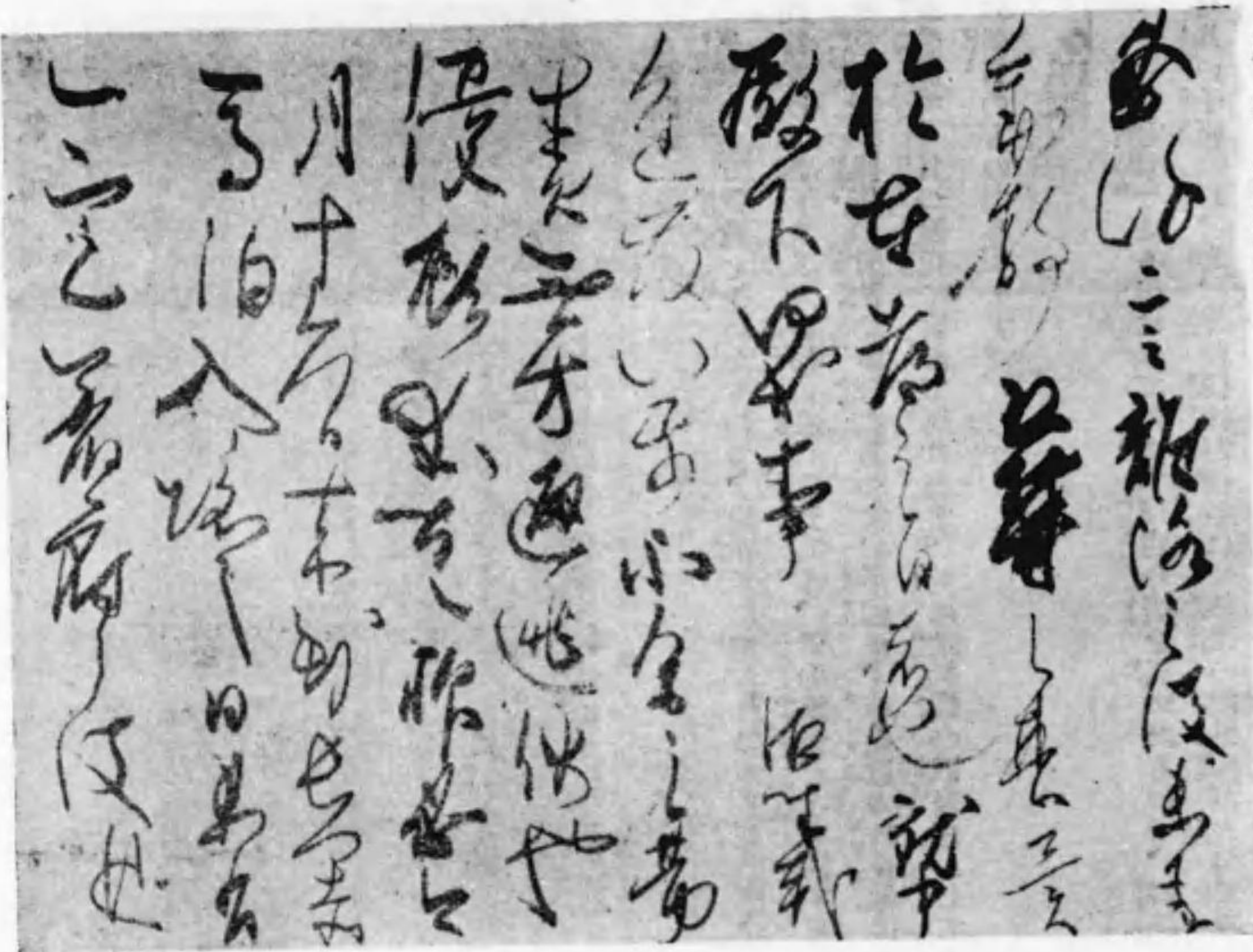
藤原佐理

藤原佐理(九四四—九九八)攝政太政大臣實頼の孫、名の讀み方は、サリともスケタカともスケマサとも云はれてゐます。長徳の頃に正三位參議兵衛卿となり、同四年、五十五歳で歿した人。その書は佐蹟と云はれ、小野道風、藤原行成と共に世に三蹟として有名であります。嘗て太宰大貳を罷めて歸京の途中、伊豫の海岸に泊つた際、風浪高く數日出帆することが出来なかつた一夜、夢に三島明神が顯はれて社榜を書く事を請はれたので、翌日早速齋戒謹書した處が、忽ちの間に風浪静まつて無事に歸京、ために俄かに書名が高まつた——と云ふ傳説の持主であります。

眞蹟として信ぜられてゐるものに、尺牘と詩懷紙とがあり、その他は何れも書として傳はつてゐるものだけであります。

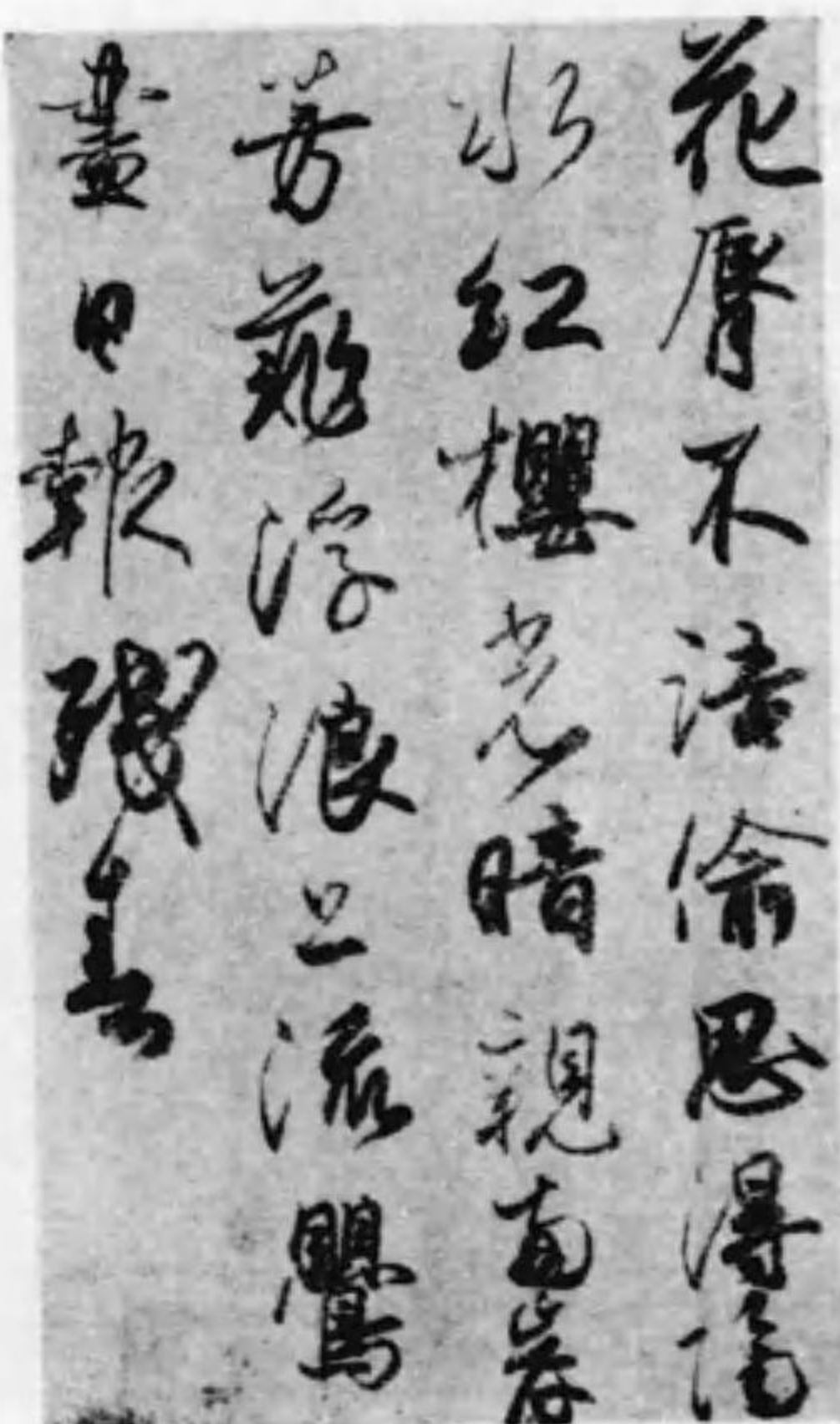
◇尺牘
尺牘とは手紙のことで、これは特に「赤馬帖」又は「離落帖」とも云はれてゐるものであります。

尺牘(離落帖)



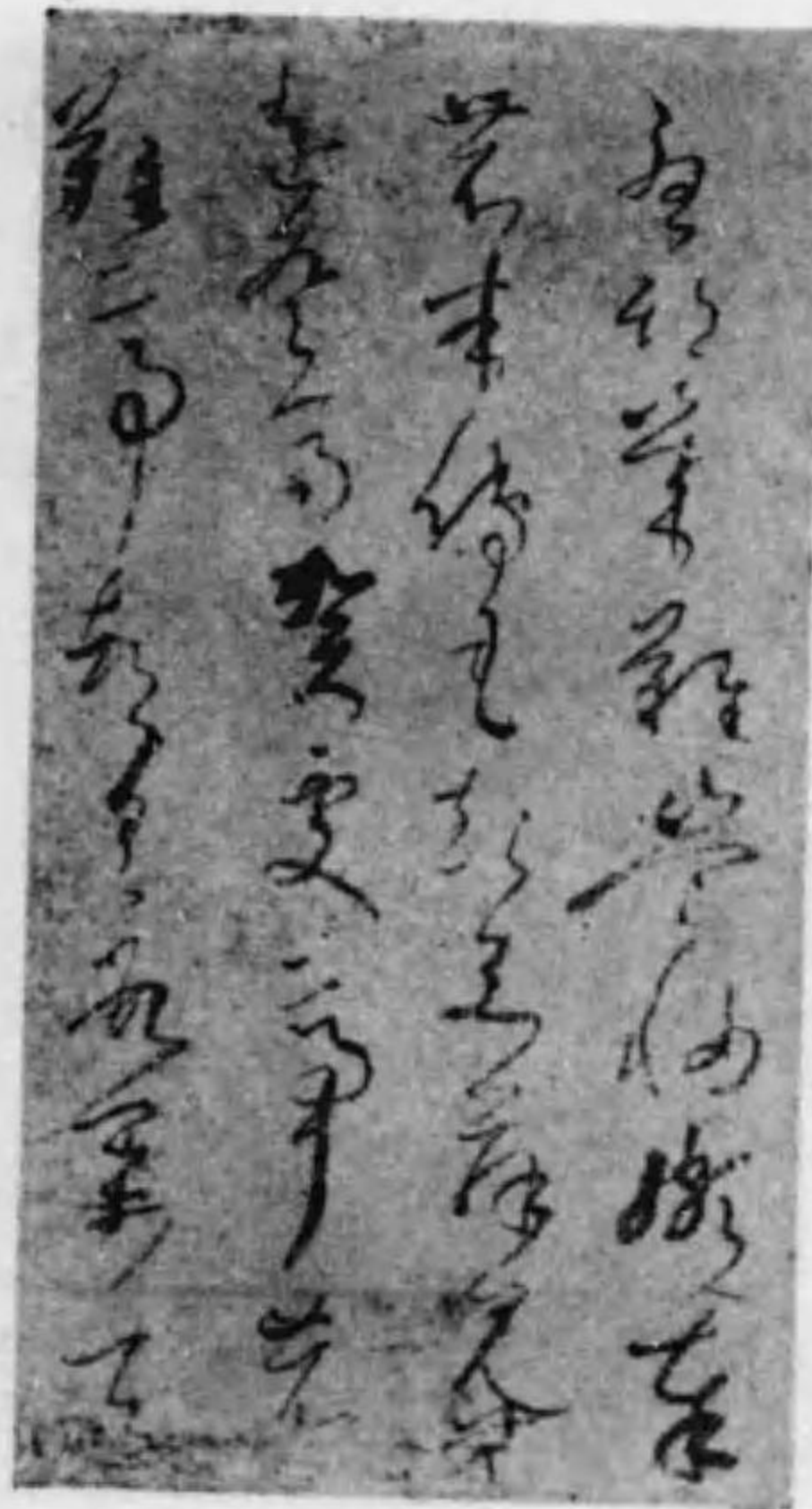
これは佐理が四十八歳の時、太宰大貳となつて筑紫に赴任の途中、赤馬關からその甥に宛て、送つたもので、行筆變轉自在を極め、且つ暢達雄勁——三蹟の面目躍如たるものがあります。

詩懷紙



◇詩懷紙
これは佐理が、近衛權少將であつた青年の頃——二十餘歳——のものとして云はれてゐます。線畫は極めて軟かいものながら、風骨の備はつた且つ氣韻の高いもので、青年の書としては驚く可き熟達した書であります。この書式は歌懷紙の根源となつてゐる最古の資料であります。

賀歌切



賀歌切

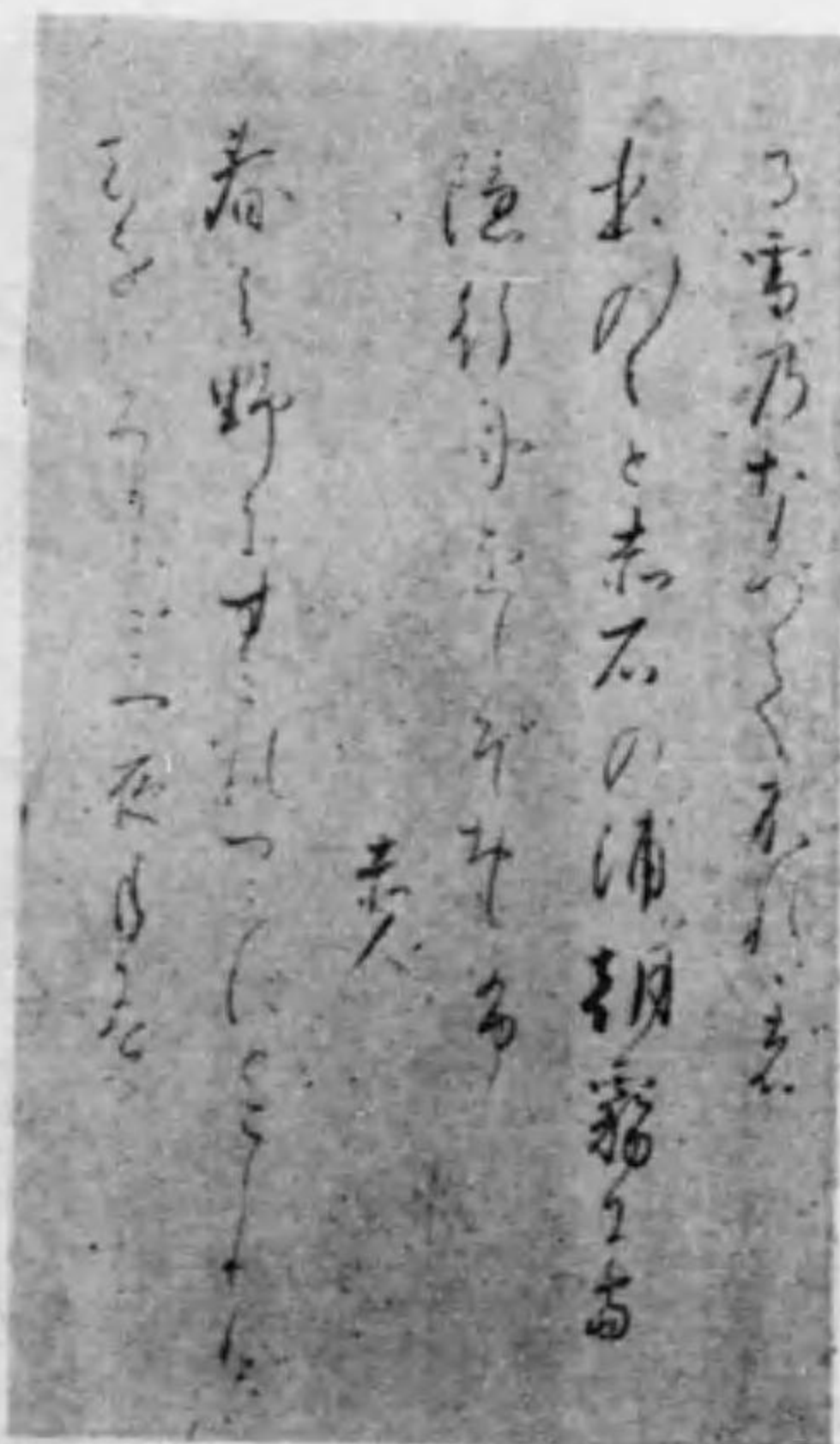
萬葉假名で賀歌を書いたもので、現在世に知られてゐるものは、四首だけであります。變轉自在、老蒼古雅、骨力雄健、とも稱す可き逸品で、漢字の骨法が多分にあつて、形體は、傳道風の秋萩帖に幾分似て、且つ變化に富んで居ります。共に連續體の歌書きとしては最古のものであります。

筋切

一名「通切」とも云はれてゐます。古今集を書いたもので、料紙は鳥の子紙に草、鳥、蝶の模様が描かれて銀泥の綴罫線が入つてゐるので、この名があります。書風は暢達、清麗、相變らず變轉自在

の妙を極めたものであります。

たゞ、これを佐理の書とするには異説がないでもありません。



綾地切

白氏文集を草書で書いた断片で、料紙は銀泥花鳥の下位がある綾地です。傳道風の綾地切とよく似てゐるので、同一人ではないかと思はれてゐます。

その他、佐理晩年の作と云はれる「絹地切」と呼ぶ、矢張り白氏文集を草書に書いたものもありますが、佐理だと云ふ確證はありません。併し佐理はその暢達さに於て道風より一歩進めたと云はれて居ります。以下、次の巻に譲ります。

科外講話

文字の發生

中村春堂

さて、これから文字の發生についてお話を致しませう。云ふまでもなく、現在の私達は、文字を如何に美しく、立派に書くか——について練習してゐるのであります。随つて、書く對照になるところの文字に就いても、一通りは心得てゐる可きであります。私達が現に習つてゐる文字は、漢字の外に假名があります。が先づ順序として、漢字からお話を進めて参りませう。

漢字の發生以前

傳説によりますと、漢字は支那の黄帝によつて作られた、と云はれてゐます。黄帝の時代は、今から約四千五百年の昔でありますから、文字も、従つて四千五百年の昔に作られた、と云ふ事になります。

文字の發生

では、文字が作られる以前には、人類はどうしてその用を足してゐたか——話が少し脇道へそれるやうですが、話をこゝから進めて参りませう。

何千年、或は何万年かの昔、人類發生當初の頃には、人類の生活も、野獸等とさう變らない位に原始的なもので、文字は勿論、言語らしいものすらなかつたであります。そしてその時代の人類は、單なる叫び聲で、各自の意志を表示してゐた事でありませう。

處が、人類の生活も追々と人間らしくなるにつれて、言語が生れた。そして又、何千年か経つた——人々の生活は更に高くなり、共同生活が始まるやうになり、智識が進んで来ると、今度は、言語だけでは間に合はなくなつて参ります。第一、言語だけでは、遠くにいる人に、自分の意向を通じる事が出来ませんし、第二に、物

を記録しておく事が出来ません。こゝで、人類は様々な方法を發明して居ります。これは、單に支那だけでなく、どの民族も、似たりよつたりの過程を経て來て居るのであります。

その様々の方法について云ひますと、先づ繪に、文字の代りをさせる方法があります。之は最も原始的な方法であります。今でもわが東北の南部には、「繪曆」と云ふのがあつて、文字の讀めぬ人の



(アメリカ土人が獸皮に鳥形文字を書いてゐる)

ために、繪によつて、一年中の行事を知らせるやうになつてゐるものがあるさうであります。

それから、貝帶と云ふのがあります。これは、様々の色の貝を集めて帯にしたものであります。これは色によつて、ある意味を表はす方法であります。例へば、暗黒色は不快、黒色或は董色は危険白色は幸福、好意、平和、赤色は戦争を意味すると云つた具合であります。

(上・下とも結繩文字の一種)



又、結繩と云つて、繩を様々に結んで、ある意味を現はす方法もあります。これは結びめの色々の形状態によつて、意味を

ながら、その詳細な方法は不明であります。

漢字の發生

漢字の發明者である漢民族は、西曆二千年前——即ち今から約五千年程昔に、西方から黄河附近に移住して來たのであります。次に他民族を壓して、獨特の文化を築き上げたのであります。

この漢民族は、族群生活を營んでゐたのであります。勿論、他民族と同じやうに、文字を持たず、言語と記憶で用を足して來たのであり、「結繩シテ治」めたのも、この民族であります。そして結繩で間に合はなくなると、こゝに文字——言語を記述する——と云ふ素晴らしい方法が發明されたのであります。

この邊の事を、支那の文獻について見ますと、「説文解字」と云ふ書物には、次のやうに出でゐます。

「古伏羲氏の天下に王たるや、仰いで則象を天に觀、俯しては則法を地に觀て、鳥獸の文と地の宜きとを視て近くは諸を身に取、遠くは諸を物に取り、是に於て始めて易の八卦を作り意象を垂る。神農氏に及び繩を結びて治をなし、其の事を統ぶ。庶業極めて繁く、飾僞萌生す。黃帝の史蒼頡は鳥獸の蹄跡を見て分理の相別異すべきを知り始めて書契を造る。百士以て入り、萬品以て察す。蓋し諸を夫に取る。夫王庭に揚ぐ、文は教を宣べ化は王

者の朝庭に明にす。君子以て祿を施し、下に及ぼす。徳に居れば則忌むを言ふなり、蒼頡の初めて書を作るや、蓋し類に依り形に象る。故に之を文と謂ふ。其の後、形聲相益す。即ち之を「字」といふ。文は物象の本にして字は亂してやうやく多きを言ふなり竹帛に著はす、之を書と云ふ」

以上の説によりますと、黃帝以前、年數不明の伏羲氏が、仰いで天文を觀、俯して地理を察して乾坤を圖畫した、これが易の八卦事を云ふので、文字ではありませんでした。伏羲氏に次いで帝となつたのが、次に現れて來る神農氏であります。その頃は、人々が繁殖して漁獵だけでは生活が困難になつて來たと云ふので、神農氏は耕具を造つて民に農業を教へ、その食を足らしめた——と云ふ人でもあります。その他、交易や醫藥等を教へたのも、この人でありますが、この人の時代に、結繩と云ふ言葉が現れてゐます。この時代には、隨つて、まだ文字はなかつたのでありませう。

その次が黃帝——約四千五六百年前——であります。黃帝は、北支那に漢民族を發展せしめて、その基礎を堅めた最初の統一者であり、北支那はその統治の下に、高度の文化に達した——と云はれてゐます。

この黃帝の時代に「蒼頡が書を作つた。天は粟を雨せ、鬼は夜哭

した」と云ふので、昔から文字は蒼頡が作ったものとされてゐるのであります。

この蒼頡とはどんな人であるかと云ひますと、彼に就いては、様々の傳説があるのであります。一説には、蒼と云ふ人は、前にお話した伏羲氏の以前に帝位に在つた人で始めて文字を作つたのであると云はれてゐるかと思ひますと、一説には、黄帝の時代の史官で、帝命を受けて文字を作り、天下の義理は必らず文字に歸せしめ、天下の文字は必らず六書——後述——に歸せしめた、とも云はれてゐるかと思ふと、別説には、黄帝の史官、沮誦蒼頡が鳥の迹を見て始めて文字を考へ出した、それで、後世には文字の事を「鳥の迹」と云ふやうになつた、と云はれてゐます。

かと思ふと、又一説には、蒼帝は史皇氏で其名を頡と云つた、頡は龍のやうな顔で、大きな口で、四つの眼があつて靈光かゞやき、容徳あつて生れながら書を能くし、河圖洛字を受くるに及んで、天地の變を窮め、仰いで奎星圓曲の姿を、俯して龜腹鳥羽山川を察して文字を創製した。そこで天は粟を雨せ、鬼は夜哭し、龍は潛み藏れてしまつた。蒼帝は陽歩に都してゐたが御代は百十一歳を終つた——と云ふのであります。この話は、明らかに傳説でありませう。龍顔四目の人等は、且つ最も支那的であると云へませう。蒼頡が文字を發明又は完成したときに、早くも人類發展の目ざましい將來が

豫見されたので、天も鬼も小精、水鬼などの一切の精靈——が哭し、龍が藏れたのは譯が解りますが、天が粟を雨せた——と云ふ段になると、天意茫茫、さすが、こちつけ上手の支那の學者も解釋がつかないやうであります。

餘説はさておき、此等の様々の傳説を通じて考へてみますと、黄帝以前に、既に文字の萌芽とも見なす可きものはあつたのでありませう。例へば、繪像とか符號とか云つたものがあり、これが、地方、種屬によつて發生してゐたのを、黄帝の統一が成功し、同時に諸般の文化を進展させる施設の中に、文字の蒐集、整理、増補等と云つた事が行はれたのでありませう。そしてこの事業に参加したのが蒼頡と云ふ人物であつた——かう見るのが、最も穩當でありませう。

漢字の造字法——六書

漢字は、云ふまでもなく、人が作つたものであります。さうである以上、そこに何等かの據り處がなければなりません。この據り處と云ふのは、最初から勿論、はつきりと系統立つてゐたものではありませんが、漢字が可成りに發達して、使用も廣くなつてから、學者達が文字に就いて研究して、六箇の法則を發見した——と云ふ方が、本當でありませう。この六つの方法を六書と云つてゐます。

漢字の造字法と云ふのは次の通りであります。

- 1、象形
- 2、指事
- 3、形聲
- 4、會意
- 5、轉註
- 6、假借

以下順次にお話して見ませう。

先づ、第一の象形であります。之は許慎と云ふ人の「説文」と云ふ書物によりますと、次のやうに云つて居ります。即ち——「象形とは、其物を盡き成し、體に隨つて註出す、日月是なり」要するに、物の形にかたどつて作られた文字であります。次に例を擧げて説明してみませう。總て現在の漢字の起源となつて居るものです。



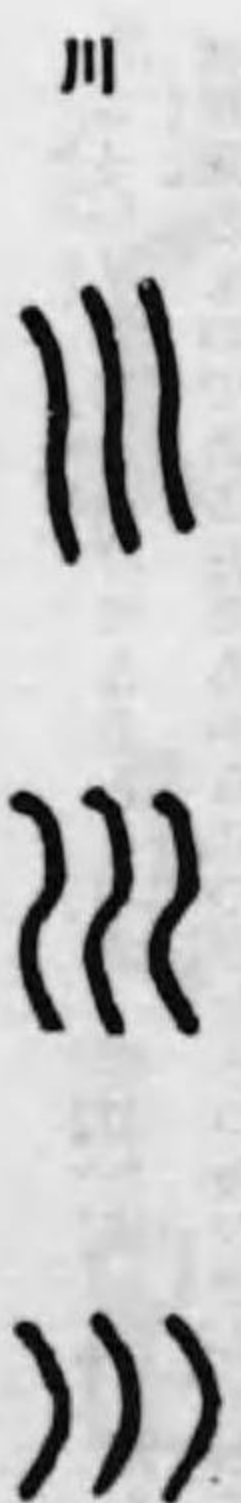
「日」圓滿缺くる處なき太陽の形をとつたものであります。



「月」太陽と違つて、お月様は缺けるところがあるので、その特徴をとつて、前の「日」と區別したのであります。



「山」敢えて説明には及びませぬ。正真正銘の山の形であります。



「川」水の流れてゐる様をそのまま寫して來たもの、如何にも川であります。



「水」前の川と區別するために、わざわざ波の立つてゐるところをとつて「水」としたものであります。



「木」これも云ふまでもあります。下の左右の斜畫は、根を

表はしたものであります。

艸 

「艸」これは「草」の古字。草の生ひ繁つてゐる様を現はしたものである。

竹 

「竹」前とよく似てゐますが、これは葉が下を向いて居ります。

禾 

「禾」これは稲や麥などのやうな禾本科植物の穂を垂れてゐる形であります。先の黒いのが穂を現し、次に兩側に出てゐるのが葉、下の兩側に出てゐるのが、その根を現はしてゐます。

人 

「人」これは、人を側面から見た處であります。前に出てゐるのは、手を垂れてゐる有様。「大」は人を正面から見た形ですが、「大」と云ふ意味に用ひられるやうになつたので、「ひと」の場合には側面の形を使ふやうになつたのであります。

子 

「子」これは子供の形で、足が一本であるのは「襁衣」で包まれてゐる處を現はしたものであります。

女 

「女」人が膝を曲げてゐるところで、從順な様を示したもので。女は從順なものであるところからこの形をとつたのであります。

目 


「目」云ふまでもなく目の形をそのまま取つて字としたものである事はお分りです。

口 


「口」之も御覽の通り間違ひなく口の形であります。

鼻 

「鼻」鼻の古字で「自」であります。自分の鼻を指して、私がなどと云ふ處から、自分と云ふ意味になつてしまつたのであります。

耳 

「耳」これは、耳の形を現はしたもので。

心 

「心」心臓の形を示したもので、西洋に於ける心臓(心)と同じものであります。昔は心臓に心があると考へられてゐました。

手 

「手」手の形。

足 

「足」足の形。上の長いのが、點になり、四角になつて下部は指先が上に向くやうに變化して來てゐます。

田 

「田」田の形。昔の田も、ちゃんと御覽のやうに整頓されてゐました。

井 

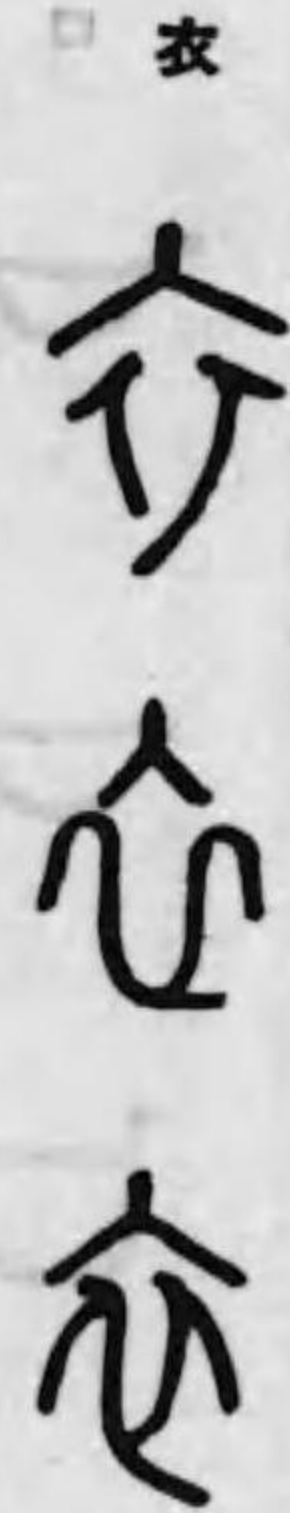
「井」井戸を上方から見た形であります。中央に點のあるのは、釣瓶を示したものです。



「家」家の形、上方は屋根であります。家は豚の古字であります。支那では家の中で豚を飼つてゐるところから、「ム」の下に家を入れて「家」の字が出来上がったわけであります。



「門」門の形、兩方に柱を立て、中に戸があるわけであります。この片方をとつたのが、「戸」であります。



「衣」上部にあるのが、人の首を示したものです。襟を合せた形であ

ります。



「舟」舟の形——側面をそのままとつたもの。



「車」横に引いた「一」は軸、中央部が輿、左右が車輪であるわけです。それが遂に縦になつて用ひられるやうになりました。



「刀」刀の形をそのままとつたもの。



「戈」これも戈の形をそのままとりました。



「弓」これも弓の形。



「矢」矢の形。



「牛」これは牛の角と「えりくび」を現はしたものです。特にその角を大きくしたのは特徴があります。



「羊」最初の字は全形。下の二つは、その角をかたどつたもの。見るから羊の角のやうではありませんか。



「豕」豚の古字。豚の形をそのままとつたもので、大變肥えて居ります。



「犬」犬の形。大變瘦せて居ります。



「馬」馬の形。



「象」象の形。



「虫」長虫の形をとつて虫を代表させてあります。



「龜」龜の形。上の二つは上から見た形であり、下は側面から見たところ。下の左方へ出てゐるのが手足。右にあるのが甲、なかなか要領がよいではありませんか。



「隹」これは尾の短い鳥の形をとつたものであります。



「鳥」これは尾の長い鳥の形をとつたもの。



「魚」始めは横に書いたものですが、それが終りには縦になつてゐます。



「聿」筆の古字。筆を手を持つてゐる形。中央の縦畫が筆で、指は三本に省略して要領のいい處を示してゐます。

以下造字法については、次巻でお話する事に致しませう。

春堂書道講座 第四卷 奥附

昭和十一年九月廿五日印刷
昭和十一年十月一日發行

不許複製

發行所

書者 東京市牛込區市谷町三丁目二十番地 中村 春堂

編輯者 東京市豊町區富士見町三丁目三番地 柴山 格太郎

印刷所及
東京市小石川區全蔵町十五番地 日本書道學院印刷部 樋口 治郎

東京市小石川區豊町二十四番地 日本書道學院印刷部 (オフセット) 小 森 章

東京市小石川區戸崎町八十八番地 日本書道學院製本部 岩崎 守男

製本所及
東京市豊町區富士見町三丁目三番地 日本書道學院 榎井口座東京八三一八八番

紙用習練案新

じ同に上の罫の側右に次、ひ習てに墨を上、の字文赤の側左づ先
すまし賣發で部理代は紙用のみの線罫、尙、いま下てつ習で合鈞

A rectangular grid for handwriting practice, divided into two columns by a central vertical line. Each column contains three vertical lines. The left column contains the cursive characters 'い', 'は', and 'ち' written vertically. The right column contains the cursive characters 'き', 'く', and 'た' written vertically.

The reverse page of the notebook, showing a very faint, ghosted version of the handwriting practice grid and characters from the left page. A central rectangular box is visible, containing some illegible text and a small diagram or stamp.

紙用習練案新

じ同に上の罫の側右に次、ひ習てに墨を上、の字文赤の側左づ先
すまし資發で部理代は紙用のみの線罫、尙、いさ下てつ習で合鈞

九月二十日

紙用習練案新

じ同に上の罫の側右に次、ひ習てに墨を上、の字文赤の側左づ先
すまし資發で部理代は紙用のみの線罫、尙、いさ下てつ習で合鈞

あはれ

あはれ

紙用習練案新

じ同に上の罫の側右に次、ひ習てに墨を上を字文赤の側左づ先
すまし寶發で部理代は紙用のみの線罫、尚、いさ下てつ習で合約

右
い
あ
ら

ま
ら
い

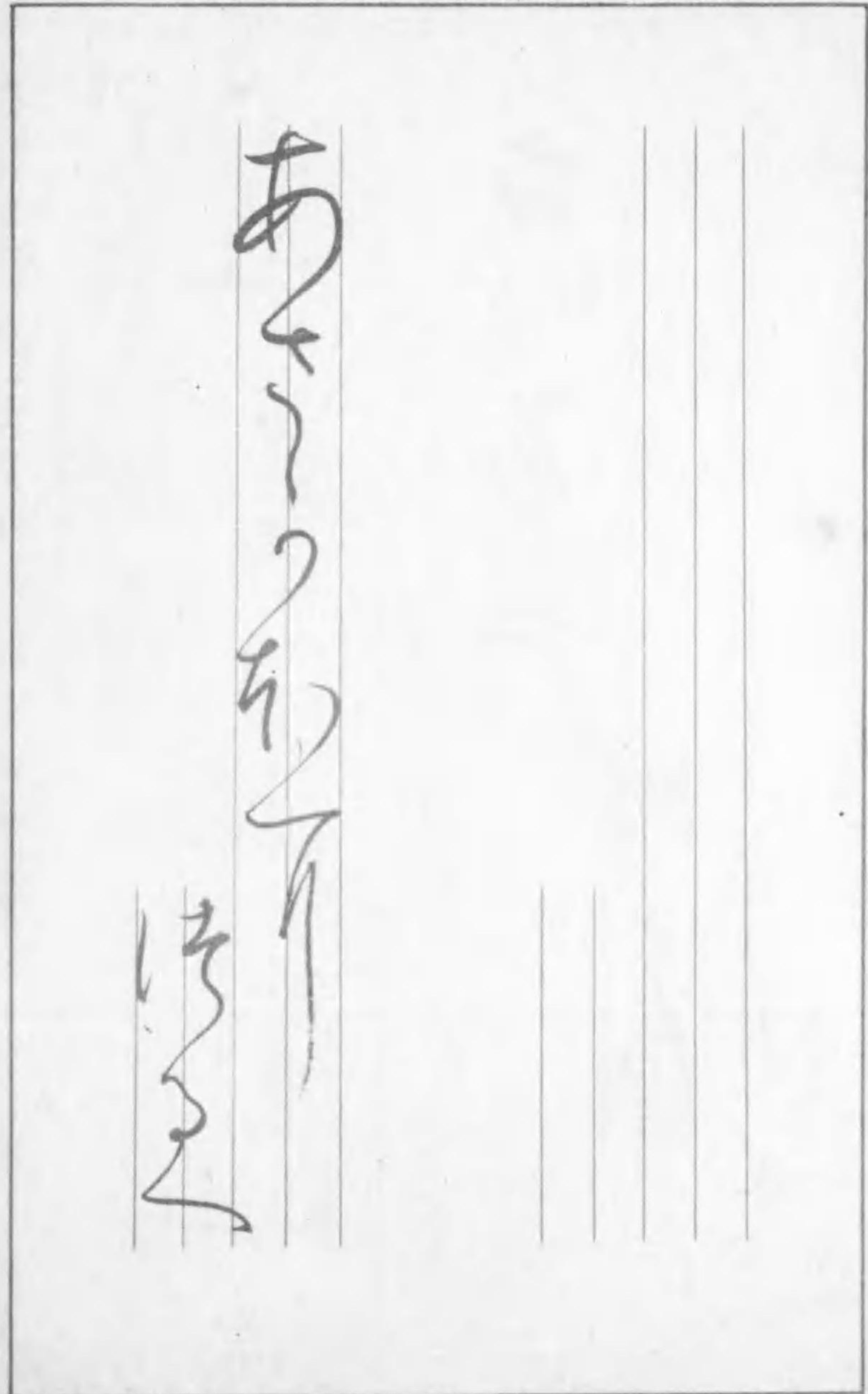
い
ま

紙用習練案新

じ同に上の罫の側右に次、ひ習てに墨を上を字文赤の側左づ先
すまし寶發で部理代は紙用のみの線罫、尚、いさ下てつ習で合約

あ
ら
い
ま
ら
い

じ同に上の界の側右に次、ひ習てに墨を上の宇文赤の側左づ先
すまし裏發で部理代は紙用のみの線界、向、いさ下てつ習で合鈞



春堂書道講座會員諸君へ御知らせ

1 會費の拂込

第二回目からの會費の御拂込は、前月の末日までに御拂込み願ひ上げます。前金切れとなりました時は、本講座發送の際、振替用紙を添へますから、その用紙へ「第何巻より第何巻まで」と御明記願ひ上げます。若しこの御記入を御忘れになりますと、新入會員と間違へて第一巻をお送りする様なことも出来ずから、この點をよく御注意願ひ上げます。また文字はどうか楷書で明瞭に御記入願ひ上げます。尚、貴君の會員番號を御附記下されば整理上好都合でございます。

2 照會の注意

お問合せや御質問等の場合は、往復葉書か又は封書(三錢切手封入)にてお願いいたします。返信料のない場合は御返信を致さないことがあるかも知れませんが必ずお忘れなき様に。尚御轉居、住所の御變更のあつた時は舊住所と新住所とを明記して直ちに御届出で願ひ上げます。若しこの御通知がございませんと、發送が間違つたり遅れたりすることがありますから御注意を願ひ上げます。

3 入朱添削

講座に就いて清書をお出しになりますときは、これを半紙に認ためて本學院「入朱添削部」へお送り下さい。一回に何字づゝでもかまひませんが、整理の都合上、一回必ずらず一枚以内として、各清書には御住所姓名會員番號を御記入願ひ

けます。但し、封筒の表面には信書と同じく三錢切手を御貼りの上返送料として切手三錢御封入下さい。お清書の入朱添削は一回一枚ではありませんが、六ヶ月の間何回でも回数に制限は致しません。
本講座は、毎月講義一冊、手本一冊を以て一巻とし、六ヶ月全六巻(講義六冊、手本六冊)を以て完結します。
(會費一ヶ月一圓廿錢)

新しく入會せんとする方へ

新しく本講座へ入會しやうとする方は「振替口座東京八三一八八番」へ御送金になりますか、又は本學院へ「入會規則書付き内容見本」を御請求下さい。學費が本學院に到着次第本講座第一巻、翌月に第二巻をお送り申上げます。「入會規則書」を御覽になつた方は、その中に添附してある振替用紙で本學院口座(東京八三一八八番)へ御送金下されば宜しいのです。

東京市麹町區富士見町三丁目三番地

日本書道學院

振替東京八三一八八番

曉
人畫筋從履極且
後月御宿總焉
一行
庭之甚幽也
嗟篇
の
景之寂好也
の
庭之甚幽也
嗟篇
の
景之寂好也
の

終